

《完》 [ToV]愛する貴方
に

つきしろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうしようもなく大好きだから。

だから、

死んだならばその証拠が欲しかった。

一応完結したので自分用に文庫化

下画像の左側が該当。右側は一次小説（ハーメルンにはない）。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

73 67 62 57 50 43 34 28 19 13 7 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

157 148 140 135 129 124 118 113 106 98 93 85 79

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

251 245 237 232 226 222 218 210 204 194 183 175 166

あらたな始まり
第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

315 310 303 299 294 288 280 274 265 258

第1話

好きな人だから久しぶりに会えば話したいし、触りたい。あわよくば抱きついたりちゅーしたりいちゃいちゃしたい。

久しぶりに任務から帰ってきた人が恋人そっちのけで連絡一つも寄越さずに飲んだくれて。自分の部屋へ帰ったら帰る報告ももらっていないのにベッドで眠る恋人が居て。

明らかにそのベッドは自分の場所で。

恋人は自分愛用の枕とシーツを抱きしめて着替えもせず幸せそう。

そんなのがいたら襲いたくなるのが当たり前というわけです。所謂「据え膳」と呼ばれるものがあるから。

いただきます、と手を合わせて馬乗りになったのがつい先程のこと。そのままいただくと思つて。

「わー、わー！ ストップ、わかった。分かったから！」

「何？ これからいただくところなのに」

「とりあえず退きなさい。色々説明するから、謝るから」

組み敷いた茶髪の青年が顔を真っ赤にして自分の上に居る女性の肩を押す。酒が入っているのかその力は弱いものだった。だが女性はふくれっ面をしながらも自ら体を退け、青年と向き合うように同じベッドの上に座る。

青年は何故か抱きかかえていた枕とシーツを退けて上体を起こすと胡座をかいて女性と向き合う。

正直なところ、まだ酒が残っていて頭が揺れる。けれど無防備に眠れば自分の大事な物が無くなる気がする。男として。

それは御免だ。

意を決した青年が顔を上げると女性は笑みと共にグラスを押し付けてくる。

酔い覚ましの水。

どうしてこうも、この人は自分の必要とするものを分かってくれるのだろう。

水を飲み干すと間近で女性が柔らかなく微笑んでいた。

「おかえり」

「あー、うん。ただいま。急にごめんね？ ヒスームたちが飲みに行こうって言ったも

んだから」

「鍵が開いてたから泥棒かと思った。そしたら据え膳落ちてた」

「ちが、違うから！　ちよつと飲みすぎて倒れてただけだから！　まあ、でも。ベッド取つちやつたし、うん。ごめん」

青年が申し訳なさそうな顔をする。と女性は目を細めて至極嬉しそうに笑った。

そしてもう一度、おかえり。と青年を迎えた。

青年は彼女に釣られて笑い、もう一度ただいま、と帰宅を告げた。

手を伸ばし、青年の短髪をかき乱すように撫でる。やめろ、と騒いで女性の手を掴む。彼もまた、至極嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「あ、そうそう。ちよつと。撫でるのは後にして見て欲しいもんがあるの」

「後でぎゅーする」

「分かつてるって。ただぎゅーしてたら手元見えないでしょ」

抱え込んでいた青年の頭を離し、改めて向き合おうと彼は懐から細長く、黒い箱を取り出した。箱には赤色のリボンが巻かれている。きつと綺麗な蝶結びをされていたであ

ろうりボンは青年が寝ていたことよって少しよれてしまっていた。

だが、贈り物だと分かる。

女性は差し出された箱を受け取る。

「任務で行った先にさ、装飾品売ってる店があつたんだ。アンタがそういうのあんまりしないのは知ってるんだけど。あ、ちよ。無言で開けないで！」

青年が顔を少し赤らめながら説明しているのに女性は意に介さず箱を開けた。

細いシルバーのチェーンを持ち上げれば音を上げる飾り。

ドッグタグのように重なる二枚のシルバー板。

恐らく表部分になるであろう板には小さな宝石が埋められていて、重なるもう一枚の板には猫のような模様が彫り込まれている。二枚目の彫り込みは不思議なことに淡く赤くなっている。

リヴァヴィウス。

女性は呟いた。

埋め込まれた宝石も、二枚目の赤くなっている板自体にも。少なからず含まれている
鉱石の一種。

「高くなかった？」

「え？ いや、そんなに。つて、値段は別にいいじゃん！」

「リヴァヴィウス鉱石っていつてね。とても貴重な鉱石だよ。とても硬度が高くて、加工も難しいとされてる」

「へえ、そうなの。それ、大事にしてくれる？」

返事の代わりに抱きついた。

青年を押し倒し、首に顔を埋める。片手にはしっかりとペンダントを握っている。

「嬉しい。とても。ありがとう」

「うん。良かった。付けてみてよ」

「付けて」

「寝たままだと難しいんだけど……」

青年の顔の両側に手を付いて肘を伸ばせば幾分かペンダントを付けやすくなる。

ペンダントを受け取った青年は少し体を下げるとチェーンを女性の首へと通す。か

ちん、と留め具をつければ飾りが音を立てる。

シンプルな飾りは過剰な装飾を好まない彼女によく似合う。

「似合ってる。買ってきて良かった」

「お返し、今はないんだ。けどそのうち用意するから」

「そんなの良いんだって！ これだって俺が贈りたかっただけだから」
「そっか。へへ。ありがとう」

片手でペンダントをいじり、女性が笑う。

彼女の姿が愛おしく、青年は両手を彼女の背中へと回す。

幸せとはこういうことを言うのだと実感できる時間。

二人は笑い合う。

恋人同士となり、一ヶ月ほどが経っても彼らは変わらず幸せに過ごしている。

この幸せは永遠に続くのだと信じて。

第2話

下町の広場に子供が集まっていた。子供たちは手にお菓子をもち、走り回る。

集まった子供たちの中心に女性が居た。下町の人より上等な、けれど貴族の人より貧相で、小奇麗な格好をした女性だった。片手に大量のお菓子が入った紙袋を持ち、空いた片手でお菓子を配っている。

一般女性にしては短い、けれど一般男性よりは長い肩へかかる灰色の髪を背中へと追いやり、彼女は笑う。

彼女が笑えば子供たちも笑う。

「えせ貴族のねえちゃんありがとー！」

一人の少年が飴を片手に握りしめて頭を下げる。

「うん。本当に貴族なんだけど。君たちは信じないねえ」

「だってふく汚いし、えらそうじゃねえもん！」

「……小奇麗な服を選んだはずなんだけど。おかしいな？」

首を傾げれば子供たちが笑いながら真似をする。

自分の服を見ながら何が駄目だったのかを考えていると一人の子供が首にかかったペンダントを目ざとく見つける。

一旦興味が変われば子供たちの中でそれは伝染する。

女の子たちは綺麗だと言い、男の子たちは彼氏からもらったのかと冷やかす。

下町の子供たちは自分に正直だ。羨ましくなるほどに。

彼氏からもらったんだよ、良いだろ。子供のようにそう言つて自慢すると男の子たちは頬を膨らまして走り去る。対して女の子たちはどんな彼氏か、結婚するのか。など目を輝かせて女性に詰め寄る。

元々こういった色のついた話をするのが不得手な彼女は少女たちに詰め寄られるとどうにも弱い。好奇心で彼氏からもらったと言うべきではなかったかもしれない。

女の子たちにどう答えようかと悩んでいると少し大きな靴音が聞こえてくる。

「あれ、アンタ何してんの？」

「あ！ キヤナリしよーたいのお兄ちゃんだ！」

ペンダントを渡した本人が通りかかり、少女たちの関心はまた変わる。

お兄ちゃん、と呼んだ茶色の短髪を持つ青年へ駆け寄ると現在の状況を説明する。えせ貴族のお姉さんがいつもみたいにお菓子を配ってた。いつもはしていないペンダントをしていて、彼氏にもらったというから話を聞いていたの、と。

分かりやすく短的。

青年は一拍間を置いた後、顔を赤くして勢いよく女性へと視線を向ける。女性は何故視線を向けられたのかは理解できず、ただ嬉しそうに片手を振り返した。

「あ、わかった！ お兄ちゃんがお姉さんにペンダントあげたんでしょ」

女の子の無邪気な声に、青年は大いにたじろいだ。事実を言い当てられたから、だ。青年の反応に少女たちは大盛り上り。

友達とあれやこれやを話し合い、楽しみながらお菓子を片手に自分たちの家へ向かう道歩いて行った。

珍しくお菓子が余ってしまったな。

お菓子の入った紙袋に片手を入れ、棒付きの飴を取り出すと包装紙を解いて口に咥える。飴独特のべたりとした甘みと、果物に似せた酸味が舌へと染み込んでいく。

同じ飴を取り出そうとして、やめた。

彼女の前に立つ青年は甘いものが嫌いだった。

「ちよーだいな」

けれど青年は彼女が取り出そうとしてやめた飴を見つけると同じように口に入れた。

「甘くないのあるよ?」

「これでいーの。ありがと」

広場の噴水近くにある椅子に座った彼は自分の隣を叩く。

女性が隣に座ったら満足そうに笑って背もたれに背を押し付ける。後ろ向きに伸びをすればすかさず隣の彼女が疲れたのか聞いてくる。

「俺はだいじょーぶ。流石にもう慣れたし。そっちは何してたの?」

「子供たちと遊んでいたんだよ。えせ貴族なんて言われているけどね。認めたくないんだろう。……優しいのが貴族だなんて」

貴族は心の汚い、非道な人間だと思っているのだろう。

そう言つて笑うと青年は片手を伸ばして女性の髪を優しく撫でる。

「アンタ、無理するから。大丈夫？ 貴族だつて色々だろ。アンタみたいに優しいのがいて、俺みたいのもいる。それに、中身のきつたないのもいる」

けどさ。

青年は立ち上がる。傾き始めた陽の中で振り向き、女性に向かって笑う。

「アンタが居るだけで変わる貴族みたいに、アンタが何したつて変わらないのも居るんだよ。きっとそれはどうしようもない。だから、自分のペースでいいんだ。アンタが元気で、より多くの人が変われば良いじゃん。だから、無理しないでよ」

「私が居て変わる貴族」

「居るだけで良いの。ね、だから。ずっと俺のそばに居て」

夕陽が彼の頬を染める。

女性はその姿に目を細め、困ったように笑う。

「私は、もう君のそばを離れられない。君から離れてしまわない限り」

「あはははっ、ないない。俺だって、もうアンタしか見えてないんだ。さ、帰ろ。家まで送ってやるから」

伸ばされた大きな手を、彼女は握った。

強い力で引っ張られ、バランスを崩した先で抱きとめられる。

青年のせいでバランスを崩したのに彼は笑っていて、彼女はふくれっ面を返した。

第3話

知り合ってから初めて喧嘩をした。

普段は隊舎で寝泊まりしているが、週に一度ぐらいの周期で彼女の部屋に泊まりに行く。その日も、仕事の疲れなど忘れて彼女の部屋に行った。

そして自分は苛立ちのままに彼女の部屋の扉を勢い良く閉めて隊舎へ向かった。イライラして道に落ちていた小石を蹴飛ばしたりもした。

喧嘩をしてからもう十日程が経つ。

青年はため息をついた。

そんな青年の姿を見る同じ格好の人たちも隠れてため息をつく。

赤茶の髪をなびかせ、ひとりの女性が青年の背を叩いた。

「喧嘩するのは勝手だけど仕事に影響を出さないでもらえるかしら」

「仕事に影響は出てないだろ」

少し横柄な言葉に赤茶の髪の女性はため息をつく。

想い人と喧嘩をしてからというもの、彼の作る書類には今までになかった誤字脱字が目立つ。書類と言えないレベルの物も多い。どこが影響は出てない、のだろうか。

「アナタにやつてもらいたい仕事よ。今日一日、貴族の護衛をして来なさい。詳しいことは此処に書いてあるから確認しておくこと」

「りよーかい」

書類を片手に、ふらふらと彼はクライアントとの待ち合わせ場所に向かう。

書類には待ち合わせ場所と、仕事内容だけが書かれている。どこの貴族の護衛をするかが書かれていない。

どーせどこかのお高く止まった貴族様が騎士団長に頼み込んで、騎士団長から降りてきた仕事が自分の小隊に来たのだろう。

貴族の可愛いお嬢さんも一緒だったら気が紛れるんだけど。

可愛いお嬢さん。

青年の頭に浮かんだのは灰色のふわふわとした髪。暖かくて柔らかい、彼女が微笑むところも温かい気持ちになれる女性。

すかさず頭を振って彼女の姿を臉の裏から追い出す。けれど女性を思うたびに頭には灰色の髪、柔らかな微笑み。

「迎えの騎士ですかな」

待ち合わせの場所に立っていたのは貴族服を着こなす精悍な老人だった。

ああこれは面倒なタイプの貴族だな、と青年は背筋を正して自己紹介を済ませる。老人は品定めをするように青年をにらみ、小さくため息をつく。

「今日はまた礼儀を欠いていそうな男だな」

「はっははは！ 違いねえ！」

青年の後ろから聞こえたのは大きな笑い声。振り返れば赤い短髪に如何にもヤンチャそうな服装をした男が居る。けらけらと青年を指差して笑う彼の耳にはいくつものシルバーの輝き。

ささいな輝きでさえ彼女に繋がるのは重症だな。

青年は内心苦笑をこぼす。

「大体、あの方は護衛なんざいらねえだろ。一人でも行っちゃまうよ」

「供は私だけで充分だ」

「供？ 貴方が依頼主の方ではないのですか？」

思わず口を出すと赤髪の男がゲラゲラと笑う。まさに抱腹絶倒、といった笑い方だった。

「私は貴族に見せるためのダミーに過ぎん。あの方はこういった格好を好まれない」

「ぜってえ似合うよなー。つかどんな格好でも似合うんだからもつと色んな格好してくれりゃいいのに」

「……不服ながら同意だ。あの方は」

「本人がいないところで何を話してるのかな。ジイ、カレン」

三人の居る場所に凜とした声を通りすぎる。世間話を咎めるような口調。ゆっくりと歩いてくるかすかな足音。

振り返りたくない。青年の心が体を引き止める。それでも、体は反射的に振り返ってしまう。

灰色のふわふわとした髪の毛。柔らかな笑み。呼びかける声すらも懐かしく、そして嬉しく感じてしまう。

「おや、今日は君なんだね。よろしく」

「ご主人ー、こんな騎士より俺のが役に立ちますよー」

「お前は貴族の供に見えないから騎士を定期的に雇ってるんじゃないか。でなければジイと二人で行くさ」

普段見かけることのない、少しだけ乱暴さを感じる彼女の言葉。聞いたことのない口調を向けられるカレンという男を知らず知らず睨む。

「さあ、時間がない。ハルルに向けて出発しよう。馬車に乗るとはいえ警戒は怠らないでね」

返事をするジイとカレンを横目に、青年はじつと彼女の胸元を見ていた。

彼女の首から胸元を彩っているはずのシルバーチェーンはどこにも見えない。彼の渡したペンダントを、彼女は外していた。

第4話

ごとごとと揺れる車内には女性と青年の二人。

灰色の髪彼女は書類を眺めている。青年は馬車の小さな窓から外を眺めている。

彼女の首にペンダントがかかっている。青年は馬車を引く馬を操り、カレンと呼ばれた男が魔物を警戒しない。ただ指示されるままに車内に乗り込んだ。

外ではジイと呼ばれた老人が馬車を引く馬を操り、カレンと呼ばれた男が魔物を警戒するために持ち馬で並走している。

どちらかと言われれば護衛の任はカレンが果たしている。自分のすることなどないじゃないか。

空を眺めながらため息をこぼすと書類を見ている彼女の方向から笑い声が聞こえてくる。

ムツとした顔でそちらを見れば女性は笑って、けれど視線は書類に向けたままだった。

「職務中に何度ため息をつくつもりかな、君は」

「……そんなついでないです」

「デイドン砦までに四回。それからここまでに三回。馬車は楽しくないかい？」

「そんなことはないです。気のせいじゃないですか？」

「そう。じゃあ気のせいだね。ごめん」

話が終われば車内はまた静かになる。

外でジイとカレンが言い争っている以外には貴族の仕事らしい書類を捲る音しか響かない。

静かすぎる車内に、やはり青年の苛立ちは募っていく。

結局、花の街ハルルについても青年は一言も口を利こうとしなかった。仕事に影響を出すなどといった上司命令が頭をよぎるが、どうしようもなかった。気を抜けば舌打ちすらしてしまいそうなくらいにイライラしていた。視線を巡らせれば嫌でも

ハルルの街の住民は貴族の一行である青年たちを喜んで出迎える。町長らしい老人とジイが話しているのを聞くと彼らは定期的にハルルを訪れ、結界のチェックをしているらしい。

住民たちはジイの事を貴族だと思っていて、彼女もそう思わせている。

ハルルの樹も見終わった彼らは町長に誘われ、お茶の場へと赴く。

「あ、君はこつち」

青年もジイたちの後に続こうとすると先程までハルルの樹を調べていた女性に手を引つ張られる。

怪訝な顔をするジイには野暮用があると告げ、彼女は青年の手を引いて歩く。

手を引かれるままに歩いていくとハルルの街の路地から路地へ。段々と人通りは少なくなり、陽の光すら届かなくなってくる。

いったい何処へ行こうとしているのか。

彼女に問うことができれば良かったのに。青年の中でのわだかまりは出立前よりも大きく、言葉を発するだけの余力はなかった。

「おっと！ 旦那じゃねえですかい」

「ああ、やっと見つけた。君を探してたんだ」

路地の角から出てきた猫背の男を見つけ、彼女はようやく足を止めて青年の手を離す。

小汚いローブをかぶった男は彼女と正反対だ。

男は彼女を見るとフードから覗く口元に笑みを浮かべて背負っている鞆を地面へと下ろす。

「そっちの兄さんは騎士すか」

「大丈夫だよ。私が信頼してる騎士の一人だから」

女性の後ろに控える青年からは見えないが彼女は笑っていて、ローブの男が驚いたように動きを止める。

「あー。なるほど。依頼のモノは出来てやすよ。しっかし、帝都にも細工師くらい居てでしょう。何もぼったくりのあつしじゃなくても」

「それは大事なんだ。半端な人に任せたくなかった」

「へへ。そりゃあ嬉しい限りで。依頼のモノをお返ししやす」

チャリン。

チェーンと飾りの擦れる独特の金属音に、うつむいていた青年の顔が弾かれたようにそちらを向く。

細いチェーンの先につながるドッグタグのような飾り。

淡く赤い彫り細工、猫のような模様。見たことが、あった。

「リヴァヴィウスなんて中々仕事でもお目にかかれやせんから時間がかかりやして。その分、お安くしやす」

「いや、いいよ。難しいものを頼んだのは私だからちゃんと言い値で払おう」

「……まあ、旦那がそう言うなら。一応留め具の強化とコーティングをしておいたんで十年くらいは壊れない、と思いやす」

「十年ね。ありがとう」

「あとコチラを。こつちは……そつちの兄さん用つすね」

男が何かを女性へ手渡しながら青年を見やる。ペンダントを首をかけ、男から何かを受け取る。軽い金属の音は女性の持つペンダントと似たような音を立てて彼女の手の

中に収まる。

「へへ。良いもん見せてもらいやした。お幸せに」

「また頼むよ」

「旦那の依頼なら最優先でお引き受けしやす。じゃ、あつしはこれで」

男が去った後、女性は笑みを浮かべたまま青年を振り返る。

胸元には青年からもらったペンダントが揺れる。

「君にプレゼント」

しゃらん、と音を立てて彼女の手から滑り落ちるチェーンの先に繋がるのはシルバーの指輪。彫られているのは狼。彫り口は淡く赤い。

リヴァヴィウス。

今度は青年が呟く。

「仕事の邪魔にならないように指輪にもペンダントにもなるようにしておいた」

青年の首を抱えるように手を通し、未だ唾然とする彼の首にペンダントを付ける。

「同じリヴァヴィウスだね」

「俺、あの……」

「それと、物で釣るような形になってしまったけど謝らせて欲しい。先日はすまなかった。私が考えなしに言ってしまったんだ」

「それ、違うって」

「違うないよ。ごめんね」

「違うって！ ていうか俺にも謝らせてよ。勝手に怒ったの、俺なのに」

「……気に入った？」

騎士服の上で揺れていた指輪に触れる彼女を思い切り引き寄せて腕の中に閉じ込める。

力いっぱい抱きしめると遠慮がちに背中に手が回る。

「ごめん。あのね、実は俺何で喧嘩したか覚えてないんだ。でも、俺が酷いこと言って勝

手に出てったのは分かつてる。だから、ごめん」

「……良かった。君に、嫌われたかと思つて」

「嫌えたら、良かったのにな。駄目だった。他の女の事を考えようとしても絶対ア
ンタが出てきた」

「私は君一筋だよ」

「うっわ、俺の後にそういうこと言うの卑怯じゃない？」

互いに笑い合つて、互いのペンダントに触れた。

離れる事はできても、別へと乗り換える事は不可能だった。

彼らの意識の中に居るのはもう互いの存在だけ。他の存在が入り込む余地などない。

ハルルからの幸せな帰り道、沈んでいく夕日を見ながら青年は考えていた。結局喧嘩の原因は何だったのだろうか。彼女は自分の言葉が悪かったと言つていた。けれど自分は覚えていない。

ガタン、とひととき強く馬車が揺れると首のペンダントが音を立てる。

甲高い金属音は青年に幸せを思い起こさせ、喧嘩の原因はまた忘却へと押しやられていった。

第5話

その日は、珍しく二人共が女性の別荘に居た。

女性は仕事を一区切りさせるまで終えて、青年は一日の非番をもらっていた。何もな
い休日というのは久しぶりだ。

青年の非番は彼女の仕事を立て込んでいて、彼女の仕事が一区切り付くときに青年の
非番はない。付き合い始めて初めてのんびりできる休日。

一つのソファアに並んで座り、世間話に花を咲かせていた。

ただ隣に座って話してるだけでも時間は過ぎていくが、じつとしているのは性に合わ
ないのが青年だった。

「ねえ、外にデートしに行こ」

「うん？ そうだね。ちようどご飯時だしどこか行こうか」

のんびりしたカップルだと思う。

青年はここに来るまでも女性と付き合い合ったことはあつた。けれどこんなのにびりした付き合いは初めてだ。誰のペースでもないただのんびりした時間。こんな時間も悪くない。

自分の性に合わないだけで。

隣で女性が立ち上がるのと同時に、家のインターホンが鳴らされる。滅多にならないインターホンに二人して首を傾げる。

きつとジイかカレンだろう。なんとか言いくるめるから待つてて。

青年の心情を察したような言葉に青年は笑い、いつてらつしやいと見送る。

一度知り合つてからジイはやけに優しくなり、カレンは会う度に喧嘩を売ってくるようになった。

「カレン君に聞いて来たんだよ！　良い家だな！」

玄関から聞こえた声は思ったものと違った。誰でもない。聞いたことのない声。ペンダントへ寄せていた視線をあげて、玄関を見やる。

玄関から勢いよくやってきたのは小奇麗な白のローブを着ている見るからに貴族の男。白髪まじりの髪も綺麗に整えられている。

次いで妻らしい同じくらいの年齢の女性。こちらも小奇麗な格好をしている。

「え……？」

相手が覚えているかどうかはわからないが、青年は相手のことを知っていた。慌ててソファアールから立ち上がると身なりを整えて深々と礼をする。

「お久しぶりです、ルディアース様！」

「君、あれ？ え、え？ ちょ、ええ!? か、母さん！ アトマイスのとこの子が居るよ！」

「あらまあ。じゃあ貴方があの子の大事な人ね。お邪魔しちゃったかしら」

外見を見ると分からないが、先ほど玄関へ行った女性の両親だった。

「父さん、その子は礼儀正しいんだ。いい加減返事をしてあげて」

「か、かか、帰るぞ母さん！」

「あらあら。じゃあまた来るわね。アトマイス君、うちの子をよろしくねー」

返事をしろという娘の言葉には耳を傾けることなく、父親が母親の手を強く引つ張り家を出て行った。

嵐のようにやってきては挨拶もせずに出て行った二人を見送り、残された青年は深くため息をついた。

いくら元貴族で現騎士だとは言っても上流階級の大貴族を相手にするとどうにも緊張してしまう。

一瞬で凝り固まった肩を回す。

「ごめんね。あの人たちいつも急に来るんだ」

「あー、どのみち一回くらい挨拶してきたかったし。そうだった、アンタもルディアースの次期当主だもんね」

「気にするかい？」

「いや。気にしてもどうしようもないっしょ。飯食いに行こー」

「そうだね、行こうか」

気にしたところで諦め切れるような関係じゃないから。

手を取り外に出かける二人を家の影から覗く二つの影があった。先ほど出て行つたはずの、女性の両親だった。

「あれ、ホントに恋人？」

父親の言葉に母親が笑う。それ以外に見えたら怖いですね、と。

母親はあらかじめ娘から連絡を受けていた。大事な人ができた、別荘で時折いっしょにすごしている。元貴族で今は騎士をしている。

喧嘩をしたりもするが、幸せだ。

父親へ届かないように送られた手紙だった。

「幸せそうに笑えるようになったんだな」

「幸せだと思いますよ。私たちじゃあの子を笑わせるのが限界でしたから」

「アトマイス君とは一度話すぞ」

「ふふ、どうぞどうぞ。負けず嫌いですものね」

家の壁を力いっぱい握りしめて、父親の男は力強く言った。

彼と何十年も共に過ごしてきた女性はいつも何も変わらない彼に笑いかける。アトマイスの子は、もうあの子を幸せにしていますけどね。

最愛の妻であり、自分のことをよく知る女性の言葉に男は壁を握る力を強めた。どこの家でも父親は娘を渡したくはないようだ。

第6話

どうしてこうなった。

青年は男と並んで歩きながら呆然と考えていた。失礼なことをした覚えはない。否、彼の娘であり次期ルディアース当主と付き合つてはいる。

騎士に入る前は不真面目なことばかりやらかしていた自分のことだ。そういう意味での覚えなら数えきれないほどある。だからといって大貴族と、今付き合っている彼女の父親と並んで歩くなど恐怖イベントに他ならない。

緊張しすぎて肩や腰は悲鳴を上げている。

今どちらの手を出してどちらの足を出したのかさえ意識する。

「そんなに緊張するかね」

「そりゃも、いえ！ そんなことないです」

加えてルディアースの現当主と言えば厳格で剣の達人としても有名だ。過去に彼を

襲つた賊は一人残らず彼自身に叩き伏せられている。

本当かどうかも分らない噂だらけの大貴族。

今更ながらそんな貴族の娘といふんだよな。

青年は悲鳴を上げる背筋を伸ばしながら前を見やる。

街を案内してほしいという名目で隊舎から連れ出されてからというもの、とりあえずめぼしい所を案内してはいるが反応は一切ない。

「アトマイス君、僕はフアリハイドで君の良い噂を聞いたことがない」

やはり。

ルディアース当主はフアリハイドでの評判を知っている。

それもそのはずだ。ルディアースが本邸を構えているのもアトマイス家と同じフアリハイドなのだ。

そういえば、綺麗な跡取りが居るといつて侵入しようとしたこともあった。思いの外嚴重な警備でかなわなかったけど。

もしもあの時に出会っていたらどうなったのだろう。今のようになれたのだろうか。

「だが、彼女の幸せそうな顔は初めて見たんだ」

「幸せ、そう?」

「彼女から聞いたかもしれないが、私たちに血の繋がりは無い。一昔前に傷付いた無表情な女の子を拾った。彼女は笑い方も泣き方も知らなかった」

まるで人としての記憶を持っていないかのようだった。

ルディアースは溜息をつく。

今思い出してもひどいものだ。泣くという本能すら無い彼女はどれだけ大きな傷を負っていても、痛くても、表情を変えることすらしなかった。

妻と二人がかりで笑うこと泣くこと怒ることを教えた。

彼女は必要な時に笑い、必要な時に怒った。知識として知ったから。

だから彼女が無意識に笑ったところなど見たことはない。

けれど、君と居るときは違うようだ。

ルディアースは笑う。君と居る時の娘はとても幸せそうに笑う。

「君は遊びのつもりじゃないんだね?」

「もちろんです」

「いつ結婚するんだい？」

「今準備……え!？」

「準備中か、何か不都合が起きたら私に言いなさい。大事な娘の結婚式だ。邪魔があれば何があつても消してあげよう」

突拍子のない問いかけ、思いもよらぬ言葉。

青年は足を止めたルディアースを振り返る。彼は笑っていた。厳格な大貴族などどこにもいない。

ただ一人。娘の幸せを願う父親が笑っていた。

言っていることの規模は大きく、おそらく彼はそれを実行するだけの力も持っている。

けれど一人の父親だった。

青年が力強く頷いたのを確認し、彼が笑う。

「ああ、そうだ。無いとは思いますが君が娘を悲しませたり、不幸せにしたら……分かってるね」

「必ず、必ず幸せにします!」

「よし。じゃあそろそろ戻ろうか。仕事中に呼びつけてすまなかつたね」

楽しくはない。極度の緊張の中におかれた帝都観光は、楽しくなくても暖かくなるよ
うな時間だった。

昨日探しに行つたとある物。これから必要となる物を思い、笑つた。

きつと彼女はあれを見せると驚きながらも笑つてくれる。

笑つて、迎えてくれるんだ。

思わず頬が緩むとルディアースが隣に並ぶ。

「そうなると君が息子か」

「お義父さん！」

「しかしその呼び方は禁止だ！ 娘以外に父と呼ばれるつもりはない！」

「ええー」

面白かつた。父親とはこういうものなのか、と感じた。

貴族らしくあれ、家に居ろ、正しい言葉で話せ。

貴族の中の父親は貴族らしくあることだけを考えているものだと思つていた。現にアトマイスの当主は青年に貴族らしさを問うた。言うことを聞くことは無かつたが。

父親というものを気にした時期もあつた。

だから、青年にとつてここから騎士隊舎までの帰路はとても楽しかつた。

「君に、一つ失礼なことを言わせて欲しい」

隊舎の前で、ルディアースは足を止める。

青年が振り返れば申し訳なさそうな顔をした男が見つめていた。

「君は良い子なのだろう。それこそ娘の選んだ人にケチを付けるつもりはない。けれど、僕は、アトマイスが嫌いだ。アトマイスだけじゃない。大半の貴族が嫌いだ」

娘と一緒になるというなら、きつとアトマイス家はルディアースに取り入ろうとするだろう。

娘はきつとそれを分かっている。

けれど、君は？

問いかけられ、青年は言葉を飲み込んだ。

考えていなかった。自分と家のことなど。最近では自分が貴族であることも忘れていくことが多い。だから家名がどれほどの力を持っているのかも、自分が目上である貴族と一緒にいるということが家に何をもたらすかも、考えなかった。

「僕は貴族の典型とも言えるアトマイスが嫌いだ」

「……。俺は」

家に良い思いはない。

けれど恩はある。

「俺は、それでもあの人と一緒に居たいと思っています」

ルディアースにどれだけ迷惑をかけるのだとしても。自分の家を危険にさらすのだとしても。

「ふ、あはははは！」

返事を聞いたルディアースは大声をあげて笑った。それこそ、本当に貴族とは思えない笑い方だと青年は思った。

「悪かった。君を試させてもらった。僕は疑り深くてね、娘の言葉だけで信用はできなかった」

「信用に足る言葉でしたか？」

「充分だ。アトマイスのことを君が心配する必要はない。君は娘を幸せにしてやってくれ」

頭に手を乗せられると、目頭が熱くなった。

何故泣きそうなのかわからなかった。認めてもらえたからか、家を気にしなくて良いからか、父親が出来たからか。

彼女の両親はフアリハイドへと帰っていった。父親は娘との離別をひどく悲しみ、母親はそんな父親を引きずっていった。

彼女に「何か良い事あった?」と問われ、良い両親だなと返すと私の両親だからと
もな言葉が返ってきた。

良い両親だった。良い両親ができた。

「幸せにするから」

「? うん、よろしくね」

手をつなぐと、彼女は幸せそうに笑った。

第7話

「幸せそうだな」

「おかげさまで。そちらはどう？ 貴方の理想は叶いそうですか？」

「……ようやくスタートラインといったところか。君たちのおかげで着実に進んでいる」

銀の髪に橙の騎士服。騎士団長と呼ばれる彼は彼女のことを知っているようだった。騎士団長の部屋でお茶を交わしながら机の上に散らばる書類を眺める。

街の住人や貴族から騎士に送られた要望や苦情をまとめたものと、騎士に当てられる資金を記載されたもの。

「良いのか。彼は君がこうして騎士団と関わっていることは知らないんだろう？」

「アレクセイ。実はこの前彼と喧嘩したんだ」

「ほう、珍しいな」

急に変えられた話題にも彼は、アレクセイは表情を変えず話の先を促す。不用意な一言で彼は怒って、十日ほど会うことも口を聞くこともなかった。つらかった。

「何を言つたんだ？」

「君を守るから、と言つてしまった。彼が騎士であることもプライドを持つ男の子であることも忘れて、つついね」

「……それで騎士団に関わっていることも言えないのか」

「思いの外、私の中で彼の存在は大きくてさ。喧嘩してる時怖くて何も手につかなくなつたんだ。もう、あんなのは嫌なんだ」

「君がそう言うなら私から言うことはない。私を振つたんだ。幸せな姿を見せてくれればいい」

「根に持つねえ。安心して、幸せだよ」

笑つて一枚の書類を指差す。

間違つてる。騎士から挙げられた書類の一枚。下町からの税の徴収に関する書類

だった。

何の問題もなく徴収が行われている。これまでに何の問題も起きなかったと報告された書類。

これは違うと彼女は首を振る。

税の徴収は確かに行われている。だが、騎士の取る方法は横暴なものであることが多く、又、料金すらもおかしいことがある。

暴力を振りかざされれば下町は従う他の道は存在しない。

だから、間違ってる。

滞りは無かったとしても問題があるのだから。

「君はまた下町に行っているのか」

「子供たちにえせ貴族と呼ばれてるよ」

「えせ貴族、か」

「イメージ変えなきや。アレクセイが理想を貫いてくれればきつと叶う」

問題ありと指摘された書類を片手にアレクセイが頷く。

彼らには繋がりがあつた。

「そしたら誰も私を町娘、なんて言わないよ」
「君も相当根に持つな」

平民街で出会い、互いに身分を忘れ語り合う時間を持った二人には似通った夢があった。

アレクセイは夢を女性と共に叶えたいと言葉を贈り、彼女は彼の言葉を斬り落とした。個人で動いた方が効率がいいこともあると彼女は知っていた。それに、彼女はまだ『幸せ』も『二人でいる喜び』も知らなかった。

アレクセイは諦め、ただ業務に当たる。

彼女は普段通り、仕事に務める。

そうして偶然仕事で居合わせた時ですら、彼らは一泊驚いただけですぐ仕事へと取り掛かった。

夢を叶え、もう一度楽しくお酒を飲もう。

彼らの約束だったからだ。

それまで、特別な関係も持たずただひたすらやるべきことをやるしかない。

アレクセイはそう思っていた。もちろん、彼女が恋人を持ち幸せになっているとは最

近まで知らなかった。

「上手に笑うようになったな」

「うん。両親にも言われたよ」

「いらつしやつていたのか」

「うん。彼に突つかかかってから納得して帰ってつた」

「そうか。結婚式には呼んでくれるのだろうか？」

「彼が良いって言ったらね」

「なに、良いと言わせるさ」

職権乱用。そう言って笑う彼女の髪を撫で、アレクセイが立ち上がる。時間があるわけではない。こういった非公式な会談に時間をかけすぎれば面倒なことになる。

他の貴族たちに見つかれば密談を開くことも出来なくなる。本来なら大貴族の跡取りである彼女が騎士団のトップと関わってはいけない。

「私の言葉を鵜呑みにしないでね。嘘をついてるかもしれない」

「わかっている。確かめてから行動に移すさ。……彼とは？」

「今日の夜会う予定だよ。忙しくなりそうなら使つてやつて。彼にとって仕事も大事」
「その言葉に甘えるところでしょう」

ゆったりと立ち上がり、女性はフードを深くかぶる。そうしていると研究者に見える。いつかハルルに向かったときと同じ出で立ちだ。

アレクセイが笑い、女性が笑う。

「ではまた」

「またね、アレクセイ。あ、今度はお饅頭がいいな」

「用意しておこう」

彼女は幼い子供のように崩れた笑みを浮かべ、騎士団長の部屋を後にする。

一人残された部屋でアレクセイは彼女の髪を撫でた手を見つめる。

「君は思っているより好かれているのに気付いているか？」

自分もその一人だと、知っているか？

彼女はただ一人しか見ない。だからこそ思いを諦めきれない。自分があれほど彼女に愛されたのなら、そう思う自分を振り払って彼は書類へ目を落とす。

今はただ約束のために目標を果たそう。

第8話

彼が落ち着かない。

持ち帰った仕事を女性が進めている間、廊下を行ったり来たり。しばらく音が聞こえなくなつたかと思えば今度は走つてどこかに出掛けては走つて帰つてくる。

最終的に今、彼は女性の部屋の前で立ち止まつている。

足音が部屋の前で止まつたのだから、部屋の前にいることは間違いないだろう。

彼が何をしているかは置いておくとして、このままふらふらされては仕事も疎かになつてしまう。

扉を開けると扉をノックしようとしていたのか片手に拳を作り肩の位置まで上げていた。

「さつきからどうしたんだい？」

「あ、あの。今時間ある？」

「……珈琲でも淹れてこようか」

「ううん！ いらぬ！ お邪魔します！」

まるでいつもと別人。

彼は女性の脇を潜るようになり過ぎ、本人曰く座り心地のいいソファへ座って女性を隣へ招く。

いつものように隣へ座る。

相変わらず落ち着かない様子で彼は視線を彷徨わせる。

「浮気したとか？」

「違うって！ 何かある度にそれ言うの止めてくれない？ ちょっと傷つく」

「何かあったの？ ずっと落ち着いてないよね」

「あー、うん。えつとね。近々騎士がいっぱい送られる魔物掃討作戦があるんだ」

そうなんだ。

頷く彼女は知っていた。テムザ山の近くで行われる大規模魔物掃討作戦。大隊をいくつか動かして挑む作戦だ。

目標はとある人物の警護と、新魔導器の試験運転。そして魔物の掃討。

作戦自体は知っていても青年もその作戦に参加することは、知らなかった。

「でき、それが遠征任務になるからしばらく会えないんだ」

「お仕事だからね」

「そう、で。でき、帰ってくるまで時間があるんだけどさ」

落ち着かない様子のまま彼はポケットに手を入れる。

取り出したのはいつかプレゼントしたペンダントが入っていたのと同じ黒い箱。だが、大きさは今回のものの方が幾分か小さい。

正方形の黒い箱は手のひらに乗るサイズ。

「帰ったら、帰ったら結婚してください！」

ここで箱を開いて指輪を見せるのを忘れるところが何とも彼らしい。

思わず笑う。

いつものような笑い声に青年が顔を上げる。耳まで真っ赤にした彼の顔を見て、彼女はまた笑う。

「結婚しても、私は恐らく忙しいままだ。男性と関わることも多い。それでも良いなら、よろしく願います」

「いや、忙しいのは俺もだし。え？ あ、よろしく願います！」

ゆるりと差し出された片手を両手で包み込み、青年は顔を真っ赤にしたまま満面の笑みを浮かべる。良かった、と笑う。

青年が笑ってくれるなら。

いつか言ってしまった守るといふ言葉。出来ることなら実行したい。この子の笑みを守りたいから。

自分に幸せを教えてくれた彼に、幸せになつて欲しいから。彼の頬に手を添え、そつと額に唇を落とす。

「無事に帰ってきてね」

「う、うん。でさ、結婚式に呼びたい人、考えといてね」

箱の中の指輪を女性の指に通し、青年は彼女を抱きしめる。

「幸せにするからね！」

「ありがとう」

首元に顔を埋める青年の背中へ腕を回す。

帰ってきたら色々お祝いだ。そう言つて笑う彼女の左手にはシルバーの煌き。任務から帰つてこれば、彼の左手にも嵌められる輝き。

「こいつ、持つてくから」

彼が触れるのは彼女にプレゼントされたリヴァヴィウスの指輪。

「じゃあ、お互いに寂しくないね」

彼女が触れるのは彼にプレゼントされたリヴァヴィウスのペンダント。

互いに互いの存在を想うことはできる。ただそれでも寂しいから。

「帰ってくるよ、だから覚悟して待っててね。イチトシ」
「心して待ってるよ、だからちゃんと帰ってきてね。ダミュロン」

そうして彼女の家をウキウキとした足取りで青年、ダミュロンは出て行った。
女性、イチトシはその姿が見えなくなるまで玄関先で見送っていた。

帰ってきたら夫婦だ。

そんな思いを、胸に抱いて。

そして彼は彼女の元へ帰ることはなかった。
いくら待っても、どれだけ探しても。

彼女に届いたのは『ダミュロンという騎士は戦死した』という訃報だけだった。

そして彼女の世界は一変する。

彼女の世界は色も温度もない、かつての世界へと戻っていった。
彩りの消えた世界で、彼女はひとつの誓いを胸に旅に出る。

” 幸せ ” を、探す旅に。

第9話

どことも知れぬ場所を歩いていった。

街道を歩き、港で船に乗った。

気付くと人の多い街へ出ていた。

意識を取り戻し、目の前の建物を見上げた。大きな門、猛々しい石像。首なしの石像。首のない状態でも違和感が無いのは元々素晴らしい石像だったからなのか。

開け放たれた門をくぐり、大きな廊下を進んでいく。

すれ違う人は皆興奮に満ちた表情で今日の試合がどうだった、次の試合はこう思う。そんなことを話していく。

大会や決闘。

この街は、ノードポリカ。

ギルド戦士の殿堂が運営する闘技場都市。

ほとんど意識のないままよくここまで来たものだ。帝都ザーフィアスからは程遠い場所だ。

「大会の参加者か？」

コロシアムの入口を眺めていると横から声をかけられる。
見れば体格の良い男が小さな扉を守るように立っている。

「参加者に、見えましたか」

掠れた声に自分で驚いた。自分の身にはそれなりに気を使っている。ここ十日ほど、誰とも口を聞いていなかったからか。久しぶりの言葉に身体が間に合わない。

声をかけた男も驚いたように目を見開き、訝しげにも心配げにも見える表情で彼女を見る。

「すみません。音に惹かれてこちらに来てしまっただけなのです」

「貴女は……、まさかイチトシ様ですか？」

「はい。イチトシは私ですよ」

関わったことのないギルドの人間に名を知られている。

不思議で仕方ないが扉を守る男の姿勢は丁寧と言つて過言ではない。きつと良識も兼ね備えているだろう。

帰ろうとした足を止め、振り向く。

「統領（ドゥーチエ）ベリウス様より、貴女が来たらお通しするよう仰せつかっています。どうぞ中へ」

守っていた扉を開き、中にイチトシを招く彼は酷く真剣な顔をしている。冗談ではないと彼の表情が語る。

けれど、イチトシには統領に呼ばれる覚えがない。

貴族として暮らして十何年も経つ。ギルドに関わることさえ滅多にない。

統領ベリウス。古くよりこの土地を守り、闘技場都市を治めてきた戦士の殿堂首領。もちろん、関わったことも、見たことすらもない。

「私に何用でしょうか。私はまだ貴族たちに影響のある身。統領と呼ばれるギルドの重鎮とお話するのは」

『相変わらずじゃの。何、そなたの姿を見るだけじゃ。そこに居るナッツも他言はせぬ』

ただ単純に驚いた。

よく通る声とは違う。年老いた女性のような声だった。扉の先に人影は見えないが、声は確かに響いた。

ナッツ。統領にそう呼ばれた彼は先の言葉を肯定するように頷く。

信用に足るような物証も、時間もない。

「貴女は私のことを知っているのですか」

扉の奥に問いかければ優しい声が返ってくる。とても敵対するなどは考えられない優しい声。

『そなたの知らぬことを知っておる。話すことはできぬが、そなたもそれは望まないじゃろう』

「……少しだけで良いなら」

『すまぬの』

扉をくぐると長い階段が見える。今からここを登るのかと思うとつらい。一步を踏み出せば背後で扉が閉まる。

戦士の殿堂統領ベリウス。噂に名高きギルドの重鎮。

一体どんな方なんだ。

この日はイチトシの世界に少しだけ色が継ぎ足された日となった。

第10話

ト。
ノードポリカとは違う日常的な喧騒に包まれる夕暮れの街、ギルドの巢窟ダングレ

動きやすく丈の長い緑のパーカーに身を包み、彼女は初めての景色を眺めていた。

ノードポリカでベリウスに招き入れられ少しだけ話をしたイチトシはギルドの面白みを知った。帝国のように法律が存在しない。代わりにギルドごとの掟が存在する。

掟は絶対の存在。破れば相応の制裁が加えられる。

例えば帝都でもお馴染みの行商人も、幸福の市場（ギルド・ド・マルシエ）というギルドが取り仕切っている。

帝都では見かけない商品の数々に思わず露店を見ていた。すると連れの人居ないよと店員に言われて初めて自分が迷子に近しいものとなっていることが分かった。

だからといってこのように楽しそうな場所で人を待つ落ち着きは持っていない。

彼女は笑って街の観光を続けていた。

ふ、と。

視界の端に金色が映り込む。

めつたに見ない美しい色に目が止まる。

膝を抱えて蹲る少年だった。

隣に座って頭に手を置いた。

建物の影になる路地裏。差し込む夕陽の赤色も届かない。

そんな場所で誰かが触れてくるとは考えなかった少年が弾かれたように顔を上げてイチトシを見た。

美しい金髪に鼻筋を真横に走る傷跡が印象的な少年。まるで刀傷のように見えるそれは最近できたものなのかまだ少しだけ赤い。

「こんにちは」

金髪から手を離し、笑いかけてやると少年は機嫌悪そうに反対の方向を向く。

「目、赤いよ。泣いてたの？」

「うるさい、アンタには関係ないだろ、余所者」

「そう、余所者。この街は面白いね、色々見てたら迷っちゃった」

「いい大人が」

「いい大人なのにねえ」

嘲り笑うために視線を寄せた少年に顔を寄せた。少年は触れそうな距離にあるイチトシを見ると顔を真っ赤にする。

「帝都より面白い街だよ」

「ていと……。帝都って、何があるんだ？」

初めて反応を示した少年。彼女は笑った。

帝都で象徴的なのはまず、お城。次に結界魔導器だろう。夜になれば結界魔導器の光がとても綺麗だ。

もちろん綺麗なものだけではない。見たくないものも多い。だから私は帝都よりもダングレストの方が好き。

ダングレストの面白さを語る話を聞いているうちに自分の育つ街を褒められている気分になった少年が照れくさそうに笑う。

「いい街だろ。この街はじいちゃんが……」

片手を広げ、自慢するような声で紡いだ言葉は空に消えた。

「オレ、じいちゃんと喧嘩したんだ」

「あら。そうなの、おじいさんと喧嘩したの」

「ひでえんだよ！ オレは、オレはじいちゃんの力になりたくて戦ったのに怪我するか引つ込んでろって言うんだ！」

「おじいさんにとつて君が大事なんだね。守られるより守りたい。君がおじいさんの力になろうとしたのと一緒」

一緒。

「ただ、表現が下手だったね。おじいさんも怒鳴らなければ良いし、君も逃げるべきじゃ

なかった。もう一回話しておいで。きつとおじいさんも今の君と同じ気持ちだよ」

「話、聞くとと思うか？」

「君と同じ気持ち。君は話したい？」

こくり。頷く姿。

少年が立ち上がり、イチトシが並んで立つ。

いつてらっしやい。軽く背中を押すと少年は彼女の片手を引つ張った。

「……お姉さん迷っちゃったから少し一緒に行ってもいいかな？」

自分を掴む小さな手を握ると強い力で握り返される。

「ちよつとなら、案内してやる」

彼女の手を引き少年は歩き始める。

向かう場所に何が居るかなど、もちろんイチトシは知らない。

第11話

ダングレストの中心にある大きな建物の中にいた。

少年に引つ張られるまま建物の中へ連れられる。

見張りが二人もついた扉をグツと押し広げると独特の威圧感と視線がイチトシに集中する。そして、彼女がこの街に来るまで護衛をしてくれていた男の姿も見える。

彼はイチトシの姿を認めると慌てて駆け寄ってくる。

「イチトシ様！」

ノードポリカでイチトシとベリウスを引き合わせたとも言える一人。ナッツと名乗った体格の良い人は少し目を離れただけでいなくなつたイチトシを探したが見付けられず、応援を頼むため、先に目的地へと足を踏み入れていた。

「あれ、ナッツさんだ。良かった、合流できた」

「ご無事でしたか……」

「うん。この子が案内してくれたから。じゃあここがユニオン」

ダングレストにあるというユニオンという組織。

いくつものギルドをまとめた組織。かつて騎士団をも退けたという。街の中心にある建物に拠点を構えるその組織に彼女たちは用があった。

正確にはナッツの隣に立っているナッツよりも大柄な男に。

「じいちゃん、あの、俺」

「ハリー。今は客がいるんだ。下がってろ」

どうやら少年ハリーの言うおじいさんとは今イチトシたちの前にいる巨漢の事のようにだ。実際使っているのかどうかは調べようがないが常人の数倍はある筋肉。

体重を落とさなければと筋力トレーニングを頑張る女性たちも突き詰めるとあんなことになるのだろうか。恐ろしい。

「あ。私は後でいいですよ。外に居ますので、お孫さんの話を聞いてあげてください」

ナッツの心配をよそにイチトシは優しく笑い、ハリーに向けて片手を振った。巨漢の男は隠しもせず眉を寄せると視線をナッツへと向けた。

「……。近くに俺が拠点としてる酒場がある。飲んで待つてろ。おい、案内してこい」

控えている見張りに声をかければすぐに行動する彼ら。客人だからと丁寧な対応にイチトシは頭を下げ、同様に丁寧な対応で返す。

「貴族らしい」対応にギルドの人は焦り、ナッツが場を諫める。彼女が貴族であることは目的の人物以外に知られては面倒だ。

叱るように彼女を見ると彼女は誰にも見えないよう両手のひらを合わせる。ごめんね。音のない言葉が聞こえてくるようだ。

ため息が出る。

統領の頼みで貴族一人を彼に会わせなければならぬ。加えて女ひとりの言葉でベリウスの紹介だと信じてもらうことはできない。

戦士の殿堂二番手としても恐れ渡っているナッツならば。

だが、どうだろう。

街に着いた途端彼女は勝手にいなくなり、勝手にユニオンに入ってきた。

すごいといえば確かにすごいだろう。だが、勝手にすぎるといえば勝手にすぎる。

貴族とはこういうったものなのか。絶対に彼女がおかしい。

ユニオンのトップ天を射る矢（アルトスク）が拠点のひとつとする酒屋、天を射る重星。

目的の人と話すために通された特別な部屋で、彼女は水を片手に周りを見回している。

「イチトシ様、その、統領とはどういった関係なのですか？」

そもそも、自分が敬愛する主と友人だという彼女は一体。

いい機会だと意を決して話しかけると彼女は水のグラスを両手に持ったままニツコリと笑う。

「分からない」

「は？」

予想外の言葉に間の抜けた声が出てしまう。

「ただベリウスさんは私の忘れた記憶の中で出会った友達だそうです」

「記憶、ですか」

「私は両親に拾われるまでの記憶が無いのです。なので貴族というのも嘘みたいなものですね」

「それは、言っても良いのですか？」

「貴族としての籍は近々捨てる予定です。今はもう、力ある立場である意味も目的もふふ、初めましてドン・ホワイトホース様」

ナッツの方向。酒場の入口に立つ男。

ナッツは、振り向くことができなかつた。

何故かは分かっている。

ふわりと柔らかく微笑むイチトシが彼女だと思っていた。ふらふらと目的なく歩き

ながら気になるものへ手を伸ばすのが彼女だと思っていた。
ナツツの前で光無い瞳を開く虚ろな体には、誰がいる？

第12話

「手紙は読んだ」

ドンは重たい口調でそう言うといチトシの向かい側に腰を下ろして酒を頼んだ。ナッツから見ると酷く機嫌が悪そうに見える。ギルド全体の連合とも言えるユニオンのトップを前にして、緊張しないわけがない。

体を固めるナッツとは違い、イチトシは柔らかなく笑ったまま軽く頭を下げる。

「私がベリウスさんと話した内容がそのまま書かれているのであれば、不本意、ですか？」

「不本意、とは少しちげえな。理解出来ねえだけだ。貴族の嬢ちゃんがギルドを始める理由がな」

え。

「ナッツが思わず声を上げる。何だ話してねえのか。ベリウスさんとは一対一で話していたからナッツさんは知らないのですよ。」

ドンとイチトシの何気ない会話も頭に入っていない。

「貴族が、ギルド？」

「理由は情報が欲しいからです。貴族では得られないより多くの、より広い情報」

「ベリウスのやつと仲が良いなら何故俺のところに来た」

「その方が融通が利くだろう、と言われました。戦士の殿堂（パレストラーレ）はノードポリカを重視しすぎて身動きが取れない。だったら少人数のユニオン所属のギルドを作れば良い、と」

「はっ、それでお貴族様がこんな街にか」

馬鹿にしたようなドンの態度にもイチトシは笑みを崩さない。

「人魔戦争で失ったものを探したいのです」

人魔戦争。その名にナッツも、ドンも動きを止める。

「亡くしたモノは戻らねえぞ」

酒を片手にドンは突き放すように言う。ウエイトレスが持ってきた料理に適度に手を付けながら、イチトシはわざとらしく考えるように首を傾げる。

「本当に亡くしたのならその証拠が欲しい。彼の遺体でも、死んだのを見た証言でも。でなければ諦めがつきません。見苦しいと思われるならそれでも良い。貴族を嫌い手を貸したくないのであればそれでも良い。私は今、ひとつでも多くの手が、力が、情報が欲しいだけです」

まっすぐにドンを見やる。それは睨むようにも見えるほど強い視線。
イチトシの態度にナッツはヒヤヒヤしている。

貴族がギルドの町に居るだけでも危険なことが多いのに何故目の前の華奢な貴族の女性はこの世界のギルドに喧嘩を売るようなことをする。

ドンは無表情でグラスの中の酒を一気に飲み干す。

追加の酒を頼み、ドンは不意にイチトシに酒を勧めた。

彼女はいつもの様に柔らかな笑みを浮かべ、ではオススメを、と返事を返した。ついでのようにナッツにも希望を問いかけてナッツは思わず同じものを、と言葉を返す。

まるで先ほどまでの殺伐とした空気が嘘のよう。

ドンは酒を飲み、イチトシもグラスに口をつけ、ナッツはその酒の度数の強さにめまいを起こしていた。

「さて、本題に戻るか」

ドンの一言が放たれた時、ナッツは既に意識もうろうとしていた。

酒に何かを入れたのだろう。でなければ彼のように手慣れた人がここまで泥酔状況になることはない。イチトシはフラつき、意識もほとんどないナッツを気にかけてながらドンへ向き直る。

わざと二人だけの状況を作ったのだろう。

ウエイトレスにはほんの少しの目配せをするだけでこの状況を作り出せる人。すごいな。イチトシは素直に感心していた。今までに会ったことのない人。

「ベリウスが気にかける奴がただの貴族とは思えねえ。何者だ、てめえも、ああいうのか？」

ああいうの。

イチトシはベリウスとの短い邂逅を思い出していた。だが、どうなのだろうか。

「わからないです。ベリウスさんは私を知っていて、私の知らない記憶を知っている。私はアレだと言う自覚はない、今までも人として時を生きてきている」

「ほお。……結論から言ってやるよ。ギルドを作りたいなら好きにしろ。止めやしねえしユニオンに加入するってんならその繋ぎにはなってやるよ」

面白そうだからな。

ドンの言葉にイチトシは大きく一度頷いた。

それにしても酒強いんだな。ドンの一言でその場は飲み比べ大会となってしまう、ドンもイチトシも互いにザルであることを確認すると店側に代金を残し、既に潰れていたナツツはドンに回収されてその場は解散となった。

宿屋に元々取ってあった部屋に戻り、イチトシはベッドに倒れこんだ。

疲れた。

自分とは全く違う種類の立場の上に立つ人間。しくじれば自分の命も危うい状況。けれど成功すれば、これからやるべきことが見える。スタートラインを高い位置に据えることが出来る。

「ダミユロン……」

首元のペンダントが音を立てる。

「会いたい」

左手の薬指が、少しだけ痛かった。

第13話

帝都に帰った彼女を待つていたのは不機嫌極まりない表情をした自分の使用人たちだった。カレンは腕を組んで仁王立ち、ジイは眉間にしわを寄せて姿勢よく立っている。

ああ、心配をかけたんだな。そう思つて笑うとカレンが何かを言おうと口を開き、そして閉じた。

「おかえりなさいませ」

ジイの一言。カレンは大きいため息を付いて同じように彼女の帰りを迎えた。

ただいま、と言おうとした。

けれど彼女は言葉を変えた。ありがとう、そう言つて旅用の荷物をカレンへと渡した。荷物に括りつけられた武器の幾つかを見てカレンは一瞬動きを止める。

目敏くそれを見つけてるのはいつだってジイだ。

「何を考えていらつしやるのですか。……もう、よろしいのですか」

ジイの言葉にイチトシは封筒を取り出した。

中には二枚の紙。一枚は宣誓書、そしてもう一枚が許可証。ギルドとしてギルドの掟を守ることを誓う宣誓書、ユニオンの一員としてユニオンの掟を守る限りユニオンの一員として認める、許可証。

カレンは驚きジイはわずかに、ほんのわずかに笑った。

「貴方の決めたことであれば。ご両親には書を飛ばしましょう。カレンは武器と衣装の用意、悲しいですが、イチトシ様の服と武器は問題無いでしょう」

どちらかと言えば問題は自分の服か。

考え込むジイに笑う。

ああ、やっぱりジイは言うとおりにしてくれるのか。そして、カレンはやっぱり反対する。貴族で安全な生活を遅れるというのに何故それを捨てる意味が分からない。楽しく生きていけるといいうのに何故それを捨てるのか。

「彼を探す。彼の遺体、共に戦った者、何でも良い。見つけるんだ」

だがカレンも、彼女の言葉に口をつぐんでしまう。

彼女の表情に、覚えがある。

まだ出会ったばかりの頃の彼女と同じだ。もう何年も見ないままで居ることが出来たのに。認めたくないが、あの男のおかげで普通の表情を、彼女は取り戻していたんだ。

こんな、自分を押し隠して笑うような人ではなかった。

あの男がいなくなったから、だから、彼女は”戻って”しまい、こうして死んだと言われる人間を探そうと言うのか。

これ以上、”戻った”ら。

カノンは奥歯を軋ませた。いつだって正しいのは自分ではなく、ジイだ。自分だって彼以上にイチトシを想っているのに。

「カレン、私はギルドを知らない。でも、君たちとギルドをやりたいんだ。初期のメンバーはドンに貸してもらった。私にとつての初期メンバーは君たちなんだ。これからきつと今以上に大変だよ。でも、付いて来てくれるだろうか？」

差し出された片手を、振りほどくような勇氣はない。

カレンは彼女の作った笑顔を向けられ、彼女の差し出した手を掴んだ。

翌日、帝都ザーフィアスの貴族街の中でも有数の規模を誇る館が取り壊されていた。ルディアース。その名を打たれた館が壊れていく様を一組の夫婦がじつと見つめていた。初老を越えたであろうその人たちは手を繋ぎ、壊される館を見つめている。

「やってくれたな」

髪を上げ、整えた男は低く、威圧するような声でつぶやいた。

心なしか強くなった握り合う手の力に、女性は小さく笑った。酷く悲しげに、泣くのを堪えるように笑う。

「また、あの子は逆戻り」

「……僕たちは僕達の方法で捜そう。殺しても、気が休まりそうにないな」

「ほどほどにいたしましょう。あの子も色々亡くしているのですよ、アトマイスの家も、

そう、色々……」

だからといって。

男の言葉を、女性は否定が出来ない。

ありがとうございます。そう、夫婦にお礼を言いに来た娘は昔と何ら変わりがなかった。変わってくれたと、喜んでいたここ数年が懐かしく思えるほど鮮明に感じるこ
とが出来た既視感。

彼女は元に戻っていた。

幸せを見せた男を失い、中途半端に与えられた情報は彼女を元に戻すのに十分な力を
持っていた。

亡くしたものは戻らない。偶然なくさずに済んだ自分たちの命、ならば娘達のため
に、と駆けつけた先で娘に離縁を迫られた。

迷惑を掛けたくないから。

そういう娘の願いを何故跳ね除けてやれなかったのだろう。

いつてきます。

本当に行つて”帰つて”来る気はあるのか。

「……そういえば、最近平民出で人魔戦争を生き抜いた騎士が居ると話題ですね」
「シユヴァーン・オルトレインか。面会を取付よう。まずは話を聞く」
「私も一緒にしますよ」

願わくば、一握り。

ほんの一握りでもいい。

彼女を喜ばせる情報が欲しい。

けれど夫婦が手に入れたのは、知りたくもない事実そのものだった。

第14話

最初は手広く何でも屋として動くのが良いだろう。でなければ依頼も何もやってこない。ある程度の信用が出来て依頼が直接来るようになったら自分たちのやりたいことをやればいい。

ユニオンの人にそう助言を受けて、数ヶ月。

イチトシの発足したギルド〔夜駆け鼠（ナイラット）〕は何でも屋ギルドとして名を売り、知る人ぞ知っているギルドとなった。規模は相変わらず小さく、十人ほどで活動しているとも、五人ほどで活動しているとも言われている。

実際、そのメンバーは未だ三人を中心としている。便宜上何人か増えたりはしたが、首領である彼女が信頼するのは二人だけだ。

夜駆け鼠の主な仕事は荷物の運搬となっている。ギルドの構成人数が少なく、依頼をすることは難しいが確実に丁寧に仕事をこなす姿は口コミで広まった。依頼人の中には大金を支払ってでも夜駆け鼠に仕事を頼みたいという人も居るほどだ。

もつとも、彼らが仕事を受けるかどうかは別の話。

「首領、なんか、聞いたこと無いギルドの首領が挨拶に来てますよ」

やる気なく語尾を伸ばすのはカレンだ。

「……私、そんな挨拶されるような人じゃないよ?」

思わず報告書を取り落としそうになりながらやわらかな口調で返すのは夜駆け鼠の首領、イチトシ。貴族であった時もよく着ていた動きやすさを重視した軽装を着ている。

もう一人、彼女の部下であるジイは現在単独で依頼遂行中である。

拠点としている建物には現在、イチトシとカレンだけが居る。

カレンは謙遜しているような首領の言葉に苦笑し、言葉が続けた。

海凶の爪、というギルドの首領が挨拶に来ている。本人が言うには暗殺ギルドの首領をしているらしいが、どうにも信用出来ない顔をする男だ。

通しても良いか。

彼の言葉にイチトシは頷いた。どんな仕事だとしてもギルド仲間だということに変

わりはないから。

そうして通されてきた青い髪の男はイチトシの前、部屋の入口で大きく頭を下げる。その髪色に、その顔に、覚えがあつた。けれどそれは喪つたはずのモノ。

「君は——」

「今は海凶の爪、イエガーと」

「……そう。イエガーさん、じゃあ、初めましてと言つた方が良いですか？」

「いえ、今はどうか。以前のまま……」

客間の椅子を勧めると気を利かせたカレンが紅茶を入れてくる。

「彼を探しているのですか？」

イエガーの言葉に、イチトシは思わず笑つた。

「そんなに有名？　そうだよ、彼が死んだならその確実な証拠を探しているんだ」

「私の証言だけでは足りない、ということですか」

「足りないね。それに、今の君の言葉を信用出来ない」

「……貴女は何もかも知っているようだ」

困ったように笑うイエガーは目を伏せがちにすると場をごまかすように紅茶を飲んだ。

貴族ではなく、ギルドとしての生活はどうですか。イエガーの言葉にイチトシはうん、と言葉を詰まらせる。やはり長い間貴族として生きていたからこうして足を動かして働くのは慣れないよ。そうですか、ならば貴族に戻ったら良いのでは。

イエガーの本題はどうやら、今話していることらしい。

真顔になった彼は畳み掛けるように言葉を続ける。

貴族である必要はあっても、ギルドである必要はない。情報を集めるだけであれば貴族の立場を利用したほうが早く集まるであろうこと。イチトシにとって利点となり得、ギルドでいることの不利益。

ギルドから遠ざける言葉にイチトシも表情から笑みを消す。

「君は、彼の下についたのか。だけど、残念ながら私はギルドで動く決めた」

「……残念です。敵対する可能性も有り得る、有り得てしまう」

「そう、じゃあ敵対する前に聞かせて。彼は死んだのかな？」

「死んだ、とも、生きている、とも」

「うん、そう。ありがとう」

彼女が浮かべたのは笑顔。もういいよ、と言われている。

用はない、と。

イエガーは紅茶を飲み干し、再度深く頭を下げた。

これでさよならデース。

ふざけたような口調に大袈裟な動作。取ってつけたそれに、イチトシは片手を振った。さようなら。

もう二度と、会わないように。

イエガーの居なくなった拠点でイチトシは一枚の書類を机の中へとしまい込む。

「あれ、誰なんすか？」

「元騎士だよ。彼と同じ隊にいてね。彼と知り合う前に何度か会っていたんだ。彼と同じ場所に向かった一人だよ。あとは、そう。今噂の隊長さんくらいだね」

「ああ、あのシュヴァアーンっていう」

「そう。無名から一気に英雄となった平民出の騎士。おかしなことにね、私の記憶にその名前はない。……人魔戦争へ向かった騎士のリストが欲しいところだね」

机の上の書類をまとめて留めてからファイルへとまとめてしまいこむ。

「騎士団に潜入しますか？」

「いや、必要ないよ。少なくとも今はまだね。それはジイを含めて話をしなければいけないし」

「俺は、そんなに頼りないですか？」

「ふふ、違うよ。君たちは特性が違うから役に立てる場所が違うだけ。ジイは冷静で常に客観視ができるから意見は欲しいだけ」

良い年をしたカレンの頭を撫でてやる。

さて、それよりも。

イチトシはペンを取り出して手元のメモに文字を書きつける。

脈絡のない子供のラクガキのようなそれをカレンに渡す。これはギルド内にだけ通

じる言葉、暗号。

「頼むよ」

「……はい、いつてきます。ご両親へは？」

「要らない。あの方々とは縁を切ったから」

表情に一欠片の悲しみも出さない。

カレンは自分の懐に手紙をしまい、拠点を後にした。

最後に一人、残されたイチトシはため息を付いた。

「イエガーか……。私と同じ、なのか。けれど私は」

言葉が続かない。同じだけど、何なのか。

イチトシは引き出しの中へ落とした書類を再度机の上に出した。

覚えている限りの騎士の名前。”彼”が目をつけていた小隊に属していた騎士の名前が多い。キャナリを筆頭にヒスーム、ソムラス。あの子の名前も、もちろんここにあ

る。

懐かしい名前を指先でなぞる。

彼を長く忘れたことは無い。過去を振り返る度に思い出す。目的を想う度に思い出す。

——彼は、死んだ。

そう告げたあの人の表情が不可思議すぎて信じられなかった。

まるで告げたくないと。

高い目標と強い意志を持っているあの人がそんな表情でそれだけを告げるわけがない。そう思った。だから、情報が欲しかった。

彼がとんでもない姿で死んだのであればその情報を、生きていたのであれば——再び、共に。

(2015/12/12 21:46:47)

第15話

ドンは事ある度にイチトシを手元に呼んだ。用事は様々で仕事として何かを運んで欲しいと頼んだり、天を射る矢の新顔を紹介したり、新興ギルドの情報を渡したり。

ありがたいことでは有るが、イチトシには不思議で仕方ない。

彼らギルドの憎む貴族であった自分を応援するような行動が。けれどそれを聞いたとしてもドンは笑うだけだ。面白そうだから、と。

今日も今日とてドンは用件も伝えずイチトシだけを手元に呼んだ。

「こんばんは、ドン」

「存外上手く続いてんじゃねえか」

「おかげさまで。今日は何用ですか？」

ドン専用の椅子に深く腰掛けた彼が大きく笑う。今日は随分と機嫌がいいようだ。深く聞いて機嫌を損ねる必要はないだろう。

椅子から距離をおいた場所に立ってどのくらいだろうか。

ガチャリ。ノックがされること無く彼女たちのいる部屋の扉が開く。ギルドの長と

もいえるドンの部屋に声掛けもなく入ってこれる人が居るのか。イチトシは無表情のまま背後を振り返り、一瞬だけ、息をすることを忘れた。

紫の羽織を着た、中年の男がそこには居た。

黒い髪に翡翠の瞳。男にしては長い髪は背中側でまとめられている。髭も整えていない姿はどこか遊び人のような雰囲気と思わせる。

「おうレイヴン、遅かったじゃねえか」

レイヴン。そう呼ばれた男はイチトシを見て彼女同様に驚き、けれどもすぐに我に返り、イチトシの向こう側にいるドンへと笑いかけた。

「もー、じいさんの人使いが荒いだけでしょ。ほらこれ。頼まれてた書類」

イチトシの隣を通ったレイヴンは手に持った筒をドンへと渡し、その斜め後ろへと並んだ。

イチトシはゆっくりと振り返り、説明を求めするようにドンを見た。

「レイヴンって——」

「そう、てめえが名付けた鼠だ。天を射る矢の新入りでな、気に食わねえことは多いが融通は訊く」

「……ドンが名前をあげたってことは、ドンを狙ってきた人？」

「よく分かってんじゃねえか」

「二回目だよ？ 流石に私でも気づきます」

驚きに驚きを重ねるレイヴンを置き、イチトシは笑みを浮かべた。

「紹介するってことはお気に入りなんですわね。初めまして、未来の天を射る矢幹部、レイヴンさん」

レイヴンは笑みを向けられ、ぎこちなく片手を振った。

よろしくね、美人さん。

そして次の瞬間レイヴンは背後からドンへと話しかけた。この美人さんは誰？ 俺様紹介されてないけど。

自分中心のその考え方こそ遊び人の雰囲気を作り出して、イチトシは自分から視線を外す彼をじっと見ていた。へらりへらりと笑う彼は掴み所がないというよりどこか浮ついている。

掴んだとしても消えるような。

「コイツは夜駆け鼠の首領だ」

不意にドンが発したイチトシの紹介にレイヴンは動きを固めた。

「……はあ。」

ようやく発することが出来た言葉もその程度。新興ギルドの首領であることがそんなに驚くことなのだろうか。イチトシは首を傾げる。

「——いやいやいやいや、それはないでしょ。だって夜駆け鼠つてすぐ腕の集まりつて」
「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいよ」

イチトシの言葉にレイヴンはまたも動きを止める。彼女の言葉は、まるで。

その時、ドンの部屋の扉が叩かれる。何の用だ、とドンが声を上げると扉の向こうにいる人が「夜駆け鼠の人がお会いしたいと」と応えた。その言葉にイチトシがああ、と笑みを浮かべる。

「使いに出演しているジイが戻ってきたのでしよう」

「ああ、てめえの迎えか。今度は何を盗ってきたんだ」

「騎士団のリストです。人魔戦争に参加した騎士のリスト、あとはそれを証明するようなものがあれば、と頼んでいました」

固まったままのレイヴンを置いて、部屋の扉が開かれる。

白い髪にギルドとは似つかわしくない正装のような服。紫の瞳はイチトシを見ると安堵したように細められ、ドンの隣に立つレイヴンを見て鋭く変わる。

まるで“敵対”するような瞳にレイヴンは無意識に息を潜めた。

「では、ドン。私はこれにて。レイヴンさん、これから関わることに有りましたらよろしくお願致します」

いまだレイヴンを睨むジイの片手を引っ張り歩き始めれば、彼の視線はレイヴンから

離れる。

二人が部屋から完全に見えなくなつてレイヴンは溜息をついた。

大きく、安堵するように。

「なんだ、知り合ひだったのか」

「違つての。俺様も何であんなに嫌われてるのか……」

「はっ、奴が理由もなく人を嫌うか。有り得ねえな。まあ良い、これから夜駆け鼠と関わることも増えるだろ。妙な今年でかすんじゃねえぞ」

後のことは任せる。

ドンすら居なくなつた一人だけの部屋でレイヴンは片手を首元に添えた。

「いろいろ、わけ分かんないわ」

ドンの言うとおり、夜駆け鼠との関わりが増えたレイヴンは彼らに会う度にイチトシ以外の二人に敵対の強い視線をもらうことになり、会う度に精神をすり減らされた。

イチトシはそんな様子もいつもの笑みで見つめていた。

(2015/12/28 14:10:15)

第16話

かん、と軽い音が響いて木刀が弾かれる。弾かれた木刀を一瞬目で追うと目の前から
の衝撃に体が軽く浮いた。蹴り飛ばされたと気付いたのは地面に体を打ち付けてから
だった。

追撃を恐れて即座に立ち上がると自分を弾いて飛ばした男が片手に木刀を構えたま
ま殺意とも取れる視線を自分へ向けている。その向こう側にはにこにここの場に全
く似つかわしくない笑顔を浮かべる美しい女性。

「英雄が聞いて呆れる。貴族に転がされる程度なのか？」

男の言葉に何の感情も抱けない。ただの貴族に転がされたのであれば、気にする。だ
が、彼は。

痛む体に無視を決め込んで立ち上がると木刀が足下に投げられる。もう一度、と言わ
れているようだ。木刀を手取るのと同時に男が駆け込んでくる。

素早い動きから振り上げられる剣閃を防ぐために木刀を横にして構える。手が痺れ
るような衝撃。近付いた男の体。隠されることのない怒気が木刀の力となって襲い来

る。

「戦争を生き抜いた英雄、シユヴァーン・オルトレイン。ふざけた名前だ。人魔戦争に向かった騎士のリストの中に名前が無かったというのに、『生き抜いた』と?」

他に聞こえない小さな声で男は続ける。

「大して隠しもしないその風貌で、中途半端に。生きているのに腹が立つ」

ニツ、と気持よく笑みを浮かべた。

直後シユヴァーンの体はまたも軽く空を飛んだ。

「殺したいくらいだ。だが、今の状態で殺せば本格的にあの子は壊れるだろう。せめて、僕より強く在ってくれないか」

腹が立つから。二回目の言葉はどこか諦めたような響きを持って。

貴族の男が持つ木刀がシユヴァーンの足元に落ちる。

顔を上げると息も乱していない男が自分の妻である女性を連れて隊舎を後にしていた。信じられない。

ルディアースの家柄が元々剣に通じていることは知識として知っていた。だがそれも騎士として働いてきた自分には敵わないと思っていた。慢心、というのだろうか。

あの強さは何なのだろう。

その場で座り込んで木刀を見つめた。

きつと真剣でも同じ結果となる。

——せめて、僕より強く在ってくれないか。

何故だろうか。この言葉に優しさを感じてしまうのは。

何故だろうか。この優しさを向けられているのが自分だと思ってしまうのは。

「シユヴァーン隊長！」

大声を上げて近づいて来るのはシユヴァーン隊の隊士たち。貴族と木刀で仕合をすると聞いて周りで見ていたようだ。気づく余裕もなかった。きつとあの人は気付いていたのだろう。気付いていて、派手に転がされた。

まだ、弱い。まだ、これではダメだ。

隊士たちの声に大丈夫だと答え、解散させる。

あの人の居なくなつた場所を見つめ、考える。

もしもあの方があの二人を危険だと考えたら自分は。

シユヴァーンはため息をついた。勝てる気がしない。

イチトシは今日も今日とてカレンの説教を真つ向から受け止めていた。話題はここ数ヶ月でひとつ増えた。

あのレイヴンという男は。

カレンの説教はいつもここから始まる。

レイヴンをカレンと会わせたのは完全に失敗だった。まさかここまで嫌うとは思わなかった。イチトシは手元の書類から必要な情報を書き出しながらカレンの言葉を聞き流していた。

「……それで、君は何をしたいんだい？ 天を射る矢の幹部となった彼とは関わりを切れないよ」

「っ。だつたらユニオンを」

「抜ける気は無い。ドンからの情報はありがたい。……気に食わないなら、君には他の道もあるよ」

呆れたような、脅すような口調。この口調で物を言われると何も言い返せなくなる。まして、いまさら、ギルドをやめて一人になることなんて考えたくはない。

カレンはイチトシを睨むように見て、勢い良く背を向けた。
気に喰わないのだろう。何もかも。

ギルドを始めたことでさえ、彼は未だに嫌がつているだろう。

ジイとは違う。彼は自分の意志を貫こうとするだけの力を持っている。

「カレンは貴女を尊敬し続けているのですよ」

見終えた書類をファイリングしながらジイが笑う。

「今も昔も、私は尊敬される人ではないよ」

「今も、昔も。貴女は変わららず尊敬に値する人ですよ」

カレンをなだめて参ります。

ジイはいつもの礼服姿のままカレンの後ろ姿を追った。

薄いファイルの中に収めた一枚の紙を見ながら、イチトシはその中のリストを指でなぞる。

人の名前の羅列。大勢の人の名前。

いつか、テムザに向かった人魔戦争参加者の騎士一覧。どれだけ見返しても、何度確認しても書いてある名前は変わらなかった。ダミユロン・アトマイス。

そして、シュヴァーン・オルトレイン。人魔戦争から『生きて戻った』彼の名前はどこにもなかった。

ジイが一部のみを持ってきたということは考えづらい。情報が正しいことを前提とするならば生まれる疑問がある。

シュヴァーン・オルトレインが人魔戦争参加者でないならば、彼は誰だ。どこから出てきた。騎士団長が気に入るならば新入りとは考えにくい。

「直接話を聞ければね」

手間もなくなるが、それが出来ない。シュヴァーン・オルトレインはよほど騎士団長

に気に入られているのか密命を受けて騎士隊舎を留守にしていることが多い。

「……外に出よう。確か街道に巨大獣が出ていたよね」

一体であれば一人で。そう思った時だった。

「こんにちは〜」

間延びした声が聞こえた。扉をノックもせずに入ってくる一人の男。初めて会った時から幾分か伸びた髪を一つにまとめながらもボサボサなのは変わらない。

カレンの大嫌いなレイヴンだ。

「こんにちは、レイヴンさん。カレンと会わなかった？」

「あー、さつきすれ違ったわ。すっごい睨まれた」

「ごめんね。さつきまで言い争ってたからだろう」

「いやいや、そうでなくても俺様嫌われてるし。じゃなくて、本題に入らせてちょうだい
な」

袖からひとつの封筒を取り出し、イチトシへ渡す。封をする蠟封に描かれているのは天を射る矢の紋章。また仕事か。

最近は何故か天を射る矢からの依頼が多い。

レイヴンの目の前で封を破り、中を確認する。重要文書だったらどうするのと慌てるレイヴンには無視を決め込んで中身を読み進める。

「レイヴンさん、ドンから聞いてる?」

「なんか書いてあった?」

「うん。ケーブモックの巨大獣を倒して来いって。レイヴンさんと、私とジイで」

「……戦えるの?」

誰が、とまでは言わないが。言われたイチトシは笑ってみせた。

ジイの名を呼べば程なくジイがカレンの慰めから戻ってくる。両手に、何かを持って。布に包まれた片方をイチトシの机に置く。包の布を開けると中にはふた振りの剣。

「あまり戦えることを露見したくは無いから隠してる」

「……」

てつきり、また飄々とした態度で何かを言われると思ったけれど。そんなイチトシの言葉でレイヴンの意識は自分の手元に帰ってくる。

「意外、すぎてさ。ドンのじいさんから元貴族だと聞いてたし」

「そうか。うん、でも私は元々武芸を嗜む家に生まれたから。『ルディアース』暇だったらこの家名を調べてみると良いよ。……もつとも、私の腕なんてあの方々の足下にも及ばないけれど」

行こうか。

イチトシの一言でジイは全てを知ったかのように部屋を出て、イチトシが拠点の扉を

開ける頃にはすべての準備を終え、自身の武器であるレイピアを腰に備えていた。

ケーブモック大森林に着くまで何を話していたか。

聞き出したかと思つたことを聞いていたはずだが、レイヴンにはそれが思い出せなかつた。

それだけ、巨大獣との戦いが彼にとって衝撃的だった。

(2015/12/29 21:04:23)

第17話

仕事で何度か帝都を訪れる機会があつた。イチトシはその度に大量の菓子を買つては下町の宿に置いていった。直接的に金銭を渡すことは出来ないから。いつもの笑顔を浮かべてそういう彼女の好意を下町の人は歓迎した。イチトシのことは昔からよく知っていたからだ。

えせ貴族の、女性として。

ギルドの一人であることは隠していたが下町の人はいつだって笑顔で彼女を迎え入れた。

彼、ユーリ・ローウエルもそんな下町の住人の一人だった。

「こんにちは、ローウエルくん？」

「ユーリで良いって。また来たのか。アンタたちも物好きだな」

お菓子の袋から適当に取つて軽く投げて渡すとユーリは片手で受け取る。いつもどおり。違うのはユーリの額に傷があることくらいか。

また騎士に喧嘩を売つたの。イチトシの言葉にユーリはいたずらっぽく笑つた。

ジイに目配せをすると彼は片手をユーリへ向けた。ジイの手から放たれた柔らかな緑の光がユーリの傷口を包み、傷口は綺麗に消え去った。

「君も武醒魔導器を持つているでしょう？」

「あー魔術とかそういうのは苦手なんだよ。ありがとさん」

じゃあ散歩でもしてくるかな。宿酒場を出て行くユーリと入れ違いに、青い毛並みの犬が堂々と店の中へ足を踏み入れ、イチトシの足下で座る。シャープな頭をイチトシへ向ける。

歴戦の。そんな言葉が似合いそうなほどに凛々しい犬。

「やあラピード」

声をかけるとウオン、と勇ましい声が帰ってくる。

彼の名前はラピード。ユーリと共に暮らす『ただの』犬、らしい。

イチトシが頭を撫でると目を細めて喜ぶ、こんなところは確かにただの犬だが。

視線の配り方に警戒の仕方、ユーリと共に動いている時の警戒の仕方。ただの犬には出来ない芸当だ。それが出来るのは、軍用犬。青毛の軍用犬と聞いて覚えている心当たり。けれどイチトシは決してそれをユーリとラピードの前で口に出したりはしない。

意味が無いことだ。

「おや、どうしました？」

不意にラピードはジイの燕尾服の尾と言える部分を軽く啞えて引つ張った。座ったまま引つ張っているからどこかに付いて来てほしいわけではないだろう。

理由を問うばかりのジイに、イチトシは笑った。

「確か保存食を買っていたよね。その匂いじゃない？」

ジイの腰元にある口の閉じた巾着からの匂いを当てたのならば随分鼻の利く子だ。引き込みたいな。

ジイから手渡しして保存食にとかつた贖罪を分けてもらっているラピードは不意に顔を上げた。邪な考えが伝わってしまったかな。イチトシの考えも気に留めずラピードはユーリの後を追うように走り去った。

あら、フラれた。

ふざけた彼女の言葉にジイは笑った。私もフラれてしまいました、と。

「さて、運勝負といきますか」

不意に、ジイがサイコロを巾着からふたつ取り出して片手に構え、もう片方の手に籐の編みこみで作られたグラスのようなものを構える。

ああいいよ、イチトシの言葉を合図に彼はふたつのサイコロを籐編みの中へと放り、飲み口を下にするように机に置く。中でサイコロが転がる音が宿酒場に軽く響いた。

「私は半にしよう」

「では私は丁ですね」

ジイが籐編みをどけるとその場にはふたつのサイコロ。

どちらも一の目を上に向けている。思わずイチトシの眉間にしわが寄る。

「ピンゾロの丁……、嘘みたいな目だね。こうなると難題を言われるわけか」

「はは、そうでしたな。ピンゾロの丁、それなりの目で負けたならそれなりの依頼が出来る。その決め事をしたのは——」

「もちろん私だよ。分かっている。それで、ジイの望みは？」

思ったよりも簡素な部屋だ。

使われた形跡のないくらいに綺麗なベッドに腰を下ろしてイチトシはため息をついた。

ここは騎士団長の私室。貴族出身でありながら自分の館を帝都に持っていかないアレクセイ騎士団長は他の多くの騎士たちと同じように隊舎にある自分の部屋で寝泊まりする。それが今、イチトシの座る場所。

——では、騎士団長閣下の真意を聞いてきてください。

ピンゾロの丁をはじき出した彼女の部下からの依頼だ。

月一の賭け事で互いに依頼を出してみよう。

気まぐれの言葉がこんなことをやらされる羽目になるとは思わなかった。逢魔が時、人の目が最も働かない時間を見計らって隊舎に忍び込み、この部屋に入り込んだ。窓は閉まっていたが問題はない。

寝て待ってもいいが、そう思ったところで勢い良く扉が開く。
見えた剣のきらめきに笑いかける。

「斬らないでね、アレクセイ」

「つ、イチトシ……？　なぜ、君がここに」

「うーん、ジイとの賭けに負けてね。もし、嫌でなければ少し話をしよう？」

武器から手を離し、アレクセイは困ったように笑った。君はいつでも唐突だな。昔と変わらない言葉は複雑な響きを持ってイチトシの心を震わせた。

アレクセイは慣れた様子で茶菓子を用意する。

饅頭と、茶。

いつかの話を思い出し、イチトシはまだ貴族としてアレクセイと話をしていた時のように、茶に手をつけた。

「ギルドを、作ったそうだね」

「うん。夜駆け鼠って言うんだ。騎士団から色々借りてるよ、ごめんね」

「知っている。……正直、機密情報をああも簡単にとられると自分の不甲斐なさを痛感

するよ」

「あはは、ジイは慣れてるからね」

「やはりジイか」

「ジイか私だよ。カレンには外の仕事を任せてるから。……君は、随分やり方を変えたね」

アレクセイの手が止まる。優しさの暖かさを無くなった冷たい瞳が正面からイチトシを見やる。イチトシは相変わらぬ笑みを浮かべたまま言葉を続けた。

一言だけ。

帝都の亡霊。

それだけを言つて再度カップに手を付けると、強い力で机が叩かれる。

「私はどうしたらよかつたと言うんだ！」

お茶が溢れなくてよかつた。ノンビリとしたイチトシにアレクセイはまた苛立ちを募らせる。

「知らないよ。私だつてずっと間違っている気がしてならない」

「つ。イチトシ、それを諦めてコチラに来ないか？」

「……」

思いもよらない提案に今度はイチトシが動きを止める。

「アレク、セイ？」

何を言っている？ そう言わんばかりの声に、アレクセイが微笑んだ。

(2016/01/03 23:18:42)

第18話

珍しく苛ついていた。表情が戻つたと喜びたいところでは在つたが、必要な書類を書くこともままならない彼女の状況は望ましくない。

ジイとの賭けに負けてからずっとだった。騎士団長に何を言われたのかは知らされることになかったけれど。ジイはあの時あの場所でかけをしたことを少しだけ後悔していた。結局騎士団長の思惑は多少分かったが、それは得ていた知識と変わらない。収穫はゼロだった、と言つても過言ではないだろう。むしろ首領が苛立っている今、マイナスが大きい。カレンなんかは首領を怖がって近寄りもしなくなつた。

仕事に影響どころではない。

意を決したジイが首領の私室の扉を叩いた。

「誰？」

いつもより声が低い。

笑つてしまいそうになる。

「私、ジイでございます」

「ああ、悪いけど今は——」

「入りますね」

珍しく相手の言葉を無視して扉を開けると不機嫌な顔をしたイチトシがベッドに座っている。

「珍しいね。ジイが私の話を聞かないなんて」

「……事態が事態ですから。何を言われたのですか？」

「諦めろ、だって。諦めて自分の力になれ、って」

それもひとつの道ではありませんか、そう言おうとした口を閉じる。そんなことを言えば彼女は自分すら近くに置かなくなるだろう。それでは役目が果たせない。

イチトシは笑った。

「思わずエクスプロード落として逃げちゃった」

言葉を無くした。騎士団本部の真ん中で、騎士団長の部屋で、上級魔術を落として逃げた？ 騎士団長が触れ回れば自分たちの立場も危うくなるというのを分かっているはずだ。

それほどに、嫌だったというのか。それほどに、まだ。

「アレクセイには当てていないし、アレから私達がそれをしたという噂も流れてない。

……反省はしてないよ。あの子を諦める気はないし、あの子を馬鹿にするようなら、あ

あいう扱いをされたって仕方ないでしょ？」

「騎士団長閣下は考えを改めるつもり、無さそうですね？」

「そうだね。改めるどころか私に亡霊になれと言ってくるくらいだ。私の両親に亡霊をけしかけているかもしれないね」

「それほどまで……。あの方々の強さは身にしみているでしょうに」

過去に父親が騎士団長閣下と剣を交えたことを思い出す。まだ騎士団長になったばかりのアレクセイはルディアース当主に無残なまでに転がされていた。

ジイもよく覚えている。

いくらルディアースが衰え、アレクセイが強くなったのだとしてもまだ、勝てないはずだ。

それにしても。

ジイは顎に手を置いた。

「亡霊……『帝都の亡霊』ですか。未だ正体の知れない、貴族暗殺の噂、調べるおつもりで？」

「いや。それには私達の利益が少ない。私や爺ならともかく、カレンは相手の口車に乗せられる可能性もある。……今、誰かを奪われるわけにはいかないよ。しばらくはいつもどおり」

ジイはイチトシに向き合ったまま、視線だけを自分の愛護の扉へとやった。感覚を研ぎ澄ませればようやく聞こえる程度の音で、何かが離れていく。

完全に音が聞こえなくなつてから、ジイは溜息をつく。まったくわざとらしい。そう呟いて咎めるような視線をイチトシへやる。

扉の外にはカレンが居た。

わざと聞こえるような声で言ったのは聴かせるためだろう。まだ、すべてを任せることは出来ないというイチトシの意思を。

イチトシに心酔している彼にとつては衝撃的なことなはずだ。取り乱しても不思議ではない。大事だとは言いながら、突き放すようなことをする。苛立ちからだけではないだろう。

「何をお考えですか？」

「……アレクセイからの接触、私が知らない場所での彼との接触が欲しい。ジイは警戒をされるからね」

「危険な賭けですね」

「そうだね、危険だよ。でも、必要だ」

「……分かりました。最期にひとつ、お聞かせください。貴女は、貴女の望みは——本当にあの人と会うことですか？」

ジイの間にイチトシは笑みを返した。

言葉はなくともそれは立派な答え。ジイは深く頭を下げるとイチトシの部屋をあとにする。

今も彼との再会を望んでいるのか。

イチトシは左手の薬指に触れた。シルバーの輝きは何年たっても色あせない。記憶がどれだけ薄れてきても、曖昧になっても、物だけは変わらない。

放り出された夜空の下で仰向けに寝転がり、掲げた右手に絡めたペンダントから下がる指輪が街の明かりに反射して光を返す。変わらないのは、これだけだ。

自分の弱さも、あの人達の強さも、増していく。

周りの環境はぐるりと一転。

ため息を付いた。

環境に文句を言っているようではダメだ。このままじゃまだ、駄目だ。ダメなんだ。ペンダントを強く握りしめた。

いつか、迎えに行くまで。

「まっけて」

(2016/01/24 20:25:00)

第19話

夜駆け鼠はギルド間の重要な荷物運搬を請け負う大手ギルドである。こんな噂が流れているのは最早日常。

「お婆さん、この荷物はここでもいい？」

本日も本日。夜駆け鼠は老夫婦の引越しを手伝っていた。荷馬車の手配に道中の安全確保、そして荷解きまで。荷解きは依頼内容ではないが、重い荷物もある引越し。老夫婦だけでは荷が重いと思つたイチトシの提案だつた。

料金は変わらず、これから畳にしてみらうという口約束で追加案件として荷解きを手伝い、日が落ちてようやく完了した。

イチトシの笑みを向けられた老夫婦は柔らかに笑みを返す。

「ええ、ありがとうね。助かつたわ。今、お茶を淹れるわね」

終わつた。と、間延びする声を出すのは夜駆け鼠の新人たち。

噂が独り歩きするにつれ、夜駆け鼠はある程度の規模を持つことを迫られ嫌々ながら、構成員を増やした。幸運にも気のいい連中ばかりでジイとカレンに叱られながらも

夜駆け鼠で立派に働いている。

ジイが言うには、将来有望で夜駆け鼠に居るのがもったいない、だそうだ。イチトシはいつかのジイの困り顔を思い出して笑った。首領としては失礼な言葉を吐きつけられたとも言えるが、たしかにそのとおりだ。

私情で立てたギルドなのだから。

「イチトシさんは綺麗ねえ？」

不意に老婦が笑う。

「そう、ですか？」

「ええ、でもなんだか悲しそう。貴女を癒やしてくれる人が近くに居ないのね」

自分の人生の倍以上も生きると勘も鋭くなるのだろうか。

答えを濁すように笑うと老婦が謝る。貴方の気持ちを考えていなかったわ。老婦の言葉にイチトシは無言で首を振った。別に気にするようなことでもない。

何より、間違っていないことだから。

イチトシの言葉に周りの新人たちが沸き立った。

元々いい人が居たんですか。

新人たちに囲まれるも、イチトシは自分のペースを崩さずにやんわりと話題をか
す。

「イチトシ様、お時間です」

ジイの声にイチトシは立ち上がり、老婦へと深く頭を下げる。この度はご依頼ありがとうございました、又の機会が有りましたら是非夜駆け鼠をご臍尻に。

定型文を読み上げた彼女に老婦もまた立ち上がり、礼を返す。今回はどうもありがとう、とても親切で助かったわ。またお願いするわね。

ジイも軽く頭を下げ、本当に依頼は終了する。

報酬はジイが管理し、皆の報酬へと当てられる。働いたものへ相応の報酬。それが夜駆け鼠に入ったものへ首領が用意できる最低限の物。

だが夜駆け鼠へ入った者は皆、辞めようとは口にしなかった。高待遇、とまでは言えないが、夜駆け鼠の居心地はとても良い。拠点は清潔で大きく、管理が行き届いている。困ったことはすぐに共有され、改善策が立てられる。

荒くれ者の集まりと言われるギルドとは思えない程に徹底された拠点。家事炊事はその時々を担当制で雑に担当をすると首領または幹部の二人に怒られる。苦手でも丁寧な仕事をする、褒められる。給金も上がっている（ように）感じる。

まるで、親に手伝えと言われていた子供の頃のような。誰かがそう言う構成員たちは皆首を縦に振った。だが不思議と嫌な気はしなかった。

「首領、各方面から定例報告来てますよ。特に大きい動き無さそうっすけど、そろそろハルルの境界が弱る頃だーって」

「ハルルに何人か常駐させてるでしょ?」

「あー、そうっすね。そうでした。そういや、カレンさんも今アッチに居るんすね」
「カレンも居るなら大丈夫」

報告書はいつもの棚の中。ん、了解す。

少々ふざけた口調だが、彼もまた優秀な夜駆け鼠構成員の一人。何枚かの報告書をひらひらと振りながらイチトシの執務室に幾つかある棚の中に報告書をしまう。

「最近カレンさん遠征多いっすね」

不意に顔を上げてふざけた口調の男はへらりと笑った。

「うん、彼自身の望みだからね。色々見てきたいんだって」

「へえ、たしかにそういうのも良いすね。んー、俺、てつきりカレンさんはイチトシさんのこと狙ってっかと」

「あはは、それはないよ」

「案外、有り得ると思うんすけど」

まああの本人がこの調子ならどれだけカレンが思っていたとしても、その望みが叶う可能性は低そうだ。彼は小さく笑った。好敵手は、少ないほうが良い。

彼は新参者の多い夜駆け鼠の中では古株といえる者だった。元々は情報収集を専門とするギルドに所属しており、夜駆け鼠というギルドの情報を集めようとしていた。

だが、拠点に潜入した彼が出会ったのはジイと呼ばれるギルドの幹部だった。ジイは笑顔で彼を出迎え、茶を出した。情報収集ならば直接首領に話を聞けばいいと、首領もその場に呼んで。

一言で言えば彼の一目惚れだった。

何に惹かれたのかは分からないが、彼はイチトシを慕い、すぐに所属ギルドを抜けて夜駆け鼠にやってきた。ケジメはつけた、と言って。

それからは今のよう、首領の書類仕事やジイの情報収集を手伝っている。カイ、と名乗る彼は元々情報収集のギルドに所属していたことも有り情報収集能力に長け、潜入などを得意とする。

ただの運び屋に潜入は要らないだろう。かつてイチトシはそう言って彼を笑った。

「カイくん」

「ん、なんすか。またなにか欲しい物でも？」

「ああいや、違うよ。君に話があるんだ。ジイと三人で話す時間はあるかい？」

椅子から立ち上がった彼女はいつものやわらかな笑みではなく、いつになく真剣な顔をしていた。見たことのない彼女の表情にカイは気圧され、いつものふざけた表情を消

した。

「気負う必要はない。ただ、君には話を聞かないという選択肢もあることを忘れないで。いつもの酒場にいるよ」

そんな言い方をされて気負わない人間が居るのか。軽く片手を振った彼女が居なくなるのを見送つてからカイは一人、笑つた。

「とりあえずこれで第一段階はクリア、かな」

がりがりと後頭部を引っ搔いてゆつくりと歩を進める。

夜駆け鼠が助けたという男が経営する、酒場へ。

(2016/01/30 15:07:56)

第20話

「ルディアースがギルドと接触しているという話がある」

椅子に座り、書類を読みながら話しかけてくる主人。彼から放たれたファミリーネームに思わず眉が寄る。ルディアースを排除してこい、いつかの主人の言葉でかの館へ侵入した時の結末が鮮明に思い出される。

誰かに情報を漏らすこともなく夜中に気配を断って館に侵入した。不思議と警備の魔導器などはなく、使用人たちが何人か居る程度だった。使用人たちも武芸に優れていることはなく、見つからずに、または気絶させることで容易に当主の部屋の前まで行くことが出来た。

行くことが出来たのは、そこまでだが。

——その部屋には妻が眠っているが、何か用かな？

全く音を感じなかった、もちろん、気配も。

乱闘というような戦いにすらならず、背後から首を押さえられて外に追い出された。寒空の下で星を見上げていた情けない自分の姿さえも容易に思い出される。

「何処のギルドと何をしているのか、重ね調べて報告しろ」

ただでさえ面倒な命令をしているくせに。

文句は身体の中に貯めこむ。

「はっ」

短く返事を返したとしても主人の視線が自分に向くことは無い。いつからか、命令の
時にも目を見て話すことが無くなった。

いいや、それはどうでもいいことだ。

一礼して主人の部屋を出て行く彼は腰の剣に片手を置く。橙の騎士服の裾が歩く度
に揺れる。

シュヴァーン隊長。大きな声で彼を呼ぶ背の小さな男が駆け寄ってくる。

「よろしいのですか！ ローウエルのような大悪党を——」

話題はどうやら先程雨の降り続く街で捕らえた青年のことらしい。騎士に齒向かい、
牢に入り、脱獄し、帝国の重要人物を連れ回した。

だが、その重要人物と騎士団長の計らいで彼は今までの罪状を含めて無罪となった。
今まで青年を追っていた男にとっては信じられないことなのだろう。

「エステリーゼ姫と閣下の計らいだ」

まっすぐな男。

シュヴァーンは目を細めた。それが威圧になったのかは分からないが背の小さな男は言葉をつまらせ、背筋を曲げて歩き去っていった。

どちらかと言えば、”彼”の方がギルド事情について調べやすいか。シュヴァーンは騎士服を脱ぐと人知れず騎士の詰め所を後にした。

そんな様子を、建物の影からジッと見ていた。

「へえ？ おもしろ」

カイは口元に手を当て、笑う。

目の前の魔物を斬り伏せた彼女は一息つく。

「相変わらず小綺麗な戦い方しやがるな」

巨漢の男が重厚な刀を収める。彼の言葉にイチトシは笑った。

「嫌味な言い方。ドン、そろそろ私を引っ張りだそうとするのはやめてくれないかな？」
双刀を腰のホルダーに収め、彼女は溜息をつく。こうして街の近くに現れた魔物たちの討伐に連れてこられるのは何度目のことだろう。

ギルドの巢窟、ダングレストの結界が不安定なわけでもないが町の人間や行商人の安全を確保するため、という名目でドンは自分の立場を知らずながら身軽に魔物討伐へ出て行く。

最近はいちトシを連れて。

まるで自分が重要視している人間だと周りに知らしめているようだ。いちトシにはそれが嫌だった。多くに知られれば自分たちの目的を知る人間が増える。自分たちの目的を知る人間が増えれば。

「おいいちトシ、」

「なあに、ハリー」

「っ、いいかげん子供みたいな扱いやめてくれよ」

笑いかけると顔を背ける青年、金色の髪を持つ彼はいつだったかダングレストで迷子になっていたいちトシをドンの元へと導いた青年だ。かつて戦うことを怒られた青年も今では自身の力を持って戦うギルドの一員。

だがどれだけ日が経ち力を持つてもいちトシはハリーを子供扱いする。本人曰く、可愛いから、だそうだがその理由もまた気に食わない。

「ごめんね、それで、どうしたの？」

「アンタが欲しがってたもん、確保してあるぞ。だけどあんなの、何に使うんだ。しかもあんな大量に」

「どんなものにも使いみちはあるんだよ。ありがとう、あとで受け取りに行くね」

誰かが彼女の名を呼んだ。

夜駆け鼠の仲間である男の呼び声にイチトシはハリーとドンに背を向け、森の奥へと歩き始める。

この森の先に彼女たち、夜駆け鼠の拠点がある、らしい。

夜駆け鼠の仲間での古株のものしか入ることの出来ない拠点の真偽を知るのは難しい。

「ちつ、アレより厄介だな」

「ドン？」

唐突に苛立った自分の祖父へ目を向けると彼はイチトシの向かった先を睨んでいた。気に入って使っているんじゃないのか。ハリーの疑問にドンは目を細めた。

「思い込みを自分の意志だと決め付けてやがる。ふらふらしてる奴よりよっぽどタチがわりい。戻ろぞ」

ふらふらしてる。なんとなく、そう言われている男は想像できるが。

ハリーは歩きながら背後を見た。森の先にイチトシたちの拠点。

そういうえば、イチトシが夜駆け鼠を作った理由を知らない。荷物の受け渡しの際にも聞いてみようか。ドンより少し遅れてダングレストに帰ったハリーを待っていたのは境界が消え、いつも以上の喧騒に包まれたダングレストの街だった。

(2016/01/30 19:01:59)

第21話

「ダングレストに行く。……カレンも呼ぶ必要があるかな」

拠点に向けていた足を反転させ、彼女はダングレストへ向かう。ただの気まぐれでは無さそうだが、まだ全ての意図を教えてもらえるほどではないか。

カイは彼女の背後からゆっくりと歩みを進めた。

ダングレストで彼女たちを迎えたのは落ち着きのないダングレストの街と、上機嫌なドン・ホワイトホースだった。街についてユニオンの入口を見張る天を射る矢の人に話を聞こうとするとユニオンから出てきたドンにユニオン内へ迎え入れられる。

「ドン、まるで戦争でも始まりそうな雰囲気だけど」

「始めんだよ。帝国と、ギルドのな」

さぞかし楽しいのだろう。大声で笑うドンはこれまで見たこと無いほど機嫌がいい。彼の歯止めともなっている幹部の姿も近くに見えない。

「帝国がそこまで愚かだとは思えない。ドン、何を考えてるの」

「気になるならためえも行って来い。あいつらはガスファロストに行かせた」

「あいつ”ら”？」

「ガスファロストだ」

疑問に答えていないよ。イチトシの代わりに嫌そうな顔をしたのはカイだ。

「ううん、ガスファロストか。いいよ、行こうか。カイくんはこつちに残つてドンの手伝いをしてあげて。ガスファロストには私一人で行く」

「首領一人で？」

「問題ないから。もともとガスファロストには用もあつたから」

時折、そう、いつもではないが時々、彼女は無謀とも言えるようなことをする。

彼女の剣の腕前を知らないわけではないが、女性を一人で行かせるわけには。そう言おうとしたカイの口が閉じたのは、彼女以上に上の立場にある男が早く行って来いと首領を急かしたからだ。

後はお願い。

首領はいつもの笑顔を浮かべていた。

知った女性の居ない部屋でドンとふたりきり。カイは気にも留めない。夜駆け鼠には面白い奴が多いな。ドンに話しかけられ、ようやく彼は感心をドンへ向けるほどだ。

「てめえも」普通、じゃねえだろ」

「……知ったようなことを。大体、面白いのを抱え込んでんのはそつちだろ。クソジジイが」

カイの失礼な言葉にも、ドンは笑って答えた。

普段は砂嵐に覆われた巨大な塔、ガスファロスト。紅の絆傭兵団（ブラッドアライアンス）が拠点になっているという噂はあつたが砂嵐が止むことは無くそれ以上の情報を仕入れたことはなかったな。

正面入口のやけに少ない見張りを気絶させたイチトシは一人でガスファロストを探索していた。入口に警備が少ないのもそうだが、内部にも人が少ない。紅の絆傭兵の間が気絶しているのも何度か見た。

既に来ている彼らがこれをやったのか。

ガスファロストの上層を目指し、歩いていると不意に誰かがイチトシの名を呼んだ。知った声に振り返ればギルド間で何度か付き合いのある幸福の市場（ギルド・ド・マルシエ）の商人と何人かの民間人が居た。

「何をしてるの？」

「投獄されてたんだ。イチトシさんもかい？」

「いえ、私はドンに言われてきました。おそらくもう少ししたら安全な状況を作れるはずですから」

「あの兄ちゃんたちも心配だがなあ」

あの、兄ちゃん？

来ているのは中年ではないのか。

イチトシの疑問に商人は首を傾げた。自分たちを牢から解放してくれたのは黒くて長い綺麗な髪を持つ兄ちゃんと、とても美人なクリティアのお姉さんだった。彼らは上に用があるからといって紅の絆傭兵団を蹴散らして行ってしまった。

黒くて長い髪の男。ああ、思い当たるのが居るなあ。でもなんで彼が。

「私は上に行きます。どうか皆様はここから出られないよう」

「え、ちよ、イチトシさん!」

イチトシが戦えることを知らない商人たちは上へと向かうエレベータに乗り込もうとするイチトシを止めようとしたが、商人たちの手が届く前にイチトシはエレベータへと乗り込んだ。

けれど、彼らも登っていったのならもう最上層に着いているのか。何かがある、あつたとしても、間に合わないかもしれないなあ。

エレベータの中、双刀の鞘に手を乗せた。

「ね、ねえ誰か来るよ!」

上層から聞こえたのはまだ年端も行かない子供の声。よもや子供がこんな場所ですら捕らえられているとは思えない。牢は下にあつた。

もしもの為に、と双刀の鞘を握る。

「つ、イチトシ、ちゃん?」

知つた声もあつたが、それよりも臨戦態勢にあつた何人かの内に有り得ない姿を認めてイチトシの警戒は驚きに変つた。

「エステリーゼ様? 何故貴女様がこのような場所に居らつしやるのですか」

桃色の髪にスカート姿の、少女。

細身の剣を強く握りしめた少女は、エステルは驚きに体を固め、周りの仲間たちと思われる青年、少年、少女たちは皆顔を見合させた。

イチトシの名を呼んだ男と、桃色の髪の少女の他にも、知つた人間が居た。

「ローウェルクンも、一体何をしているの」

黒く長い髪の青年。ユーリ・ローウェル。足下に青い犬、ラピードを従え、彼は手に持つていた刀を鞘へとしまった。

「そりゃこつちの台詞だ。アンタ、ここで何してんだ、イチトシさんよ」

帝都の下町に居るはずの青年に、帝都で菓子を配っているはずの女性。帝都の城に居

なければならぬはずの少女に幼い少年少女。何だこれは、何の集まりだ。

滅多なことでは驚かない自覚があったが、少し自信を無くしそうだ。

「え、ちよ、なにになに。青年たちイチトシちゃん——」

『見つけたぞ!!』

まるで狙っていたかのようなタイミングでユーリたちの背後に屈強な男が2人、走りこんでくる。武器を構えた男たちに反応する前にユーリたちの間に一陣の風に吹いた。

風は男たち2人の間も吹き抜けた。

吹き受ける瞬間、ごっつ、と鈍い音が響き男たちは地面に倒れた。

「情報交換は後の方が良さそうだね？　じゃあ今は何も聞かず君たちを手伝おうか」

叩き伏せた男2人の向こう側で彼女は笑い、片手を差し出した。その様子に違和感を抱けるのはユーリとレイヴン、そして、もう一人だけだった。

その人は柔らかなく笑うイチトシを背後から、じっと、見つめていた。

(2016/01/31 01:12:58)

第22話

紅の絆傭兵団の首領バルボスが死んだ。聞けば「誰か」と共謀し、ギルド全体のトツプとなろうとした。帝都で得た大型の魔核（コア）を設置した剣を武器に。だが、それだけか？

イチトシは首を傾げる。

ギルドのトツプと吊り合うような取引相手が要る。帝国のトツプになろうとしている人間？ それとも帝国を裏で牛耳ろうとしている人間か。分からない、けれど。

「イチトシちゃん、おっさんの話聞いてる？」

ガスファロストでバルボスの最期を見届けた彼女はレイヴンに手を引かれるまま、ユーリたちよりも先に脱出をした。ダングレストへ向かう道中、魔物の相手をしながらイチトシに話しかけていたレイヴンはいい加減話を聞かないイチトシの腕を掴んだ。

引き止めるように強く掴んだつもりはなかったが、イチトシはハツとしたように強く左腕を振り払った。

振り払われた右腕を見つめ、レイヴンは驚きに言葉を失った。負の感情を持たないか

のように怒ったり、荒だったりしない彼女が。

「…………ごめん、なんだって?」

返された言葉もどこか、荒々しい。

彼女の逆鱗か、と観察するように彼女の左腕を見た。いつものように黒い手袋のされた華奢な左腕。

「だから、何でイチトシちゃんがあんな場所に来たの。それも一人で」

気づかないフリをした。けれど、彼女は隠す気もないのか、レイヴンの見る初めての不機嫌を散らしたまま押し黙ってレイヴンの前へと歩み出た。

通りに入る魔物はまるで居ないものかのように無視をするか、一撃のもとで気絶をさせられる。

左腕に触れただけで、こんな。

話しかけることもはばかられる雰囲気、結局レイヴンはダングレストに着くまでこれ以上言葉を発することが出来なかった。

ドン・ホワイトホースに面通しを依頼しているイチトシの隣を通り抜ける時でさえ、緊張してしまう。

「レイヴン」

背後から名を呼ばれて、振り返った。

「ごめんね。……ありがとう」

何が。

「君の心配は、素直に嬉しい。だから、あんな対応をしてごめんね。心配してくれてありがとう」

そうして浮かべた笑みはいつもの笑みで、レイヴンもまたいつもの笑みを返した。やっぱり女性は笑ってなきや。

ドン・ホワイトホースの帰着を待ち、イチトシはレイヴンと共に報告を済ませた。バルボスの末路、発言、紅の絆傭兵団の様子。反対にドンからは街の状況について知らされる。

事の発端となった帝国、評議会の奴は同じく帝国の騎士に捕まったということ。そもそも何があったのか。

「……それは、ア——」

開きかけた口を閉じる。それはこの場に在ってはならない情報。自分が持ち得るはずのない情報。ギルドでは不必要なはずの情報。

「おい、イチトシ。何があった」

ドンに話しかけられ、左腕の痛みに気づいた。気づけば右手で力の限り左腕を握っていた。そこにあるのはただただ黒い手袋。そしてその下にあるのは。

「何も、ない。ガスファロストにも残されていないなかった。うん、まだ私は振り出しに居るよ」

ケロリ。

その笑いが気に食わねえ。

決めつけたような言葉に、決めつけた意志。

「てめえ、いい加減自分で立つたらどうだ」

決めつけているから、閉ざしている。閉ざしているから、届かない。一発殴りでもしたら反応が得られるだろうか。物は試し。

ドンが不穏な空気とともに椅子から腰を上げると同時に、部屋の扉が勢い良く開かれる。

「イチトシちゃん！」

ドンの妙な気遣いが炸裂する直前。レイヴンが扉を開けた。

息を切らし、両手を、紅く濡らして。

イチトシはそんな景色を”知らな”かった。

「冗談だろう?」

ルディアースが書類を片付けながら使用人の言葉を疑った。

有り得ないと思っっている言葉を鵜呑みにするほど、馬鹿ではない。と自負している。自分を殺しに来た帝都の亡霊を冷静に分析できるほどなのだ。

だが、だがそれは。

「アイツが……？ つ、イチトシは、あの子は！」

声を荒げ、椅子から立ち上がり机を叩いた。

バン、と大きな音が響いた。

目の前で崩れ落ちた執事服のソレに気を取られた一瞬。

たった一瞬。

バン、と大きな音が響いた。再び。

熱い。そう、どうしようもなく胸が熱かった。視界が暗転する。思い出したのは最愛の妻でも、これまでの功績でもない。

ただ、愛おしい——

(2016/01/31 22:02:55)

第23話

「本当に大丈夫なの？」

夜更けに、傍に居るのは誰でもない。レイヴンだった。拠点に夜駆け鼠以外の人を入れたのは初めてだよ。そうやって言葉を返した。いつものように、笑って。

レイヴンはそう、と短く言葉を返して彼女の座るベッドの隣に腰を下ろした。

深く息を吐き出す。恐る恐る片手を伸ばして灰色のふわりとした髪に触れると彼女は小さく首を傾げながらレイヴンを見た。怯えはなく、安堵も、何もなし。

だからこそ、歪だと感じてしまう。

それが彼女に感じる違和感の正体なのだろうか。

「ねえイチトシちゃん？」

「なあに、レイヴン」

そう見せているのか、そうするしか方法を知らないのか。

柔らかな彼女の髪を撫でながら、せめてもとレイヴンは優しいげに笑ったまま言葉を続けた。

「たまには諦めていいんでない？」

イチトシの気配が変わる。

敵意や、嫌悪。負の感情とも言えるそれが混ざり合ってレイヴンに突き刺さる。けれどもあの時のように手を振り払われることはなく、ただ視線が向けられるのみ。

「イチトシちゃんが何を探しているのかおっさんは知らない。けどもそんなに肩肘張るモノなの？ たまには休憩しなくちゃ、見つかるもんも見つからないわ」

「あの子は私が見付けると誓ったんだ。あの子は私が見付けて守るんだ、もう二度と、不幸なことがあの子に降りかからないように」

「……イチトシちゃん、少なくとも今日は寝なさいな。おっさんがここにいてあげるから、見張りもしてあげるから」

疲れたでしょ？

軽く肩を押すと驚くほど従順に彼女の体はベッドに倒れる。

掛布をかけて、おやすみ、と声をかけた時彼女は既に目を閉じていた。規則正しい吐息に懐かしさを感じ、思わず笑ってしまう。彼女の首に軽く手をかければ明らかに皮膚ではない金属の感触。

細い金属のチェーン。その先は服に隠れているが、彼は何かがあるか知っている。きつとドッグタグのようなシンプルな飾り。

彼女に、とても良く似合う。

最後に、その頬を撫でて部屋を出る。信用する人間にしか場所を明かさないと、夜駆け鼠の本拠地。ここに来れるのは首領である彼女と、幹部であるジイとカレン。そして、もう一人。

現在本拠地の管理を任される彼が居た。

「ちよつとレイヴンさんにお話があるんですけど、いいですか？」

カイ、と名乗る彼。

セミロングの赤い髪を無造作に跳ねさせた彼はいたずらっぽく笑って居た。

「それとも、隊長さんって呼んだほうが良いすかね？ 騎士団隊長首席さん」

お茶でも飲もうか。

ケラ。笑う彼が小悪魔に見える。可愛くない、悪魔の子。

懐に小刀があることを確認し、彼はその話に応じた。

目が覚めた場所で待っていたのは、騎士団長閣下の不機嫌極まりないような顔だった。不思議だった。単純に。彼なら自分を殺そうと思っていたからだ。現に騎士団長は帝都の亡霊と呼ばれる刺客を自分の家へ差し向けた。殺すために。

そして今回のことも、彼が仕組んだこと、そう思い気を失った。

愛しい娘の心の安否を気遣いながら。

騎士団長をさておき、ルディアースは周りの様子を観察した。今場所は自分の家ではない。どこか分からない。帝都ではない、気がする。

当たり前だろうが妻の姿は近くにない。

「ふと、我に返ることがある」

独白と言うに相応しい小さな声だった。

「これではダメだと、こんなやり方をすべきではないと思う時がある。だがもう、私たちは戻ることが出来ない所まで来てしまった」

胸が痛い。おそらく銃で打たれたのだろう。

「今更な言葉だな、アレクセイ。僕らに亡霊をけしかけ、殺そうとした。後戻り出来ないのは今に始まったことじゃない。だから僕らは立場ある人間として、ひとつひとつの行動に責任を持たなければいけない。デイノイアの家でもそう育てられたんじゃないのか」

起こそうとした体は痛みで再度布団の中に逆戻り。情けないな。これでは見限られても仕方ないな。ただそれでも。

ルディアースは自分の寝かされたベッドの近くで深く椅子に腰掛け、死んだような目をする騎士団長よりはマシ、だろうか。自分を殺そうとも、諭そうとも、助けようとも

しない。

ただ、悔いているような男の姿ほど見ていてつまらないものはないな。かつて、男がウジウジしている時ほどつまらないものはないですよ、と妻が言っていたことを思い出す。たしかに、そのとおりだ。

古い考え方では有るが、男は外に出て稼いでくる強いモノだ。家の中は、妻に任せて。そう思つてから、ルディアースは再度騎士団長を見た。

コイツに、この子に妻は居ない。いい意味でも悪い意味でも。仕事に集中するあまりなのか、敢えてそういう存在を退けたのかは知るところではない。

こうして時折踏みとどまるのは、こうして自分を生かしておくのは——。

「まだあの子のことを気にかけてくれるのか、親不孝者なイチトシを」
「イチトシ、彼女は何故諦めない……。彼は諦めたというのに」

「仕方ないよ。彼女にとつてあの子が全てだ、そして全てはあの子であると言つても過言ではない。そのくらい分かるだろう」

そのために彼女は親と家でさえ捨ててるんだよ。

くすくす、笑うと傷に障る。

「それに、彼は本当に諦めたのかい？ 僕にはとてもそうは見えなかった。諦めたのはどちらかと言えば——」

言葉を遮るように、部屋の向こう側から誰かが騎士団長を呼んだ。知った声に二人共が表情を変えた。ルディアースは単純に驚きを、アレクセイは無表情を。

アレクセイの声に外に居た男は扉を開ける。

ルディアースと同じ驚きを見せた彼はいつもの鎧姿ではなかった。鎧のみを取り払った姿で、髪もどこか乱れているように見える。

かつて自分に娘をくださいと、恐れながら言ってきた青年の姿に、あまりに良く似ていた。

「何故、ルディアース様が。そのお姿は」

「君が気にすることではない。ホワイトホースはなんと言った」

「っ。ノードポリカへの書状を持ち、エステリーゼ様たちの後を追えと」

「ノードポリカか。しばらくはそのまま指示に従っていたまえ。次の指示はおつて出そう」

アレクセイが部屋を出て、部屋の中には沈黙が漂った。

眠った姿のままのルディアース、ゆっくりと近づいて来る橙の騎士服を着た、彼。

「僕を、殺すかい。今なら容易だろう」

「指示を、受けておりませんので」

「彼と話せるのかわからないが、ひとつ聞かせてくれないか」

騎士服の男は答えない、ただ、ルディアースからの言葉を待つ。

「今でもあの子が好きかい？」

騎士服の男は答えない。

「僕はね、家族が増えたら父と呼ばれるのも良いかと思っっているんだ。もう、手遅れかな？」

騎士服の男は一礼して部屋を出た。片手で強く刀の柄を握る。

——思っているんだ。

今でも、そう。

そんなことを言われたって。

ダングレストの奥まった路地の奥にある小さな療養所。アレクセイが何処からか見つけてきたこの場所で指示を受けることが多かった。今日もだ。鷲が巣に帰った。そんな暗号を聞かされてこの場所にやってきた。

いつもどおり。命令を聞くだけの作業。そう思っていた。

ルディアース。

彼が居ることも傷を負っていることも知らなかった。全てを知らされないことなど今更だが、それでも、ルディアースの事は知っていたかった。

「今でも好き……？」

「何が？」

急に話しかけられ、腰の剣へ手をやった。

振り返った先に居る女性の姿を認めて安心するも、すぐに気を引き締め直す。彼女と会うのは、初めてだから。

「初めまして、騎士団隊長首席シユヴァーン・オルトレインさん」

「お初にお目にかかります、イチトシ・ルディアース様」

「ふふ、家名は捨てたものだよ。今はただのイチトシ。初めて会えた。シユヴァーンさん、貴方に聞きたいことが、いっぱいあります」

剣の柄を握る彼の手を取り、彼女は微笑んだ。

(2016/02/02 15:09:51)

第24話

鼻歌を歌うレイヴンが隣に並び、街道を歩いていった。

ドンに言われてエステリーゼ姫を監視し、ついでにノードポリカのベリウスの元へ手紙を届ける仕事を頼まれたレイヴンはワケあつて壊れたダングレストの橋が直るのを待ち、ダングレストを出た。

イチトシは、ノードポリカから砂漠へと出るつもりだった。

何があつたのか、レイヴンの知るところではないが意志の堅い彼女を止めることも出来ず、止める理由もなく。せめてノードポリカまでは、と共に行くことを提案した。

少しだけ渋つたイチトシだったが強く言い張るレイヴンに負けて、今に至る。

「明日には青年たちに追いつけそうね」

「そうだね。今日も野宿になるだろうけど、大丈夫？」

「あのねえ、それはおっさんの台詞だね。女の子が野宿つていうのもそうだし、おっさんと二人つていうのも嫌でしょ」

野営の準備をするイチトシに習つて火元の準備を始めながら話しかけると彼女は柔

らかに笑っていた。

「私、そんなに若くないからねえ。それに、レイヴンさんは素敵な人だよ」

「ぶつ、な、なな、何いってんの」

手際よく結界を作り終え、テントを立てるイチトシを視界に収めながら、集めていた薪代わりの木の枝は全てその場に落ちる。

耳まで赤くしたレイヴンを見やり、彼女は笑う。

事実の何がそんなに恥ずかしいの？

「イチトシちゃん、なんていうか。時々大胆になることない？」

「ああ、ジイとカレンによく言われるよ」

納得だわ。

落ちた薪を拾い集めて火を付ける。手持ちの食料で適当な料理をつくと彼女は黙々とそれを食べていた。

彼女と食事をする機会は、少しだけあった。

ギルドの仕事の話し合いで、レイヴンからの誘いで、イチトシからの誘いで。

思い出せば彼女は『美味しい』や『不味い』といった感想を口にしたことが無い。気がする。

「美味しい？」

「うん、美味しいよ」

やはりどこか、歪。美味しそうに感じられない、というのか。

レイヴンは自分の分の料理を口に運びながら、ジツとイチトシを見ていた。特に所作等が気になるようなわけではない。むしろもともと貴族であったことを裏付けるほどには綺麗な所作だ。

「イチトシちゃん、おっさんとお話しましょ」

「いいけど、何の話？」

「イチトシちゃんの昔話」

語尾にハートマークでも付けるように言えば少しは話してくれるだろうか。

レイヴンの思惑が当たったのかは分からないがイチトシは良いけど、どこから話そう、と首を傾げた。

光源の火がパチリと音を立てて爆ぜる。

「話すと言つても、私には十数年の間の記憶が無いからそんなに話せることは無いんだよ」

始まりは十数年前。傷ついた自分が奇特定の夫婦に拾われるところ。

倒れていた自分を見付けるのはそれこそ偶然、奇跡とも言える偶然だった。倒れていた場所はフアリハイド郊外の平原。魔物にやられたのか死にそうな傷を負って、見るも

無残な状態で倒れていたのが自分、イチトシだった。

傷どころではなく、酷く薄汚れた状態だった。彼らは暇潰しという名の散歩の最中だった。貴族という名前が嫌いなわけでないが、その立場にがんじがらめに縛られることを嫌った彼はよく使用人を一人だけ連れて街の外に狩りに出ていた。

武器である重厚な弓を背中に構え、歩いてきた彼、ルディアースの目の前で使用人の者が足を止める。

妙なものを捉えた使用人の前に出ると赤い色が目についた。

ルディアースは慌ててその物体の近くに膝を付いた。紅く、汚れているがそれは人の形をしていたからだ。得体のしれないものに、と慌てる使用人を差し置いて薄汚れたそのの口元に手をやる。

息はしているようだが、怪我をしているのか鮮やかな赤色に包まれすぎている。

そしてお人好しのルディアースは拾った。名前もわからないような者を拾うとは、という周りの声に心を傷つけられる日もあった、らしい。

彼以上に彼の妻が拾った者を気に入った。自分たちの娘とする、といつて聞かなかつた。

それが始まり。その時、付けられた名前がイチトシ。

今の、私の名前。

話し終えてレイヴンの表情を伺うとなんとも言えない顔をしていた。悲しみなのか、疑問なのかは分からない。いつもの笑顔でないことは確かだった。

そんな表情をされると思っていたいなかったイチトシは首を傾げる。

「生きてて、良かったね」

迷った挙句の言葉にイチトシは笑顔を返した。

「実感はないよ。でも、うん。生きててよかった。今では本当にそう思える。——さあ、レイヴンさんは眠ってください。冷えてきましたからね」

「ちよつとちよつと、見張りならおっさんがやるつて！」

「そうですか？ では、お願いします。眠くなったら私を起こしてくださいね」

片手を振ってテントの中へ。

レイヴンは火の中に枝を放り投げながら、先ほどのイチトシの言葉を反復する。拾われた貴族。貴族の血筋にない貴族。なるほど、他の貴族連中がルディアースの次期当主の失踪を喜ぶはずだ。

血を最もだと思ふ貴族連中にとって、努力と才能と、自身の力で立場をつかみとった彼女の存在は鬱陶しいだろう。

不思議と同情はしていない。けれど、その後どうなったのかは気になっている。貴族で在り続けた彼女は何を思つて生きているのだろうか。

「そういえばジイは？」

貴族に拾われた彼女はいつジイと知り合つたんだ。もともと知り合つていたように感じていたが、先ほどの話にジイは出てこない。

——生きててよかつた。今では本当にそう思える。

「生きててよかつた……」

生きててよかつた。数回、同じ言葉を繰り返すと不思議と安心感が彼を包み、膝を抱えた彼はいつの間にか目を閉じ、眠っていた。

目が覚めたのは陽が登り始めている頃だった。

バサバサと布が立てる音に目を開くとイチトシがテントをたたむところだった。

慌てて起き上がるとおはよう、とやわらかな声がかかる。

「お、おはよう」

「朝ごはん、適当だけどあるからお腹に入れておいて」

いつから起きてた？ ううん、分からないけれど少しだけ前だよ。ごめんね、寝ちゃつて。いいよ、何事もなかったから大丈夫。

テントを小さく畳んでしまう。早めに出ればお昼には合流できるかな。小さな子や

女の子たちも一緒だからきつと合流できそうだね。じゃあ今日は――。

今日の予定を聞いてレイヴンはひとつうなずいた。問題無いわ。

魔物が出たらイチトシが双刀で斬りこみ、レイヴンが弓矢か術でトドメを刺す。互いに魔物との戦いは慣れたもの。巨大獣を倒すために共闘したこともある。

トリム港に向かうまでの道で苦戦をすることはなく、予定通り昼ごろにはトリム港に到着しそうだった。

ただ、その途中のトルビキア中央辺りの街道で珍しい一団を見付けた。

「お、おぉっ！」

それはレイヴンが追いかける必要なければならぬユーリたち一行だった。黒の長髪を持つ男は目立つ。桃色の髪の少女もだ。

本当に旅をしているのかと思うと疑問が色々ある。

走って彼らに駆け寄り、すぐに打ち解けているレイヴンに遅れて歩いているとユーリがイチトシを見付ける。

「何となく居ると思っただけ、イチトシさんよ」

「君は予知能力者だったのかい、ローウェルクン」

「な、なな、なな夜駆け鼠の首領だ!!」

少年の興奮した声に目を向けるとハンマーを携えた少年が目を輝かせてイチトシに

詰め寄っている。

恨みというより尊敬？ 憧れ？

まるで夜駆け鼠の噂だけを聞いて入りたいと言ってきた若い子たちのようだ。

「アンタ、ギルドで有名なんだってな？」

少年を無視してユーリはイチトシに問いかける。少々恨みがましく聞こえるのは気のせい。いや、違う。

イチトシは笑う。

「嘘はついていないよ。私は十年前まで貴族だったから十年前にギルドを作って、今があるんだ。細かい話はせめて街に着いてからにしよう？」

街道では魔物も出るといえばユーリたちは納得して街へ足を進めた。レイヴンはジューイスという美しいクリティアの人に夢中なのか必死に話しかけ、リタという魔道士は完全に警戒してイチトシをにらみ、カロールという少年は目を輝かせたままイチトシに話しかけ、その横からゆっくりとエステリーゼが近付いていた。

エステリーゼの姿を視界に収めるとイチトシはその場に足を止めて深々と頭を下げた。

「このような場所でご挨拶することをご容赦頂きたい」

貴族としての姿にユーリは本当だったのか、と皮肉っぽい口調でイチトシへ笑いかけ

るも彼女はあゝ魔を上げない。

自分よりも格上の相手にしかるべき場所で挨拶を出来ないこと、前回あつた時に無礼な態度を取つたこと、その全てが謝罪に値すること。そして、許されないこと。

「エステル、多分エステルが許してやらねえとこのオネエサンこのまんまだぞ」

「えっ！ あ、あの、イチトシさん。私は気にしていませんから。それに、よかつたらユーリに接するようにしてください。今の私は、立場なんてありませんから」

「それは、……エステル様のご要望とあらば努力いたしましょう」

「ご要望ですっ！」

この、無邪気が怖い。

ようやく顔を上げたイチトシが見たのは満面の笑みを浮かべるエステル嬢で、ため息が出そうになった。

エステル嬢、さん。そう呼ぶと彼女は頬を膨らませてエステルです、と強く返した。

イチトシがマトモにエステルの名を呼べるようになったのは、それこそトリム港に着いてからの事だった。これまで以上に、疲れていた。

(2016/02/02 22:59:44)

第25話

カロルの質問攻めを退け、エステリーゼを死にそんな思いをしてエステルと呼び、警戒を極めたようなりタには笑みを向けていたらしびれを切らしたように居なくなつた。

男女で別れた部屋割り。問題は何も無い。

夜更けに一人、部屋を抜け出した。

海を眺めようと港へ出た。静かな景色の中、波の音だけが聞こえてくる。

「海……」

この世界の半分以上を占めるといふ水溜まり。深く深く、それでいて、広い。

埠頭の先に足を投げ出す形で座り、足下に時折当たる冷たい飛沫に震える。寒い。でも、心地良い。背中側に手を付いて、空を見上げる。今日は天気が悪く星は見えない。代わりに月が照らした灰色の雲が黒い空の海に浮かんでいる。

風が吹いているようで雲の流れは少し早い。

不意に、肩から何かがかかる。フワリとしたそれは紫色の羽織り。

「外に出るなら上着くらい着なさいな」

ピンク色のシャツ姿の男がイチトシの隣に座る。

「うー、今日はまた冷えるわね」

だったら羽織りを着たら良いのに。自分の肩に乗せられた羽織りを取ろうとするが彼はそれを断固として拒否する。それでいて寒そうに体を縮める。

「それで、どしたの？」

「特に意味は無いよ。ただ、あんなに話をしたのは久しぶりで」

少し、疲れた。そう言うとレイヴンは笑った。自分はまだまだ話し足りないくらいだというのに、情けない。

「私は、のんびりと話をしたいんだ。ああやって詰め寄られるのは初めてだった」

「あー、少年ね。仕方ないわ。ギルドに憧れてるみたいだし、夜駆け鼠って聞いたら興奮もするって」

噂だけを聞けば夜駆け鼠はとても評判がよく、これからも成長していくであろうギルドだから。レイヴンの話にはイチトシは耳を傾ける。

世間一般から見た夜駆け鼠というギルドの話だ。

突然現れた荷物運搬を主として引き受けるギルド。荷物運搬の邪魔になるモノは魔物であれ、盗賊であれギルドの構成員たちによって退けられ、依頼を失敗したことはない。構成員たちはもちろん夜駆け鼠の首領の剣術はかの有名な騎士団長に勝るとも劣

らない。

ドン・ホワイトホースが手元に隠し持つ剣のひとつ。

「つはは、面白いね、その噂。私が騎士団長と同じ腕前なんて。恐れ多いことだよ」「というか、オッサンも噂聞いてたからビックリしたんだけど。女の人だとも思わなかったし」

「ふふ、面白い。笑ったらすつきりした、戻ろうか」

紫の羽織りを羽織ったまま立ち上がるとレイヴンがイチトシを見上げて笑った。

「そうね、おっさん風邪引いちゃいそう」

立ち上がり、歩き始めたレイヴンの冷えた手を暖かな何かが包む。見れば相変わらずの表情でイチトシがレイヴンの右手を取っていた。

「不思議なものでね、手を握られると温まった気になったんだ」

「……昔、誰かにそうしてもらったの？」

「うん、とても大事な人にね。手を握ってもらった、頭を撫でてもらった、抱きしめてもらった。寒い時には不思議と暖かくなったんだよ。どうかな？」

レイヴンはイチトシを見ること無く、前を向いて歩いた。温かいわ。イチトシは嬉しそうに笑った。

冷たい手を握ったまま宿に帰り、羽織りを返すとレイヴンは笑っていた。いい時間が

過ごせた、と。

部屋に戻ると少女たちはすやすやと眠っている。旅など慣れていないだろうから、きつと疲れているのだろう。

起こさないように気をつけてベッドに入る。両手をすり合わせると、少しだけ暖かった。

砂漠に行くつて、何考えてんの。

リタという少女の冷たい視線がイチトシに突き刺さる。何処に行こうとしているのかロルの一言でユーリたちの感心がイチトシの目的へ向かう。

なんとか気をそらせないかとレイヴンが笑いながら話を振ってみるも逆にユーリやジユデイスは興味を持ってしまい、リタの話に乗ってイチトシへ視線を向ける。

「砂漠に行くんだよ」

そう言った瞬間、リタの口から発せられたのが「何考えてんの」だった。

どういう意図があつて行くのかは知らないし、知る気もないが砂漠なんて行くだけ無駄。死にいくつもり？ 心配とも取れる言葉にイチトシは笑いかけた。

「ありがとう、でも大丈夫。砂漠越えは初めてではないし」

「はあ？」

カロールが流石夜駆け鼠というところでようやくリタにも夜駆け鼠というギルドの全貌が伝わった。届け物をするギルドで世界中、いろいろな場所に行っているギルドなのだ。

だがそれでも納得出来ない、と言い始めたところでイチトシがユーリたちに先を促した。いつまでも立ち止まっては行られないでしょう？

そう言ってしまうばしつぶでは有るがリタも頷いて幸福の市場が用意したという船へ乗った。

甲板に座り込み、目の前に広がる濃い霧を眺めていた。隣には黒い髪青年、ユーリが並んで座っている。

「やっぱ髪が長いと大変かな？」

「どつちかってえとアンタの髪がすげえぞ」

短めの彼の灰色の髪はいつもより膨らみ、自由に飛び散っている。撫でて押さえると湿気が手に絡みつく。

「ううん、この海域にこんな霧がかかったかな」

「なんか出そうだな」

「幽霊？ ……幽霊、か」

怖がるかと思つて何気なく言つてみたが、思いの外沈み込んだ。怖いわけではないだ

ろうが、イチトシは甲板から前を見つめている。

「幽霊でも、良いなあ」

ポツリ、つぶやいた彼女は不意に立ち上がる。

「ユーリくん、身構えて」

聞き返す前に、船を襲う衝撃。

見ればいつの間近づいていたのか、ボロボロの巨大船が目の前にある。ぶつかつたのか。

船の中から慌てふためく声が聞こえてくる。突然の衝撃に尻餅をついていたユーリの目の前に差し出される白い手。小さなその手を掴むと強く引き上げられる。

「マズイね、古い駆動魔導器を使っていたら衝撃でダメになってるかも」

イチトシの言うとおり、船の中からは駆動魔導器が動かないという叫びが聞こえてくる。

「なんだか、目がキラキラしてるけど私は魔導器の修理を手伝うよ」

「ちえ、じゃあ良い。ジュデイでも誘って行くか」

ユーリの視線は船の中。随分楽しげだ。若いつて良いなあ。なんて、イチトシは故障した駆動魔導器へと手を伸ばした。魔導師であるリタでも駆動魔導器は専門外らしい、先ほどユーリに引つ張られて恐ろしげな外観の船の中へと入っていった。

ガチン。螺子を外して魔核の制御盤を開く。衝撃で幾分か基盤がずれただけだろう。それによって銅線がちぎられているかもしれない。そしたら、まあ、直せばいいか。

「なにか手伝える?」

不意に、後ろから声をかけられる。聞き慣れた声。

「大丈夫ですよ、レイヴンさん。ありがとうございます」

パチツ、と音がして電気が跳ねる。小さな痛みがイチトシの指を襲うが、気にすることなく作業を続ける。やはり、魔核からの力を振り分ける銅線が千切れ、基盤がズレている。

銅線は。

腰に下げているカバンから銅線を取り出し交換する。同時に基盤のズレを直してやる。駆動魔導器の電源を入れてやればエンジンがいい音を出し始める。

「うん、これでいい」

「器用ねえ、出来ないことはないの?」

「忘れること、かな」

伸ばしかけた手を止めた。指を怪我したでしょ、と用意した言葉も飲み込む。イチトシはそろそろユーリくんたちも戻ってくるかな、と甲板へ向けて歩いて行く。その背中へ声をかけることすら出来ない。

彼女が何かを探しているのはずっと前から知っている。

忘れるというのはそのことなのだろう。

「おっさん出発すんぞー」

青年が戻り、声をかけられてようやく我に返る。幽霊船から宝箱をひとつ得てきた彼らは船であつたことをイチトシに報告していた。

ふわふわとした彼女は少女たちに人気が高く、特にエステリーゼはあつたことを逐一彼女に報告する。

船の中には白骨化した人が居り、その人は宝箱を抱えていた。ヨームゲンにどうしても届けなければいけない物だから、と、新たに依頼として得てきた。宝箱の中身は分からないけれど――。

そこまで話してイチトシは首を傾げる。

「ヨームゲン？ 廃墟となつた街に届けるの？」

その場に居た全員がえ、と固まった。

「かつて……本当に昔の話、ヨームゲンという街があつたんだ。テムザ山の手前にね。けれど、結界魔導器が作られる前の街だったんだ。魔物に滅ぼされたという話だけが残っている」

「……まあ、白骨化した死体から考えてもそれが正しいわね」

でも。と、エステリーゼは意思を変えない。

届けるんです、と。街が滅びたのであればその生き残りに、と。

曖昧な依頼をよく受諾するものだ。

イチトシはエステリーゼへ笑みを向けながら一種の不信感を抱いていた。王族とは、
こういうもののかな。どこか、既視感を覚えながら。

(2017/01/15 20:05:46)

第26話

闘技場都市ノードポリカ。ああ、久しぶりに来た。

一都市は久しぶりの喧騒に少しだけ笑う。二度目の始まりでもあるこの街は安心してきる懐かしさがある。どうせならば統領ベリウスに挨拶に行こうか。

そう思い一歩を踏み出した所で後ろから名前を呼ばれる。

「ね、おっさんベリウスに用事あるんだけどイチトシちゃんの口利きで会えたりしない？」

彼の用事はそうだった。

ううん、考えるように首を傾げてから首を横に振る。

自分は確かにベリウスと普通以上に仲は良いが、それでも例外を作り出すことは出来ない。ベリウスに会えるのは新月の夜。それだけだよ。

「イチトシちゃんも？」

「どうかな、ナッツさんに聞いてみないとね。……でも、手紙はレイヴンさんが渡すものだよ」

「はー、面倒だけどわかってるわ。これからどうするの?」

見ればエステリーゼたちは街の喧騒に巻き込まれているらしい。こちらには気付いていないらしい。

どうするの、とは彼らと行動を共にするのか、という話なのだろう。確かに、行動を共にする理由はない。自分が目指すのは砂漠、そして、砂漠の先だ。

「レイヴンさんは未だ彼らと一緒に?」

「んー、そうね。爺さんの命令も有るし。まだしばらくは、ね」

「そっか、残念だけどここでさよならかな。彼らと一緒に行動すると制約が大きそうだから」

「そっか、残念だけど仕方ないか。じゃあまたね、イチトシちゃん」

うん、またね。

ふわりふわりとやはり柔らかな顔で彼女は笑い、ユーリたちの目をくぐり抜けて闘技超都市の中心地へと向かった。

闘技会場の中に入ってしまったらもうそれは知った世界。色んな人がイチトシへ声をかける。またギルドの仕事かい、や、買い物に来てね、など。

まるで故郷。

安心できる。だが、それは求める安息ではない。

笑みを浮かべるべであらう場所で溜息が出てしまう。

「似合いませんよ」

ふいに背後から話しかけられ、柄にもなく慌てて振り向いた。だが、そこに居たのは見知った男性。

驚いたんだから、言えばジイはしてやりました、と言いながら深く腰を折った。執事とは思えない言動だが、その挙動は執事そのもの。

「ルディアース様は生きておいでです」

「ああ、そう。もう、吃驚するから気配を消して後ろから話しかけないで」

「気をつけます。ベリウス様に？」

「うん。ナッツさんなら通してくれるはずだから」

レイヴンさんには嘘をついてしまった。けれど彼なら会えるだろう。遠からず、きつと。

ジイと並んで闘技場の奥に入ったイチトシは軽く片手を上げる。手の先には懐かしい恩人、ナッツ。

彼はイチトシに気付くとなんとも言えない苦々しい表情を浮かべた。一都市にいい思い出がないからだ。初対面でドンへの目通りの付き合いをし、酒で潰され、それからも依頼で会う度にひどい目に遭わされる。大体は酒関連だが。

「お久しぶりです、ナッツさん。統領に会えますか？」

「お一人で、あれば」

ナッツの視点なジイに。

そう言えばジイと会うのは初めてだっただろうか。うちのギルドの幹部でありお目付け役だよ、と紹介をするとジイは深く腰を折って挨拶を済ませる。

その態度に元々どんな人であつたか理解し、ああ、と声漏れる。

「ジイは待つててくれる？ このあとこのまま砂漠に行くからその準備をしてくれると嬉しいな」

「承知いたしました」

ナッツに目を向ければナッツは道を譲り、準備を命ぜられたジイは買い物に出かける。

やはり貴族。だが、ギルド仕事も難なくこなす。統領とは仲が良く、ドンにも信頼されている。一体何だと言うんだ。統領のような。

そこまで考えてナッツは統領の部屋に続く扉を閉めて鍵をかける。イチトシ以外の者を新月の夜以外にこの部屋に入れることは禁じられている。

それは統領からの命令。自分にとって、ギルドにとって絶対の掟。

だからこそ、掟の一部を捻じ曲げた彼女の存在はナッツにとって異様に映る。ただ貴

族というわけではなく。

「お久しぶりです、統領ベリウス」

「久しぶりじゃな、夜駆け鼠の」

「ふふ、その節は本当にありがとうございます。今日はご挨拶に。これから砂漠へ向かうかと」

砂漠、と聞いてイチトシの前に居る老婆が首を傾げる。

さも、嫌なものを見つけたかのような顔だ。彼女のこんな顔を見るのは初めてかもしれない。

「会ってしまったか」

誰とのことかは言わなくても分かる。

紅く気高い、鳥のような、それ。決して人ではない。けれど人の言葉を伝えることのできる。

ダングレストを出る前、紅の絆傭兵団の首領バルボスが死んだ翌日。ダングレスト中に警鐘が響き渡った。運悪く騎士団も居る中での警鐘。何事かと、ホワイトホースの部屋に居たホワイトホース当人とレイヴン、そしてイチトシは外を見た。

紅く大きな鳥型の、魔物のような何かがある。それは馬車。帝国の要

人、姫を入れた揺り籠。助けるか否か、聞こうと思ひ視線を向けた先で奇怪な物を見た。酷く苦しうに表情を歪める、レイヴン。

「レイヴンさん」

声をかけてハツとした彼は怖いわね、とおどけてみせる。

だが、先程の表情がイチトシの脳裏に焼き付いている。

「あの鳥が君にそんな表情をさせるのかい？」

その翡翠が、あの子に重なって。

イチトシは誰が止める間もなく、身軽な体を窓から翻して落とす。向かうのはダングレストの橋の上、エステリーゼが台頭する鳥の眼前。

双刀を手に踊り出れば、鳥は驚いたように翼をはためかせる。

『何故、キサマがココにいる!!』

酷く狼狽した恨みのこもった声。だが、そんなことを言われる筋合いはない。人の言葉を話す『化物』に会うのは初めてではないのだから、イチトシは狼狽える必要がない。襲い来る炎を風の魔術で退ける。

殺す対象にイチトシも入ったのだろうか。

「君『たち』が何故私を知っているのかは気にしないことにした。でも、私にとって大事な人、恩人を苦しめるならそれは『敵』だろうか？ 今、君がそうして私たちを認識して

いるようにね」

氷の吹雪を浴びせかけてやるも、全く意に介さず羽ばたきひとつで消し飛ばされる。これは酷い。

思わずイチトシは苦笑いをこぼす。勝てそうにないな。けれどここから出ていつてもらわなければ。

『……世界ノ《敵》には消エテもらう！』

直後、砲台の音が響く。

紅い鳥の背後で炸裂する兵装魔導器の砲弾。見ればダングレストの町並みに隠れていたのか大きすぎる兵器が鳥へ向かって砲弾の雨を浴びせかけている。

紅い鳥は迷うように何度か橋を振り返りながらも、どこか空の彼方へと消えていった。

これが、砂漠を目指す理由。

知っていた。彼の名を。知っていた。彼の住処を。

「私はフェローに会わなければいけない。きつとね。本当は……砂漠の奥のテムザに行く予定だったただけなんだ。だけど、居るなら会っておきたい。二度とダングレストに来ないよう言いたいだけなんだけどね」

へらりと笑う彼女を止めるほどの言葉をベリウスは持っていない。『もともと』彼女は自由に行動する。いつだって。

「ベリウス、私は分からないなりに君たち始祖の隸長について調べたつもり。……だから、ぼんやりとした知識のまま聞くよ」

十年前、テムザを襲ったのは始祖の隸長だね？

ベリウスの沈黙が答えだった。

だったらやはり自分はフェローに会いたい。盟主と名乗る彼に会わなければならぬ。個人的にも聞きたいことが有るのだから。邪魔はしないね？

ベリウスはやはり沈黙。

「妾を恨もうとは思わぬのか」

「ベリウスを？ ……そうだね、だって『本人』じゃないでしょ」

だったら興味ないなあ。やはり笑う彼女は、恐ろしい。

今の彼女の笑みは、楽しさは面白さ、期待への笑みではない。

ただ自分の憎悪への対象へ向けての敵意と狂気。永く生きるベリウスでさえも信が冷えるような感覚を味合わざるをえないほどの憎しみ。

たった一人の人間のために人はこれだけの感情を持てるのか。

「もし、彼を戦に送った元凶がまだ生きているなら。嬉しいね。嘘偽りもなく、嬉しい

「よ」

聞くこと聞き出して、この手で。

知らず強く手を握りしめているとその手をペリウスが包むこむ。

「憎しみはそなたに似合わぬよ」

イチトシはどうしても、ペリウスに笑い返すことができなかつた。

(2017/01/15 22:45:00)

第27話

こんなに激昂している彼を見るのは初めてかもしれない。

目の前で魔術により巨大化させた大剣を振りかぶるジイを見ていた。普段、ジイはレイピアを使った補助と魔術に寄った戦い方をする。こんな、一撃必殺のような戦い方をする彼は見たことがない。

空に浮かぶエイのようなキモチワルイ魔物の核であろう球体を一刀の元に斬り伏せたジイはようやくイチトシを振り返り、失礼しましたと腰を折った。

「珍しいね、君が怒るなんて。今の魔物に想うところでも？」

「……貴方の知らない私の過去です。どうか気になさらないでください」

「うん、分かった。今までと変わらないのであれば問題ないよ。この羽根があるということ、今のはフェローの」

言葉は途中で遮られる。

先程のキモチワルイ魔物の声が近くで発生していた。

砂漠の真ん中で体力を消費させ、倒れさせるつもりか。挟み撃ちの状態で迎え撃たな

ければならない状況にもかかわらずイチトシは水筒の中の水を口に含んだ。

正直二体程度であれば問題はないが、もしもこれがフェローの羽一枚から作られたものだとしたら相手にしているにはキリがない。

「フェローは諦めてテムザの先に行くよ」

短い肯定の返事を受けて彼女は砂漠の移動用に買った魔物の背中に跨る。馬のようなそれは砂の上を長時間走ることでできる魔物。

ジイが炸裂させた水の魔法を合図に腹を蹴ればイチトシを背中に乗せた魔物は走り出し、後ろにジイが続く。エイのような姿をした闇色の魔物は移動速度がそれほど高くはなく、イチトシたちはオアシスまでの道を一気に駆け抜けた。

「フェローはよろしかったのですか？」

オアシスで移動用の魔物たちに休息を取らせていると水筒に水を詰めているジイがイチトシへ問う。武器の手入れをしていたイチトシはうん、とわざとらしく考えるふりをする。

「フェローはなんとなく答えを持っていない気がする。どちらかと言うとベリウスだね。私に隠し事をしてる。私に隠すことだけじゃなくて、何か、あの子に関すること。フェローはただ……私たちを敵視して殺そうとしているだけな気がする」

本当のところは分からないからただの勘だけだね。

鋭い人だ。ジイは魔物たちに食べ物を与えてやりながら先程のイチトシの言葉を考
える。

自分が我を忘れ、あの魔物に戦いを挑んだのはもちろん失態だった。だが、それ以上
に常に冷静な彼女はより多くのものを理解しすぎる。それはイチトシが知らなくても
良いこと。フェローのことも、ベリウスの隠し事も。

『ただの人』である彼女が知るには重すぎる。

そろそろ行くよ。イチトシの声にジイは魔物たちを優しく起こす。

向かうのはテムザ。かつて人魔戦争が行われたその現場。

そういえば現場を知らないね。その思いつきのように言われた言葉で向かっている。

ギルドの管理はカイという青年に任せているため問題はないだろう。

思い付きの言葉、か。

自分の考えにジイは苦笑する。そんなモノではないと分かっているのに。

十年。彼女がその現場に足を運ぶために気持ちに整理をつけるためにかけた年数だ。
決して思い付きなどではない。ずっと、テムザの地図は彼女の部屋においてあった。

その麓に立って足を止めるほどに、つらいと言うのに。

「イチトシ様、お手を引きましょうか」

話しかけられ、彼女は顔を上げてまっすぐにテムザ山を見やった。それは、かつて十年前の戦で戦場となった場所。多くの騎士や人が倒れ、死んでいった。

一步を踏み出せば彼女を拒むように向かい風が吹き付ける。

だが意思を決した彼女は足を止めない。大きなクレーターがいくつも存在する山道にはもう何も残っていない。クレーター以外の違和感はもう何も無い。

十年経てばそうもなる。大半の手がかりがなくなっているのは。

もつと早く来れば。何か。あつたのか。

山を中腹まで登った所で思わず足が止まる。鼓動と連動するように頭が痛みを訴える。耳元で鼓動がなっているかのように煩い。心臓が壊れるのではないかと言うほどに、早く動く。

大丈夫ですか。ジイの声にも応えられない。

この場所に彼らが来たから、この場所に現れたから、何もかも苛立たしい。自分から彼を『奪った』奴らがすべて。理不尽じゃないか。『今』を生きたいと願う彼らの、彼女たちの命を奪い何になるというのか。

一步を踏み出した彼女の足に、硬い何か当たる。

しゃがみ、手に取ったそれは傷ついては居るが銀色の箱。

箱の開け口であろう場所を押すときこちないながらも箱が開く。汚れた鏡に、荒れた

化粧品。

「コンパクト……?」

かつてこの場所に住んでいた誰かのモノか。それとも、この場所で戦った――

「キャナリちゃん……?」

かつて彼と一緒に過ごしていた、綺麗な女性だ。彼と同じようにこの場所に来て、戦った。

コンパクトを大事にカバンへしまい込み、振り返るとジイが近くの魔物を相手にしていた。探索をするイチトシに邪魔が入らないように、だろう。

最後の一体を魔術を発動して消し飛ばすとジイが笑った。

ジイは、ずっと一緒にいる。『気付いた時』からずっと。ルディアースの家に住んでいるわけではないらしいが、ずっと、ずっと、ずっと。

もう、潮時なのだろうか。

この場所で聞くべきなのだろうか。

彼に関する、自分に関する、全てを。

全てを喪った、この場所で。

「ジイ」

声をかけると彼は笑って返した。

「君の、名前はなんて言うんだい」

その言葉にジイは無表情になり、手に持ったレイピアを下ろした。

その頃レイヴンたちはカドスの喉笛を越えようとしていた。闘技場都市ノードポリカからコゴール砂漠へ超えるこの洞窟が目的ではなく、闘技場都市でヨームゲンへ届けるはずの澄明の刻晶を奪った犯人を追ってきていた。

遺構の門首領、ラーギイ。

魔術を暴発させるような力を持つ何か、澄明の刻晶を求めるのに良い予感はない。足下が水に満ちた道を越え、ようとしたレイヴンたち。

彼は不意に片手を左胸にやった。

何か、違和感が。

ふわ、と空気が立ち上るようにパーティの髪の毛が揺れる。

「な、なにこれ!」

パーティの中でも最年少の少年カロルが慌てる。高濃度のエアル。紅い光となったそれはラーギイとレイヴンたちの間に立ちふさがるように満ち満ちてしまう。

「突破は……無理そうだな」

当たり前、と天才魔導師の声がある。高濃度のエアルは人体に影響を与える。

ナルホド。

レイヴンは左胸を庇うように手を置き、紅いエアルの向こう側へ視線をやる。見ればラーギイも胸のあたりを押さえている。

「(何でアイツまで……っ)」

突然、地面が揺れ竜が吹き抜けになつている部分から降りてくる。これがこの洞窟の強い魔物？ ユーリの問いにカロルは違うと応えた。

竜は咆哮と共に頭を高く掲げる。

その口へ、紅い高濃度のエアルが吸い込まれ消えていく。

「嘘、エアルを、食べた!？」

天才魔導師リタの言葉が聞こえたのか、竜は落ち着いたエアルの中で視線を落とし、た。

見られてる？

その威圧感にユーリたちは体を固めた。これはマズイ状況だというユーリとは違い、レイヴンは体が動かないということもなくジツと竜を見ていた。

その竜が見ているのは明らかに——自分で。

『……無知とは愚かな』

語りかけられているのも、自分。

だが、その意味はわからない。

『あの方のことを何一つ知りはないアナタが、あの人を想うことも、あの方に想われることも。自らを認めることすら出来ないような者が世界と戦うなど——出来はしない』
最後に別の者に視線をやった竜だったが、やはりレイヴンを見やっただ竜は入ってきた吹き抜けの場所から飛んでいった。一体何だったんだ。

ユーリたちが話し合っている中で、レイヴンは竜が消えた場所を見続けていた。

——あの方に想われることも

——自らを認めることすら出来ない

何なんだ。

まるで人のことを知ったように。

ムカつく。苛立つ。——恐ろしい。

そして、もう一つ。もし『あの方』という言葉が彼女を指しているのなら、何故あんな『化物』が彼女のことを知っている。何故尊敬するような言葉を使う。

分からないことが多すぎる。

——無知とは愚かな。

ユーリたちから離れた所で、舌打ちを漏らした。

(2017/01/22 00:05:48)

第28話

コゴール砂漠を『一人』で戻った彼女はカドスの喉笛も越え、ベリウスに寄り添い座っていた。人恋しいとはこういうことなのだろうか。彼でなくても良い、誰か、味方であるものが欲しかった。

ふわ、と柔らかく大きな尾が彼女を隠すように包む。

老婆の姿をしていない彼女は、ベリウスは大きな狐のような姿でイチトシの傍に居た。

ついに一人だ。

そう言つて帰つてきた彼女は他に何も言わず、本来の姿である自分に背中を預けて座っている。語りかけても反応は無い。元々一人だつたらうと言いかけて、止めた。

この子には寄り添う者が居ることを知っている。

彼を、拒絶したのか。

尾で彼女を隠し、新たな来客を迎える。

ベリウスに尾で隠された中から彼らとベリウスの会話を聞いていた。ドン・ホワイト
ホースからの手紙を持ってきたレイヴンと、始祖の隸長から話を聞きたいというエステ
リーゼたち。

彼女を始祖の隸長と知りながら、人と同じ姿だと思っていたのか。いや、それは仕方
ないのだろう。

自分も調べるまではそう思っていた。

満月の子、とベリウスがエステリーゼに語りかける。皇帝家の、血筋。ベリウスの尾
を掴むと彼女の視線が一瞬、イチトシの元に落ちる。

エステリーゼが満月の子について聞こうとした瞬間、部屋の外で剣撃の音が響く。

何事、と周りがどよめく中で扉が強く開く。

「ついに見つけたぞ、始祖の隸長！ 魔物を率いる悪の根源め!!」

テイソン、クリント。

イチトシは尾で隠された中から乱暴にやってきた来訪者を見やった。それは魔狩り
の剣と呼ばれる魔物討伐専用のギルド。

始祖の隸長の存在を知ればこうなるかもしれないとは思ったが、どこで確信を得て
やってきたんだ。確信を得なければ戦士の殿堂という大型ギルドに殴り込みなど出来
ないはずだ。

がん、と音が響き、イチトシの頭上でクリントの大剣が振り下ろされる。ずっと、ここにはいられない。

クリントの腕を落とそうとイチトシは双剣を振り上げる。

だが、寸前でイチトシの存在に気付いたクリントは足を引く。

「イチトシちゃん!？」

驚き声をかけるレイヴンを見ることもせず、ベリウスの隣に並ぶ。

『こやつらはわらわたちが相手をせねばならぬようじゃ』

「ナッツさんの加勢を君たちに頼みたいなあ、ローウェルくん」

魔物の肩を持つものは皆敵だ、と叫ぶテイソンが軽さを重視した武器を振るい、ユ

リたちに襲いかかろうとするが間にイチトシが入り、双剣で攻撃を受け止める。

「テイソンとクリントの相手は君たちには出来ないでしょう? さあ、早く下に」

「イチトシちゃんはこのこと——」

「おいおっさん、行くぞ!」

疑問には答えをくれてやれない。

引つ張られていったレイヴン。テイソンの剣を弾いて再びベリウスの隣に並ぶ。

「久しいな」

「……、クリント。君は馬鹿ではない。始祖の隸長がどういうものか、全く想像がついて

いないわけじゃないはずだ。おそらく、私よりもね」

「それが何だ。魔物に変わりは在るまい」

クリントの大剣はイチトシの力では受けきれない。代わりにベリウスが受け止め振り払う。

「ベリウス、大丈夫？」

『問題ない。そなたも下に行くか？』

わざとらしい言葉に笑う。そんなことはしないよ。味方で居てくれる君の味方で居たいから。

双剣を構え直し、テイソンへ向かう。速さを重視した戦い方同士ならば戦えるだろう。

襲い来る刀は出来る限り片手で受け流し、片手で攻撃を構える。時折クリントからの邪魔も入るがそれはどちらも同じこと。テイソンの攻撃をいなしながらクリントを邪魔するように魔術を放つ。

互いに疲労の色が見え始めた時、ベリウスがイチトシへ目配せする。うなずきテイソンからも距離を取る。

『そなたらの相手はわらわじゃ！』

大きく腕を振ったベリウスが上手くクリントとテイソンを窓際へ誘導する。クリン

トの一撃を受けて後退するように距離を取ればイチトシの準備は整っている。

「吹きとばせ光の刃、デイバインセイバー！」

彼女の片手から放たれた光の柱がクリントと、テイソンをも巻き込み窓から吹き飛ばす。

『……死んでおらぬか？』

「ううん、加減したしクリントたちは体の丈夫さが売りだから」

『人は柔いものという認識を改めねばな、わらわでもアレは厳しい……』

「はは、大げさ。——降りようか、なんだか、妙な感じだよ。何でハリーがここに」

『ドン・ホワイトホースの孫が来ておるのか？ ……挨拶をせねばな』

イチトシの言葉も聞かず、ベリウスは割れた窓から飛び出した。後を追って飛び出せば闘技場で魔狩りの剣と戦うユーリたち。

降り立ったイチトシたちを見て、驚いたのは誰よりもハリーだった。ドン・ホワイトホースの孫。初めてダングレストを訪れたイチトシを案内した青年。

どうして。と不思議そうな顔をするがそれよりもイチトシの怪訝な顔が目に入り、口を閉じた。

「イチトシ、何でその魔物と」

「彼女はベリウス。戦士の殿堂の首領だよ。君が敬意こそ払えど、こんなことをする相

手じゃない。君こそ、なんでここにいるんだい？」

「っ。俺は、俺は海凶の爪に『ベリウスが魔物に捕らえられている』と聞いて救出に来ただけだ！」

海凶の爪。それは。

イエガーという首領が率いている暗殺ギルドのこと？

問おうとしたイチトシの言葉が、酷い悲鳴にかき消される。

振り返れば体から光を放つベリウスが何かから逃れるように体を捻り、叫びを上げている。何があった？　と思うイチトシに一瞬だけ、ベリウスの視線が寄せられる。

『わらわを、殺せエ!!』

放たれた風の刃から逃れるためにハリーを押しつける。

尻もちをついたハリーを気遣ってやるほどの余裕がない。

自我を持ちながら暴走するベリウス。ナッツは呆然と遠くからそれを見つめていた。呆けるナッツを狙う魔狩りの剣が居た。慌ててナッツを狙うギルド構成員を切り伏せる。死なない程度に。

ユーリたちが、ベリウスと戦っている。

「ベリウス様……」

「ナッツさん。……魔物と成り下がった彼女を殺さなければ」

「イチトシ様、あの方は、もう、本当に、元には」

「私には、私たちにはきつとベリウスの言うとおりのことしか出来ない」

ベリウスの作り出した幻影にユーリたちは苦戦している。彼らだけではベリウスの言うとおりに出来ないかもしれない。言うとおりに出来るのは、きつとある程度力のある、ナッツのような。

立ってますか。

そう声をかけられたナッツは既に意思を固めていた。

首領に手を挙げるなど本来は有りえない。

だがそれはユニオンに属する彼女としても同じ。戦士の殿堂のボスを殺そうと双剣を構えた彼女は姿勢を低くして幻影へと斬り込んだ。

イチトシちゃん。レイヴンが心配そうに彼女の名を呼ぶが、彼女はベリウスの一撃を避け、ベリウスの幻影に深く刃を突き立てる。だが、手応えがない。

何かカラクリが？

幻影と距離を取ったイチトシを背後からナッツが呼んだ。

見れば怪しげな蒼い炎を灯す燭台が立っている。

ナッツがひとつを壊してみせると、幻影の姿が揺らぐ。なるほど。

「レイヴンさん、私たちが幻影を消します」

言えればレイヴンも言われている意図に気づいたのか、ひとつ頷きイチトシたちの援護に移る。

ひとつ、またひとつと燭台を壊し、全ての燭台を壊しきった時、ベリウスの幻影が消えた。

「今じゃ、トドメを——ッ！」

彼女の望みを、誰もが顔をしかめて聞いた。

「こんなのを、相手にしろっての？」

レイヴンの愚痴のような何かが聞こえた。

「……（海凶の爪がこんなことを仕組んだ？ でも彼自身が望んだとは思えない。だもしたら周りに）」

見渡すが、思ったような鎧の人間が居ない。外で待ち構えているのか。

「よそ見をしている場合か！」

少女の声に剣を振った。投げられた巨大なチャクラムが少女のもとに還る。

「ナンちゃん、君たちはハリーに言われてきたのかい？」

「だったら何だ」

「——全ての元は海凶の爪、じゃあ彼らは誰の命令で」

ドツ、と鈍い音。

見ればベリウスが倒れ込んでゐる。『無意識に』その近くへと駆け寄つた。
「こんな結果になるなんて」

ジュデイスの言葉にどこか違和感を感じながら、ベリウスの顔先に足を止める。

『イチトシ、そなたに、普通の幸せがあらんことを……』

「ベリウス。……君の魂に冥福があらんことを」

『ありがとう……。エステルゼと言つたな、満月の子よ』

「わ、私のせいで、アナタが」

『そなたは、救おうとしてくれたのじゃろう？ 他者を慈しむ、優しき心を大切にするのじゃ……』

再びベリウスの体が光りだし、その体は透けていく。

「ま、待つてください！ 駄目！ 行かないで!!」

エステルゼの悲痛な叫びも虚しく、ベリウスの体は完全に消え、その場には透明な結晶が残る。

——わらわの魂、蒼穹の水玉を我が友、ドン・ホワイトホースに。

決勝から響くベリウスの声。エステルはその結晶を両手で抱き締めた。

聖核だ。

カロルの悲痛な言葉。

「その石を、渡せ」

弱りきった声は倒れたはずのクリントから。ほら、頑丈なんだから大丈夫でしょう？
死んでいなかったよ。

ベリウスに語りかけるように心のなかで話し、一步を踏み出した。

「それはベリウスの魂。持つべき人が持つものだ。そして聞こえたらう、彼女はドン
の元に渡されることを望んだ。君の手で運ばれることは望んでいないと思うよ？」

双剣を構えるとクリントが足を少しだけ引いた。

先程のダメージが体に残っているから足を引いたわけではない。魔物を滅するため
なら死をも恐れるつもりはない。けれど、彼女は。

それ以上に恐怖の。

「そこまでだ、全員武器を捨てろ！」

入り込んだ鎧の姿。

予想通りの姿に、イチトシは双剣をしましう。投降するつもりなど無い。未だ呆ける彼
を護るのも、今のイチトシがやるべきこと。

騎士団に気を取られ、暴れだした魔物たちの対応に追われるユーリたちの元から離れ
るとハリーの前で男と合流する。

「レイヴンさん」

「……とりあえず俺たちが乗ってきた船まで行きましょ。全部、それから」
「そうだね、全部」

混乱に乗じてハリーを連れ出した彼らはユーリたちとこの街にやってきた船まで歩いていった。

一言も、話すことなく。

(2017/01/22 17:57:15)

第29話

ユーリたちも乗り込み、船が動き出してからイチトシはハリーとレイヴンの近くに居た。ハリーは事態を飲み込み、理解をしている最中で。

レイヴンは気付いているはずだった。

いつものような、調子で。

イチトシは船のヘリに座るレイヴンの隣、すぐ近くに腰を下ろした。

「……ハリーの方じゃなくていいの？」

「二番つらく感じているのはレイヴンさんでしょ。ハリーは……ドンの孫だもの」

覚悟は出来るよ。復活に時間がかかったとしても。

ドンと一緒に居て、ずっと彼と一緒に居たのはハリー。

レイヴンは、ドンの手となり、そして。

「ドンは君にとつて親みたいなものだろう？ 付き合いが短く、そして深く関わったの

は君だ。レイヴン」

差し伸べた手を彼は無造作に強く掴んだ。

「じいさんも、アンタも、わけわかんないわ。おっさんがもともとじいさんの所に何で来たか知ってるわけよね？」

「うん、そうだね。知ってる」

「じゃあ何で」

「ドンが気に入つて、私も気に入つたから」

それ以外に理由なんて無いよ。気に入つたから傍に置きたいだけだ。

ギリギリ、と、イチトシの掴まれた手が痛みを訴えるがイチトシはいつもの柔らかかな笑みを浮かべたまま。

「俺が何をしても？」

「……ふふ、ドンにあの会い方をして他にもっと酷いことを？」

手を離される。

船の縁に置かれた彼の手に自分の手を重ね、イチトシは何も言わず空を見上げた。

「あつたかいわ」

「私も、あたたかいよ」

不意に爆音が響き、何かが船の横を飛んだ。

それは、レイヴンにとっては何度か見た、イチトシにとっては初めて見る、小柄な始祖の隸長。

背中に青い髪のクリティア族を乗せて、小さな竜は空を泳ぐように飛んでいった。だが、二人はそれを眺めながらも動くことはなかった。目の前で起きることよりもこれらのことが億劫だから。

「この後、居るの？」

「うん、ベリウスも、ドンも、私にとつて恩人だから。もう、私に味方は居ないから……。味方だった人たちにはお礼を言わなきゃ」

「そう。……その後は？」

「あまり、考えていないよ。ギルドとしての仕事に専念しようか。ああ、だけでもう拠点の管理を任せられるのもカイ君だけか」

ジイヤカレンは？

レイヴンは言葉を飲み込んだ。笑って話しているが、ギルドの話をした時、重ねられた手が少しだけ揺れ動いた。それは間違いなく彼女の心の揺れ。

そっかあ。

適当にそうして返してから同じように空を見上げる。

流れ星がひとつ、落ちた。

ダングレストへ状況報告に戻ったユーリたちだったが、そこでドン・ホワイトホース

に会うことは出来ずドン・ホワイトホースの足取りを追う形で海凶の爪本拠地へと向かった。

イチトシはユーリたちの背中を見送り、今にも戦争を始めようとする喧騒の中にカオルという少年とともに足を踏み入れる。

「ね、ねえイチトシさん、大丈夫だよね、みんな、本当に戦争なんて……」

心配そうなカオルがイチトシの服の裾を掴む。

安心させる言葉を返してやることが出来ない。

荒くれ者の揃うこの街で、そんなことは保証できない。

ドン・ホワイトホース率いる天を射る矢は決してドンの起こした不祥事と認めはしないだろう。そして戦士の殿堂はドンの孫、ハリーが魔狩りの剣を率いてベリウスを殺しに来たと言うだろう。

ドン・ホワイトホースが違うと言っても、ナッツが違うと言っても下は納得しない。

下は、ギルド構成員たちは。

「カオルくん、君は——つらい現実を認める勇気が必要だね」

橋の元を集まった武装をした屈強な男たち。

街の出口であるこの場所で戦争の賛成派と、反対派が言い争っていた。いつ手が出てもおかしくない。いつ背中中の武器を抜いてもおかしくない。

カロルは怯え、今にも足を止めそうだが敢えてイチトシはその手を引いて彼らの前、橋の上に出た。

言い争う彼らの誰かが夜駆け鼠の、とイチトシを指差した。

「私を知っている人が居て助かったよ。さて、戦争に行こうとするのは良いが君たち、ドンの許可は取っているのかい？」

彼女の言葉にすら激昂する。

襲い来る戦士の殿堂を待つだけなど、と。

「戦士の殿堂は布告もなしに動くようなギルドではない。分かっているはずだよ。分かっていると言わないならば私が保証しよう。そして、それでもわからないと言わなければ、」

武器に手を置いた彼女を見て何人かが片足を引いた。

「私『たち』がお相手しよう」

その実力は騎士団団長に並ぶほど。

「他の街の出口も固めさせてもらっているよ」

夜駆け鼠の構成員たちは皆、剣の腕においても優秀である。

そのボスは今、柔和な笑顔を浮かべながら双剣の柄に手をかけている。そして喧騒の中心地から何人かが、彼女を庇うように歩み出る。

夜駆け鼠の構成員。

「ボス、遅いっすよー。もう俺らも混ざって戦争行こうかと思っただくらいで」

ケラケラ、誰かが笑う。

「悪いね、事件の中心地に居たんだ」

「まあ良いっすよ。今回の報酬期待してます。……ところでこのちっさいのは？」

夜駆け鼠の構成員たちが見るのはカロルの姿。未だにイチトシの服を掴み、震えている少年。

「勇気はある、とあるギルドの長になろうとする子だよ。傷つけないように」

「出世頭だ！ よろしくね」

フレンドリーな夜駆け鼠の青年がカロルの手を引いて大きく振る。そんな和やかなシーンじゃないだろうに。

しびれを切らした戦争賛成派が一人、大きな斧を持って走り出した。夜駆け鼠の二人によって押さええられたが、他にもしびれを切らしそうな男たちは多い。

大丈夫なの？

心配そうなカロルの声に、イチトシは笑って返す。

ドン・ホワイトホースが早く帰ってくることを一緒に祈ろうか。

そして夜明けまでに何度か、夜駆け鼠は橋を巡る攻防に巻き込まれていた。眠気など

感じる暇もない。

ドンが戻ったのは戦士の殿堂の伝令が街にやってきたのと同時だった。伝令と言ってもその人は今の戦士の殿堂を治めていると言ってもいいほどの人物。

ナッツさん。

イチトシの言葉に、ナッツは視線すら向けることが出来なかった。

ギルドの掟。

親を取り、戦争をするつもりがないと言うならば同等のものを差し出せ。

大規模ギルドの親をとったのだから、大規模ギルドの親を。

同規模のギルドの首領の首を。

ドン・ホワイトホースは恨み言も何も無く、皆の前でそれを承諾した。

「イチトシ」

喧騒が違う意味の静けさに包まれる。そんな中でドンはイチトシを手元と呼んだ。

「バカ息子たちを止めてくれて助かった」

「恩があるのはこちらだもの。多少なり恩を返せたのなら良かったよ」

「はっ、充分だよ。……これからどうするつもりだ？」

「……元々、一人で探すつもりだったものだから」

「最後にひとつ、頼みてえことがある」

ドンは自分の死ぬ場所を整える部下たちを尻目に、珍しく真剣な声でイチトシに話しかける。

なに？

ようやく襲い来る眠気を感じながら聞くとドンはいつもの顔で笑った。

「なに、簡単なことだ。てめえの探してる男に伝えろ。コッチに来たら覚悟しとけ、とな」

「……、ああ、ありがとう。ありがとう、ドン・ホワイトホース。必ず、伝えるよ」
泣きそうな顔になるイチトシの頭を荒々しく撫でる。

ドン・ホワイトホースはそのまま背を向け、人々の中心、広場へと向かった。腰に短刀を挿して。

広場の中心でドン・ホワイトホースは座り込む。ユニオンのギルド構成員たちに見守られて、その中心に。

イチトシはその中に知った影を見つける。怪しげにローブを深く着ているが、大きな猫背と大きなカバンを見間違えることはない。

声をかけると男は振り返り、イチトシの姿を認めると大きく頭を下げる。

「コッチの立場で会うのは初めてでしたかね」

「そうだね、できればもっと楽しい場所が良かったけど」

「ちがいないえ」

十年前に会ったときよりもずっとしわがれた声の彼はドン・ホワイトホースへ視線を戻す。怪物じみたあの人も死ぬ時つてのは来るんですね。失礼な言葉に周りのギルド構成員たちが殺気立つが男の横にイチトシが立っていることに気付くと静かに視線を戻す。

「そういえば。」

まるで目の前の出来事は無いものかのように男は背中の荷物から二つの包みを取り出すとイチトシへ渡す。

「グラディウスの鉱石を使った細工はもうコリゴリ」

「はは、ありがとう。……最後にいい仕事をあげられたかな」

「ありがとうございやした。部下も育ちやしねえんで魂の鉄槌はオシマイでさあ」

「残念だよ、君たちほどの腕を持つ鍛冶・細工師は居ないのに」

彼らの見ている先でドン・ホワイトホースはレイヴンへ何かを語りかけている。レイヴンは酷い顔をしている、ように見えた。

「あれがあのカラスの本当でしようねえ」

「誰よりも人間らしいじゃないか」

介錯を求めるドン・ホワイトホースの言葉に誰もが視線を逸らす。薄情なもんで。そう言った男の目の前で黒く長い髪を持つ青年が刀を携えてドン・ホワイトホースの元へ歩み出る。

「――、彼は倒れさせる訳にはいかない。彼は象徴だから」
イチトシの言葉に男はそうですか、と足を引いた。

ざん。

重い音が響く。

それまで目を向けていたギルド構成員たちはほぼ全員、目をそむけていた。

(2017/03/12 23:40:38)

第30話

目の前で倒れていく『大きな』姿をレイヴンは見ていることしか出来ない。首を無くした人はそれでも大きく、見ているのも精一杯だったレイヴンは掠れた息が自分から抜けていくのを感じていた。

不意に灰色の影が人の中を縫って現れ、大きな姿を抱きとめる。ばさっ、と音がしたかと思えば赤い液体を流すその場所と、地面に落ちたそれの上に白い布がかかっている。

「イチトシ、ちゃん……？」

「君は倒れちゃ駄目だよ、ドン。眠るならまだしも、ね」

血に濡れながら、イチトシはドン・ホワイトホースの体をしっかりと抱きとめる。服が赤く染まっっていくのも気にせず、彼女はいつもの笑みを浮かべている。

本当に、いつものイチトシなのか。レイヴンにはそれすらわからない。ただし視界は狭まるようにチラつき、頭は締め付けられているように痛い。

時間が、止まったかのよう。

ゆつくりと大きな体を床に横たえたイチトシの元に何人かの男たちが駆け寄る。皆が呼ぶのはドン・ホワイトホースの名前。男たちの中には綺麗な金色の髪を持つ『少年』が居る。

もう大人だと叫んでいた少年は遠く、彼は少年のままにドン・ホワイトホースの体に泣き縋り謝っていた。

ぽつりぽつり。降り始めた雨がイチトシの体についた血を洗い落としていく。

気付けばその場にレイヴンの姿は無く、代わりに建物の影に見知った姿を見つける。

イチトシが近づいても彼は逃げることに無く、立ち尽くしていた。体は傷つきながらもそれ以上につらそうな表情をしているのが見て分かる。

「イエガー」

今回の首謀者とも言える名前を呼んでようやく彼の視線はイチトシと交わる。酷い顔だった。少年よりもつらそうに、けれど決して涙は出さないようにしていた。耐えている様子が本当につらそうだ。

伸ばしかけた手を握る。

「すべて、知っているのです。私が何をしたか」

いつもの口調も忘れ、イエガーは責め立てるような口調でイチトシへ詰め寄る。

「君が？ 知らないよ。そもそも君は誰で、いつ、誰であったのかなんて君にしか分から

ない」

「つ、私は!! ……私は」

「ああ、君に渡さないといけない物があるんだ」

懐から取り出したのはコンパクト。

かつてキャナリという騎士が持っていた数少ない女性らしさの象徴。イエガーは震える手でコンパクトを受け取り、開く。

汚れた鏡には何も映らない。化粧品が収まるべき場所には傷ばかりがある。

けれど確かにコンパクトは今、イエガーの手の中にある。ぱたり。

暖かい雨が落ちた。

「イエガー。仮に君がイエガーでないとしても、この事態を引き起こしたのだとしても、私は君にこそ頼みたいことがある」

ふらつくように揺れる彼の手を掴む。

コンパクトから上げた歪んだ視界に真剣な表情のイチトシが映る。

「君の経験、知識、そして命を少し分けて欲しい」

抵抗されないままに自分より高い位置にある頭を引き寄せる。

大きな子供をあやすように抱き寄せ、背中を撫でてやれば肩に埋めた頭からぐずる音

が聞こえてくる。

全てが重なって、ようやく泣けたのだろう。

自分のやってしまったこと、そして、起きてしまった真実、目を背けていた現実。暖かい両手がイチトシを強く引き寄せる。

自分もこうして泣ける日が来るのだろうか。呆然と前を見ると赤い髪の少女と緑の髪の少女が不安げにイエガーを見ている。

人差し指を口に当ててこのままにしておいてやって欲しい意思を伝えると彼女たちはしばらく迷ったのち、街の中へと姿を消した。

「情けないところを見せてしまいました」

「かまわないよ。答えを、聞こうか。今のその場所を捨てて、私のもとに来る気はあるか
ん？」

「もちろん。……ただし、人質が居るのです。ご協力いただけませんか、イチトシ様
くす、と口元を隠して笑いイチトシは頷く。元よりそのつもりだった。それに。

イチトシの言葉を遮り近くに青年が歩み寄る。カイ、と名乗るイチトシの部下だった。

「お話中失礼、頼まれてた件。終わったんで」

「ありがとう。さあこれで君の杞憂は無くなった。君の命、少し貸してもらおうよ」

館へ戻ったルディアースはまず妻の無事を確認した。館の主が誘拐されたままだと慌てている以外に館に変化はなかった。強いて言うなら傷付いた執事が治療中である程度。

そしてルディアース当主は早々に行動を起こした。

館の使用人たちに相応の報酬と次の就職先を提案し、全員解雇とする。状況を飲み込まないままに、だが皆満足できる程に報酬をもらい、次の就職先へと足を運んだ。

「何かあったのですか？」

妻の言葉に、なんとか笑みを返す。

「反撃に出る。夜駆け鼠に連絡を取ろう。しばらく公には動けないが……」

「報告が。アナタが居ない間にユニオンの頭首、ドン・ホワイトホースが亡くなりました」

「ギルド側も手薄になるな。逆にユニオンへ入り込みやすいか」

「そのお年で何をするつもりですか？」

妻の容赦ない言葉に思わず苦笑する。

「さあね。ただ、イチトシに『返して』やればとは思う。この年だからこそ、賭けられるものもある」

「それは、そうですね」
だから。

館は一旦捨てる。だが、いずれ戻するために形だけは残そう。

貴族らしからぬ財産を捨てる発言にも妻は柔和に笑い返す。貴方が決めたことなのであれば従います。従順な良妻とも見える姿に笑い返す。お互いに頑固なのは変わらないだろうに。

だが、こういつた時に抵抗せず後ろをついてきてくれるのは嬉しいことだ。

「それでは私が持つ友人のギルドに行きましようか」

ん？

聞き間違いかと、ルディアースは自分の妻を見やる。彼女は優しげに笑ったままだ。嘘を言っているようには見えない。いや、そもそも彼女は嘘をつかない。少なくともルディアースは彼女の嘘を知らない。

片手を差し出し、誘う彼女の手を取った。何時になくたくましく見える。

たくましいな。思わずそう言ったらおよそ女性に言う言葉ではありませんね。と怒られてしまう。

そうして連れられた先のギルドで、ルディアースはまたも言葉を失った。

(2017/11/05 00:34:26)

第31話

色が、無かった。

彼はアレクセイから持たされた道具を利用し、奪ってこいと言われた少女を運んでいった。少女に意識はない。意識があれば、お人好しのこの子は自分すら救おうとしかねない。

もう良い。もう十分。

彼女は傷付きながらも生きている。両親も生きていたのであればあの方々はどうにかするだろう。

自分が居ないところで。

「あれ。君はどつちだ？」

俺に命令を出した人に報告に来たところ、聞きたくない声が聞こえた。ついで、ガン、と金属同士が勢いを持ってぶつかり合う音。

ぶつかり合い、引いた灰色の影が薄く笑っていた。

「レイヴンさんでもシユヴァーンさんでもないね」

襲い来る光の剣を弾いて退け、灰色は笑い続ける。

「たとえ君たちが二人になっても、あまり完敗する気がないなあ」

対しているのは銀色。

シユヴァーンにとつて主であり、従うべき人。

「本当にそう思うかね」

不意に、アレクセイが懐から小さな機械を取り出した。

一瞬、目を細めたイチトシだったが、その機械に思い当たるものが有り勢いよくシユヴァーンをみやつた。彼は『久しく』その機械を見ておらず、それが自分の命を操作するものだと気づかなかつた。

アレクセイが何かのボタンを操作すると同時にシユヴァーンの体が崩れ落ちる。

息が出来ない。

慌てて駆け寄り、何かの魔術陣を展開するイチトシ。シユヴァーンは彼女の背後に、近寄る影が銀色を振り上げたのを見た。

彼の脳裏に、焼き付いた過去の映像が流れる。かつて戦争に参加していたときも、誰かがこうして守ってくれた。長い髪の毛、弓を持った彼女。

思わず、灰色の彼女の手を引いた。

だが、振り下ろされる凶刃は迷わず彼女の背を深く切り裂いた。

倒れ込む彼女を抱えた。手の中で広がる赤錆色に全く思考が追いつかない。

「イチトシ……?」

久しく呼んでいなかった名を口にした。

『その程度』でイチトシは死なん。それも姫同様に連れてこい、聖核を使っても構わん。

——見て、もらわねばな」

不意に、彼の腕をふるえる小さな力が拵んだ。

「だいいじょうぶ」

彼の胸のあたりに魔法陣が浮かび、ソレは彼の体の中に取り込まれていった。

「……制御を奪ったか。まあ良い」

彼を苦しめていた胸の苦しさはなくなったというのに、手の中で気を失っている彼女を見ていると胸が痛む。それらを連れてこいという上司の命令に素直に動く身体と、ひどく痛む心が噛み合わない。

彼の意識が正しく戻ったのは。

かつて、いや、少し前まで共に旅をしていた青年の言葉によってだった。

「アンタ、やつぱり」

どこかぼんやりと刀を構えていた。

彼女を傷つけてしまうような自分なら、正義を重んじる彼に斬られても良い。彼女

は、あの傷では。

「『キャナリ小隊のおにーさん』か？」

かつて呼ばれていた、名前に。

「な、ぜ」

思わず声が漏れ、刀を持つ手が緩んだ。大きすぎる隙だが、あろうことか戦っているであろう青年は刀を収めてしまった。かつての他の仲間達は皆警戒したままだと言うのに、彼だけは警戒を収めてしまう。

自分を殺せるのは、彼くらいだというのに。

「はっ、どおりですつと見たことある感じがしてたわけだ」

「——下町で」

「昔なあ、エセ貴族つてずっと呼んでたおねーさんが居たんだよ。けどな、いつだったか幸せそうに笑い始めた。知ってんだろ。アンタがそうしたんだろ？」

「なんの話か」

「その頃の名前を呼ばれてえのか、おっさん。イチトシはどうしたんだ？ アンタのそばを離れるとは思えねえが」

「なぜ、確信できる。俺が、その騎士だと」

「ははは、エセ貴族があんな顔すんの。その騎士の前だけだつて言つたらろ」

惚れた女の表情ぐらい読めるっての。

カバリと笑いながらユーリは片手を振った。それで？ おっさんはなんでこんなところ『一人』で何をしているんだ？

剣を掴む手に力がこもる。好きでこうしているわけでは。

好きでは？ ない？

「アンタのことだ、なんかウダウダ考えてそうだけだな。イチトシさんはずっと一途だったぞ」

うるさい。

「左手にしている指輪を見せようとも外そうともしねえ。妬けるくらいには——」

「うるさいっ！ 何を知ってる。俺だって、俺は、」

「なんだってんだよ」

一言が、ひどく冷静だった。

「アンタがなんだってんだ。死んだフリなんてしやがって。ちよつとだけイケるかと思わせやがって」

ん？

仲間たちが一人、一人とまた首を傾げる。なんだか話の方向性が変わったぞ？

「ちつともイケねえじゃねえか！ 死んだなら死んだできつちりイチトシさんの中から

消えろってんだよ!!」

そして青年は再び剣を抜いた。私欲に走っている。

仲間たちは敵への不信感や、連れさらわれた仲間のことより常に一緒に居たはずの冷静な青年が何故か取り乱して、先程までと違う理由で剣を抜いていることが問題だ。

が、と剣が打ち合わされる。

シユヴァーン、否、レイヴンは慌てて打ち払う。

ひどく慌てていた。眼の前の青年がひどく攻撃的ではないのが衝撃的で敵対していることも忘れていた。

剣のあるべきトリガーに手をかけ、トリガーが無いことに気づいて一瞬隙が生まれた。

青年、ユーリはその隙に距離を詰めて剣を振った。致命傷にはならない程度の斬撃だったが、剣は金属音を立てて弾かれた。

「おっさん、それ」

魔導少女ももはや騎士として相対していない。

「知るかあ!!」

青年はもはや狂戦士である。

「ちよ、話を——」

もはや話し方ですら騎士を忘れた。

不意に、ユーリの背後で爆発音が響き入り口の通路わきが崩れた。遺跡全体が崩れるような揺れにようやくユーリも正気を取り戻し、何度か肩で息をした後、大きく舌打ちをした上で何が起こってる、と仲間たちへ向かった。

「大将ね……、もう俺もどうでもいいってこと」

「同感だわ」

「青年、もうちつと雰囲気読んでくれるかな」

「おじさま、アナタも人魔戦争の」

ジュデイスの言葉に彼はそうそう、と軽く答えて座り込んだ。ああ疲れた。

「おっさん、座ってる場合かよ。イチトシさんを寄越す気がねえならせめて隙も無いくらいにくつついてろよ……!!」

あはは、そんな理由？

彼は胸元に触れた。未練がましく、彼女のかけらはずっとここにある。すがりつきながら逃げつつけて。

隙。思えば。考えたこともなかった。彼女がもし、別の男とくつついたら？ 仲良くしていたら？

例えば、アレクセイ騎士団長と、腕を組んだり抱きついていたり。

考えるだけで虫酸が走る。弓を手に、崩れかけた入り口を撃ち抜いた。
「あんなのに」

好き勝手されてるだけで腹が立つ。

更に起こる爆発の影響で遺跡の天井が崩れてくる。『彼』は上を向き、自嘲気味に笑った。

(2019/02/17 22:18:27)

第32話

『おはよう』

聞いたことのない声で目が覚めた。

傷を負ったはずの背中に痛みはなく、今までの記憶もかなりぼんやりとしている。イチトシはぼんやりと浮いたような意識の中でコレが「夢」であることに気づいた。傷を負ったことは覚えているが、なぜ傷を負ったのか。

背中側に両手をついてゆっくりと上体を起こす。涼風が彼女の頬と、草原の草を揺らす。

さらさらと草同士の擦れ合う音。

イチトシは視線を目の前に向けた。自分が居た。

草原に足をつけ、しっかりと立っている彼女はイチトシに笑いかける。おはよう、と。とても優しい笑顔。自分ではない。イチトシは無表情におはよう、と同じ言葉を返した。

『とても無表情。少し前までは幸せそうだったのに』

彼女の言葉にもイチトシは反応せず、ただここはどこと問いかけた。

『あなたの夢。本来なら目覚めないような傷だから、死後の世界と言っても過言ではないけれどあなたは生きようとして、力を使っても傷を治そうとしている』

意味のわからないことばかり言っている。

意味がわからないのはきつとイチトシがぼんやりとしているからではなく。彼女が話していることを『知らない』からなのだろう。ただ、夢だというのは本当だった。他の話も本当なのだとしたら、自分は本当に深い傷を負った。

不意に、思い出す。剣を打ち合わせていた、銀髪の彼。

ああ、アレクセイに斬られたのか。

背中中の痛みを思い出すように片手を肩に置いた。痛くない。夢なのだから当然か。

『アレクセイのしようとしていることを止めて』

彼女は一步、イチトシに近づいた。

『あの子ほどではないけれど、彼も大事な人でしょう？ 止めなければ、彼は死ぬ』

草原に映る半透明の景色。

なにかの施設の屋上だろうか。白い足場の上でアレクセイが大規模な陣を展開し何かを解析している。知っている景色だ。アレクセイの頭上には見たことないほど大きな魔核が浮いている。アレクセイは魔核の利用方法を解析しているのだろう。

止めなければ。

『あなたが力を使って生き返り、アレクセイがあの封印を解いてしまうとそれは最悪。だから今ここで選んでほしい。私の手を取り……いくらかの記憶と力を持ってあちらへ戻るか。このまま楽になって最悪の事態を避けるか』

そう提案され、イチトシは考えることもなく首を振った。
違う。

「私なら私の目的を知っているはず。私は生き返る。アレクセイを止めるのも構わない。けれど私の目的はあなたの言う最悪の事態をどうにかするためじゃない」

首を傾げた彼女の手を取り、イチトシは立ち上がった。

『あの子を助けるためだ』

彼女は一度驚いたようにイチトシを見やり、そして困ったように。けれど嬉しそうに笑った。変わったね。良い方向に。

やり遂げて。

それはどちらの目的に向けて言ったのかわからない。

イチトシは消えていく草原に、見えていた半透明の景色に目を向けた。

アレクセイと戦う何人かのグループ。黒い髪の青年を筆頭に、年若い少年少女と、女性と――男の人。

ふと、消えていく草原に別の景色が映りだす。空を覆う気持ち悪いタコのようなナニカ。タコのようなナニカは世界を覆い尽くそうと空に足を伸ばしていく。空を覆い尽くすかと思われたとき、それはとてつもなく大きな魔核から放たれる光で遠ざけられた。

薄い光の壁の向こうに、ナニカは佇み続ける。

『彼女』はそれをぼんやりと見上げていた。

第33話

知っている。

ゆつくりと立ち上がったイチトシを一人、視界に収めて目を見開き驚いた。だが、イチトシはそちらに視線を向けるよりも早く床を蹴った。よく見知った銀髪に迫る黒を弾くと黒から驚かれる。

空を見上げれば限界を訴えるようにパチパチと音を鳴らし力の漏れ出す大きすぎる魔核。

「イチトシ……、私は」

背後から聞こえる酷く弱々しい声に彼女は振り向き、わらった。

それはかつて彼にししか見せなかつた柔らかく、幼い笑顔。弱々しく俯きかけていた男は一瞬息を止め、前を見た。

「アンタ、何のつもりだ？」

黒の青年から声をかけられ正面に向き直ったイチトシはいつもの無表情。

「ユーリくん。気持ちはわからないではない、けどこの人の知識はこれから有用だね。

ワガママかな？ 向こう見ずかな？ でもこうなった以上、頼れるものは全て使わないと」

見上げた空は開き、限界を迎えた魔核はゆっくりと降下を始める。

「この人を追い詰めるほど世界を想う君たちとは、また会えるだろう」

急速に落下を始めた魔核から逃れるように黒に背中を向け、アレクセイの手を引いた。力が入っていない男の体はいともたやすく引つ張られイチトシの後を追う。

立ち上る煙の中でようやく背後を振り返った彼女の目の前で橙の瞳から一筋の光が落ちた。

頬を撫で、大丈夫、と声をかけるも彼は視線を上げず下を向く。

「アレクセイ。君は知らなかったから間違えただけじゃないか。間違いは正せばいい。まだ間に合う」

「もう間に合わないだろう!! 星喰みは姿を現し、過去の滅亡を今の世界にもたらず。私が引き金を引いた!」

優しい手を振り払い、剣を向ける勢いで強く視線を向けた。だが彼は途端その勢いを消した。

無表情で居ることが多い彼女は笑っていた。

泣きそうに。諦めたように。

「今で良かったよ。君がいて、彼らが居る。どうにかなるじゃないか」

「君は、なにを」

「さあまず、君の物を回収してから傷と心を癒そう」

お互いにね。

背を向けた彼女の背中の服は袈裟懸けに斬られたまま。

その背にあるはずの傷は見当たらない。

小さな背中に声をかけようと開いた口に、空から落ちる風が詰め込まれた。魔核が落

ちた今、何が。

頭を過ぎる赤い始祖の隸長。

目の前に姿を現したのは白と蒼。

かつてその力を得るためにいくつも刈った、エアルを溜め込み、世界を護る命。

イチトシはその場に一度しやがみ込み、床に何かを置くと白と蒼の始祖の隸長を背に

アレクセイへ片手を伸ばした。

「その命、捨てるつもりなら私に」

小さく白いその手を、アレクセイは掴んだ。

事件の中心に居た人が皆居なくなつた。

仲間たちは黒の青年、ユーリが海に落ちたと騒いでいるのが遠く聞こえる。

男は騒ぎとは逆の位置で、高いその場所の縁で、細い鎖を拾い上げた。持ち上げられて揺れチリ、とわずかに音を返した銀色の光。鎖に繋がる二枚のドツグタグ。彼女もずっと付けてくれていた。その左手にも、きつと。

リヴァヴィウス。かつて彼女から聞いた鉱石の名前。

大事にされていた。ただ置いていかれた。

「追ってくるな、ってわけ」

ようやく心を決め永く差し出されていた手を取ろうとした矢先。彼女が掴んだのは元上司、世界を窮地に陥れた元騎士団長の手。

細い鎖を自分の首にかけて留め金を嵌める。空いた襟元にドツグタグが見えいつもより多くボタンを留める。

「突っ返してやるから」

待つてろ。

見上げた空は、嫌味なほどにただ青い。

第34話

「もう、状況が分からないのだが」

あれから一日。アレクセイは裸で広すぎる湯に浸かっていた。

「納得は諦めてはいかがですか？ 貴方は理解していれば良いのだと思いますよ」

ジイと呼ばれる男と。

「オレは納得したぞー！」

イチトシの父ルディアースの現当主と。

時間を遡り考えることすら億劫で。何度考えても行き着く結論は最初の一言に尽きる。

ここに連れてこられて何度目のため息だろうか。

秘境ユウマンジュ。秘湯ユウマンジュとも呼ばれる。ほぼ空からしか訪れることのできないであろうこの場所はいっから彼女たちの秘密基地になっていたらしく連れてこられて知った顔をいくつも見た。

どれだけ探させても見つからなくなったわけだ。ルディアースを見ればただ穏やか

で。ジイを見れば変わらず静かで。

何もかもが上手くいっていったあの頃を思い出す光景だった。

ルディアースの胸元にはいつかの襲撃の傷痕が残っている。傷痕を見つけて謝ったのはもう昨日のこと。そんなこと忘れた、と笑って済ませられたのも昨日。

誰もが自分のしでかしたことを知っていて、誰もが状況と『彼女』を知る。

「未だ信じられないな」

「オレたちの娘をか？」

「そういうわけではなくですね」

「人ではない味方が居ればそれなりに貴方の知らない知識はあります。人にしては知り過ぎていくくらいです、貴方は」

私はもう上がります。

湯の中で立ち上がった白髪の男、ジイは二人よりも早く脱衣所へ向かう。

「ジイが始祖の隸長だと、ご存知でしたか」

「そういう名前だとは知らなかったな。ただイチトシにずっとついてて、年を経つて
るようには見えなかった。若作りが上手いもんだとは皮肉ってやったことはある」

あはは。

空の見える風呂にルディアースの笑い声が響く。

ザウデ不落宮から逃げる際に乗った白と蒼の始祖の隸長。それはザーフィアスからユウマンジユへ飛ぶときも当たり前のように人に姿を変えた。

「謝られたのは……衝撃でした」

人に姿を変えた始祖の隸長、ジイは一言目にアレクセイへの謝罪を口にした。何も理解していなかったアレクセイが驚いている最中に彼は言葉が続けた。

星喰みのこともザウデのことも全ては始祖の隸長が押し隠していたのが悪い。人を手を取り全ての情報を共有していればこんなことは起こらなかった。盟主に代わり謝罪を。

始祖の隸長よりも人らしく。人では決して口にできない謝罪に未だアレクセイは言葉を返していない。

「中心に居たのはアレクセイだろうけどな、周りにも誰か居たんだろ。アレクセイが思うより、ずっとな」

全員の責任だから押し付けてしまえ。

からりと笑ったルディアースもまた湯を上げる。

広い空間にただ一人。

アレクセイは空を見上げる。

空に空いた穴は埋められない。だからその先の災厄を消し去ろう。

自分が起こした事象に誰一人口を出さない。ルディアース夫妻はイチトシの耳と手となり、ジイは足として、そして自分は知恵となれ。イチトシはアレクセイがある程度落ち着いた昨夜にそう告げた。

知恵となれ。

言葉を繰り返し、手を握る。

知恵となろう。

アレクセイは湯を上ると着替え、いつもと違う髪型に整え彼女の部屋の扉を叩いた。どうぞ。柔らかな声が帰り開いた扉の先には足の置き場もないほどに散乱した書類と本。

「相変わらず、片付けるのは苦手か」

「屋敷ではジイが、ギルドでは皆がやってくれてたからね」

「ふむ。魔導器同士のネットワークだったか？」

「もう。直感的に出来たらいいのに。数式やら回路やらを組み立てるのは苦手なんだ」

「意外だな。必要なら何も言わずやるタイプかと思っていた」

「ふふ、そう見せるのは得意」

「これは君に任せた方が早そうだ。手元の資料も天井に向かって投げ捨てた彼女はあっけらかんと笑う。」

感情表現に乏しいと思つていたのは最早過去。捨てられた紙を拾い上げたアレクセイは手早くそれらをまとめるとまだ物を置ける机に置く。

「問題は核かあ……。やっぱり聖核が欲しいな」

「……それは」

「フェローとかくれたら良いのに」

世界の敵とか言われたからきつとくれないんだ。くるりと椅子ごと振り返りイチトシは頬を膨らませる。

「私を差し上げましょうか。またこんなに散らかして」

燕尾服を着たジイはアレクセイの背後から顔を出すと荒れ放題の床へと手を伸ばす。

「却下。今君を失うと部屋の片付けが出来ない」

「そうですね。私もこの部屋を見て気が変わりました」

「……今のは冗談か？」

イチトシは首を振り、ジイは言葉で否定する。必要ならば構わない。

「正確に言うのであれば私の役目はイチトシ様の死を見届けるか確信すること。その後であれば構いません」

「死神のようだな……」

「死神。そう例えられたことはありませんね。もたらしたりはしません」

「見届けてくれるなら嬉しいね。その時はアレクセイも」

一緒に見届けて。

彼女たちの会話に同じ立場で言葉を返せず、暇な手が剣の柄を握る。この場で柄を握つても誰も警戒しない。アレクセイの目の前では散らかす主人に嫌味を言う従者と、適度に聞き流す主人の姿。

明日からは行動しよう。

数少ない仲間に声をかければ彼らは一も二もなく立ち上がり準備を始める。

笑って死に向かう彼女の手を引くことは出来なかった。

第35話

遅かった。

イチトシは久しぶりのダングレストで久しぶりの酒を煽り呑んでいた。いつかドン・ホワイトホースと飲み交わした場所で、向かいにはアレクセイを従えて。度数の強い酒にアレクセイは眉を寄せる。

いつそ今ある聖核を盗れないだろうか、穩便に。そう言った彼女が頼ったのはドンの孫、ハリーだった。だが、彼女が訪れた今、ハリーは笑って彼女を追い返した。聖核ならもう穩便に盗られたよ。そんな言葉を添えて。

思い当たるギルドがひとつだけ。

「すごいなあ……。あの天才魔導師ちゃんが君に追いつく日は近いかな」

「そうだな、あの若さで行き着いたならば大したものだ」

「君の資料をあげてもいいけど……」

「ヘルメスの書を読み解いてからにしてくれないか……？　あと少しなんだ」

「ふふつ、君はやっぱり研究者が向いてるよ。読んであげてもいいのに」

「答えだけをもらうのは嫌いだ」

あはは。酔っているわけでもないのに彼女は酷く楽しげに笑う。酔っていてもこんな姿を見ることはなかった。声を上げて笑っていた姿を見たのでさえ数えるほどだった。まさしく過去見ていた姿とは『違う』彼女。凝視をすると彼女は机に肘を付き手のひらに頬を乗せて艶やかに笑う。こんな表情は昔はしなかった。

だからこそ。

好いた彼女とは別なのだと思えた。

手元の酒を飲みきるとアルコールが喉を焼く。

「ダミュロンは良いのか」

だから敢えてその名前が口を突いた。

艶やかな表情は一瞬で消える。この方が彼女らしい。

「性格が悪い……」

よく知ったイチトシの表情にようやくアレクセイも笑い、追加で運ばれてきた酒に手を付けた。

「魔導器を繋げた力だけで空のアレに勝てるのか」

「だけじゃないよ、大丈夫。始祖の隸長は君が思うより昔から世界を守ってるんだ」

あの、大きな魔核みたいな力が協力していると思ってくれていい。

「次はどうする?」

「……魔導器がもしも無くなったらどうなる?」

「……。一言で言ってしまうえば困るだろうな。柵のない街は魔物に侵入され、医療用魔導器と繋がっている人はおそらく命を失う。外で戦う傭兵ギルドは突然のことに反応できずそのまま魔物と戦うかもしれない。光照魔導器も光を失うなら夜に紛れた犯罪も増えるだろう。挙げればキリが無い」

「幸い私たちには貴族の力と、ギルドの力、そして——騎士の力がある」

わずかに酒が回り始めて来たところでアレクセイは顔を上げる。

貴族の力、ルディアースのことだろう。ギルドの力、イチトシ自身と海凶の爪、そして戦士の殿堂とのつながり。だが、思い当たらない力が一つ。否、思い当たりはするがそれは喪った力。

「調べは出した。アレクセイという騎士は、今のところまだ騎士団長だよ。噂程度流れているようだが……今まで見た景色をそう簡単には変えられないだろう」

「魔導器を捨てろとは言えないぞ」

「いいよ。少しでも被害を少なくするために動こう。幅広く力を持つ私たちに出来ることだ」

「ヘルメスの書は」

「空き時間に読んで。以前より自由時間はあるでしょ」

まったくもう。呆れたようにため息を吐く彼女はまさしく出会ったばかりの頃の彼女。
女。

ああやはり、この方が落ち着く。

彼にしか見せなかつた笑顔を見せられたとしても、とても艶やかに笑いかけられても、こちらがいい。

「彼らがそちらに手を打つ前に、まずはザーフィアスに行こうか。頼むよ、閣下？」
今までにしたことの無い呼称で呼ばれ、思わずそれ用の笑みを返す。

「任せておけ」

道化は得意なんだ。

そんな冗談を言えるくらいには元気になったんだ。頼ってくれ。言外の宣言にイチトシは器を返した。頼りにしているよ。

程よく酔って乗った始祖の隼長の背中中は馬車ほど揺れはなく、眠れそうなほどに心地が良い。体が沈む白の羽毛は暖かで滑らかで。

アレクセイがイチトシの背を抱え、ゆつくりと目蓋を閉じた瞬間。珍しく乗っている始祖の隼長の羽音が乱れる。

「アレクセイ、落ちないように後ろを見て」

背後の空が、割れていた。

ひびは広がり、一本だけ見えていた破滅の姿はその全容を露わにする。夜空よりも深い色の中に、金色があつた。

あれが本体？

金色はまるで人のような姿をしており深い闇に座っているようだった。

「あそこまで封印を解かれると困るな」

『眷属が、ノードポリカを目指しているようです。エアルの流れがいつもと違う、結界魔導器を無理に強めているような』

「アレクセイごめん。まずはノードポリカに行かせてもらうね」

アレクセイの言葉を待たず始祖の隸長は向きを変える。向かうのはノードポリカ。視界をよぎった身体の大きな狐のような。一度頭を振れば消える幻に、イチトシは空を見上げた。

青空を割って広がる深い色。

イチトシの目に青空が染みた。

第36話

薄い魚のような半透明の姿の中にある丸い核。ジイがいつかののように核を切り捨てればその姿は霧となって消え、空に溶ける。眷属、と呼んだそれはノードポリカに侵入していた。だが、どこからか降りてきたイチトシたちが『慣れたように』それを討伐した。ナッツは目の前の光景にため息をつく。

この人に常識はいつだって通用しない。

「今、連れが結界魔導器を直してる。普段通りの方が襲われないで済むよ、ナッツさん」
薄く笑うイチトシ。

後ろに控えて小さく頭を下げるジイすらも変わらない。

「妙な魔物を警戒したのが、仇になったのですね」

助かりました。

ナッツの言葉を遮り、誰かがイチトシの名を呼んだ。

「……ああ本当に。君たちはすごいね。レイヴン」

ナッツの背後から走って姿を現したのは愛用の弓を片手に持つ、天を射る矢幹部の

姿。力強く弓を持つ姿にジイが一歩イチトシより前に進み出る。

イチトシはジイを退かず、一定の距離を持つて立ち止まるレイヴンをただ見ていた。名を呼ばれるのも、いつぶりなのだろう。

気を抜けば自分も名を呼びそうで。

互いに何も言わず。ただ静かな時間を裂いたのは足早に近付いてくる足音だった。難なくレイヴンの背を超え、イチトシの隣に並んだ彼は首を傾げる。

「相変わらず身内の空気を読むのは苦手なようですね」

レイヴンを見たままのジイに指摘され彼は慌てて謝った。何かまずかったか、と。

「いや、ありがとうアレクセイ。これで大丈夫だろう。じゃあナッツさん、壮健で」

何も言わないままのレイヴンを視界から外そうと足に力を入れた瞬間。ジイの前でエアルが集まり、水球を成した。水球はやがて形を変え、人のような形でジイと相対した。

『寄り添う者、そしてイチトシ。久しぶりじゃな』

「その声、ベリウスか……？ 小さく、力強くなつたな」

「ベリウスなのかい？」

『今は名を変えてウンディーネと』

「名を変え、力を変えても変わらぬな」

珍しいジイの敬語ではない言葉。親しい仲のように話す彼の肩を少し叩くとジイは足を下げ、ウンディーネと名乗った存在の前にイチトシが歩み出る。

違う対応にレイヴンは奥歯を噛みしめた。

よく知った名前にナッツも駆け寄り、ウンディーネは目を細めた。苦勞をかけておる。頭領の声にナッツは深く、深く頭を下げた。

「君が居たからか。流石に到着が早いと思つたんだ」

『エアルの流れは伝えたが、わらわを救つたのはかの少女たちの力よ。人というのはまことすごいものよ』

「そうだね、今度は消し去れる」

『……、そうじゃな。そうかもしれぬ』

「私たちを止めに出てきたのか？」

ジイの言葉にウンディーネは首を振る。

『向かう先は同じ。わらわはただのお節介じやよ。先が短いなら後悔せぬようー』

『貴様っ！』

ジイが敵意持つて伸ばした手はウンディーネの残滓である水球を握り潰した。ぱしゃり、地面に落ちた水を憎むよう睨みつけ手についたそれも同じ場所に打ち払った。

聞こえていた。

レイヴンはウンディーネを見送り、視線を上げた。

「ジイ」

その人は従者の名を呼んだ。

「出過ぎた真似を致しました」

「帝都に。もともとの予定を遂行しよう」

お言葉のままに。

光が辺りに満ち、レイヴンは目を庇った。光が収まれば駆け出してでもその人を止めるつもりだった。

白と蒼の始祖の隸長に、睨まれるまでは。

『アレクセイ様、また引っ掴まれますか？』

それは変わらない口調で、変わらない性格で、鋭い前脚でアレクセイの肩を軽く叩いた。

「ご勘弁願おう……。レイヴン、と呼ばば良いのか」

地を蹴ったイチトシが始祖の隸長に乗ったのを見届け、アレクセイは肩を叩く前脚をはたき落としてレイヴンを振り返る。

「……今はイチトシに命を預けている。全面的にそちらにはつけないが、敵とはみなさ

ないことだ」

「アンタがそんなこというわけ、今まで好き勝手しといて」

「お互いにルディアースにはしてやられている。今、かの貴族を相手にしている余裕は君に、君たちに無いはずだ。君たちは君たちのすべきことを」

『喋りすぎです』

ばさり。一度空を打ち浮き上がった始祖の隸長は鋭い爪を持つ前脚でアレクセイの掴むと再び空を打ち、翔んだ。またたく間に消えていく姿を、レイヴンはずっと見送っていた。

酷く穏やかに。知る限り初めて会ったときのような顔でアレクセイは諭してきた。ルディアースが居るからこちらに入れ込むな、と。

胸元で重なる二つの飾りを服の上から握った。

日なたに濡れた地面。

あの方も始祖の隸長だったのですね。

そう言つて近付いてきたナッツにも目をやれない。

「どういう、ことよ、ウンディーネ」

『真実はイチトシより聞くといい。これが、かの者の幸福のきつかけになると願つておる』

レイヴンの前に現れた水球はそれだけの言葉を発するとそのまま崩れ落ち、黒く滲んだ水たまりを増やした。

無知だと馬鹿にするのなら、嘲るのなら、知識を。

それとも、調べろというのか。時間が残されていない、今のこの状況で。先が短いのなら。

最短の時間で知識を得るため、誰の力なら借りられる。

「ちよつとオッサン、こつちに騎士団長来たでしょ！ どこ行つたの、アイツ——絶対私の知らないことを知ってる」

もしも今の騎士団長が、昔の騎士団長と同じなのであればあの人が意味もなく先程の情報を伝えたとは思えない。喋りすぎた、とあの始祖の隸長、おそらくジイも言っていた。

つまり。

先程の言葉は自分にとってただのヒント。

「調べることに關してはほんつとうに回りくどいわ……」

それらの知識に触れられた数年。もう少し真面目にしておくべきだっただろうか。

過ぎた話だ。

「ダングレストなら」

話をつけられるか。

強靱な鳥の足のような前脚に掴まれ、地面を遠く足下に感じながらアレクセイは始祖の隸長を見上げた。

『落としても良いのですが』

おそらくアレクセイにだけ聞こえるように届けられた声に笑うと両肩に少し大きすぎる爪が食い込んだ。

「永く彼女の傍にあつたならば、情が湧いているだろう？ ……せめて悔いが無いようにとは思わないか」

常に風の魔術を展開しているのか酷く早い速度で飛んでいるにも関わらずアレクセイは風を感じない。だからこそ言葉を届けることが出来る。

『寄り添う者はあの方の意志に想うことはありません』

「言い聞かせるようだ——なっ」

言葉の途中で自分を襲った浮遊感。本当に前脚を放された。見上げた視線の先で高度を落とす始祖の隸長が見えた。

思いの外柔らかに落ちた場所で、つかめる何かを探した手は小さな手を捉えた。

「まったく。何を二人で遊んでるの」

『あまり始祖の隸長を馬鹿にするようなら今度は本当に落とすと伝えておいてください』

「馬鹿にしたつもりはないが」

『イチトシ様、空は飛べますか？』

「うん？ うーん、試したことは無いなあ」

「待て、待て！ 謝る、すまなかつた」

ばさり。わざとらしく大きく羽ばたかれ、慌ててアレクセイは始祖の隸長の白い羽毛を握った。

「なんだ、ただの仲良しじゃないか」

くるり。

空中で一回転した始祖の隸長から二つの人影が帝都に落ちた。一つは楽しげに笑い声を上げ、一つは悲痛な叫び声を上げた。

第37話

ダングレストに着いたレイヴンを待っていたのはとあるギルドの勢力だった。屈強だがどこか小綺麗さを感じる「らしくない」ギルド員たちはレイヴンたちの姿を認めると先頭の一人を始めとして深々と頭を下げた。誰に躡けられたのか、貴族のような綺麗さに一行が息をのむと先頭の青年が一歩進み出る。

敵意も善意も無い、ただの笑み。それを向けるのはギルド夜駆け鼠を預かる首領代行。

「副首領より伺っています。お話出来るのはレイヴン様のみ、ご同道願えますか」
「副首領って、どっち？」

レイヴンの問いに、首領代行は綺麗な笑みを浮かべた。
「ぼつと出の銀髪にそんな役目渡してると思ってるのか？」

豹変した言葉に耐えきれず笑い出したのは彼の背後に備えていたギルド員たち。くすくすと押し殺した笑いはやがて街を包む程大きな笑い声となる。

言い過ぎ、や、あれはあれで良いけど、といった話、軽口。

「客として話せと言われた態度で居るうちに、着いてきてくれねえかな。オレたちも、あの方々を怒らせるのは本望じゃねえの」

首領代行の言葉に笑い声は一瞬で収まる。

これだけの男たちにこれだけの変化をもたらせるほどに「強い」誰か。その影に覚えがある。

客じゃない態度があるってのか。

レイヴン側から聞こえた青年の声にレイヴンの背筋が凍る。何故喧嘩を売ってしまったのか。売っていい相手と良くない相手が居る。喧嘩を売らない、と青年を叱ろうと振り向いた瞬間身体が凍った。

「君が、今のあの子の上司かな？」

青年たちの後ろに、二人の人影。

「喧嘩を売るならせめて、相手の姿を認めてからにすることだ」

慌てて振り返った先で男が一步を踏み出す。

「ルディアース様……」

「レイヴンくん、としてははじめまして。そして、久しぶりだね」

貴族の。と誰かが言った。

叶うならば膝を折りたいほどに居心地が悪い。

「話を、聞かせていただけられるのですか？」

仲間たちが居るが、それでも敬語が消えない。

地面に転がされた記憶が脳裏を過る。

「うん？ そうだね。逆に聞こう。オレたちの娘が望まぬことを私たちがすると思っ
—」

「ごすつ、とレイヴンの目の前で男が蹲った。

男の隣を歩く女性が柔和に笑い、手に持った傘で男の脇腹を刺した光景が全員の目に
焼き付いた。

「男の意地は本当によく分かりませんね。娘が望まぬとも、幸せになれるなら話しようと
決めたではありませんか」

「それは、そうだが……、なにも、刺さなくても」

「言っても聞かないこどもなのでつい」

「さあ、行きましょうか。」

足早に歩き始めた女性を追い、男が脇腹を押さえたまま歩き始める。

「あーオッサンちよつと情報収集してくるから、待つててくれる？」

仲間たちを振り返ると恐ろしくも喧嘩を売った青年ユーリが不機嫌そうに眉を寄せ
る。

「あの、先程の方はルディアースの当主なのですか？」

恐る恐る訪ねたのは桃色の髪を携えた王国の姫エステル。そうよ。そう返すと彼女の顔は気のせいかわずかに強張った。

「ユーリ！ お買い物に行きましょう！」

そうしてエステルは無理やりユーリの腕を引っ張った。

やっぱり、有名なのか。

振り返ると困った顔で道を開けている夜駆け鼠のギルドメンバーたち。皆の目がレイヴンに訴えている。早く行けと。

「一つだけ。オレたち夜駆け鼠はたとえ首領の親でも知らない奴は信用しない。……そう言ったら、全員無手でのされたんだ。そして、全員奥方に酷く叱られた覚えがある。着いてきてくれねえかな」

「ああ……、そうなの。じゃあ、行こうかね」

全く気の乗らない話をどうも。

レイヴンは仕方なく、と足を進め首領代行のあとに続いた。連れて行かれたのは天を射る矢が管理する酒屋の一つ。

奥の個室の扉を叩くも返事はなく、首領代行が扉を開けると何かを言い争っているような二人が居た。

「ルディアース様、奥方様、案内してきました」

「ああ、ありがとう。君も聞くかい？」

「いえ、結構です。——首領が戻らないことは、皆存じておりますので」

失礼します。深く頭を下げた首領代行はレイヴンの隣を抜ける。

「これはアンタのせいかな？」

一つの疑問を投げかけて。

残されたレイヴンは扉を閉め、おそらく自分用に用意された飲み物の置かれた席に座る。この場は騎士として対応すべきか、ギルドとして対応すべきか。酷く迷っていた。

「貴方は知るべきと、私たちは判断しました」

迷うレイヴンを置いていくように、奥方が話し始める。

「ただしこれはあの子が最も望まない選択」

「これを話せばオレたちはおろか、ジイもあの子の傍から離される可能性がある」

「その上で、貴方に話します。そして私たちの望みは一つ」

——死ぬほど悩み、苦しめ

奥方から、ルディアース当主から笑顔で向けられた言葉。ただただ呆然と、笑顔の二人を見ていた。

「さて。いつまでも本題からそれるわけにはいきませんね」

「ああ、そうだな」

「これは私たちもあの子から聞いた話。おそらくすべて真実であり、すべて、もう、覆せない」

本題を。

思わずそう口にしてしまうと目の前の二人は目を見合わせ、頷いた。

「オレが話そう」

ルディアースはその目を細め、レイヴンを見やる。見透かすような睨むような視線を外さずに。

「あの子は、星喰み、だそうだ」

ただ告げられた真実に、言葉を失った。

第38話

「なん、て?」

ルディアースは嘘を吐かない。この場を作つてまで冗談を言わない。

だから告げられる言葉はすべて真実。

そう思つていてもレイヴンは聞き返した。

「……、もう一度聞きたいか?」

だが、答えは得られない。聞こえなかつたわけではない。だから二度目はなくても。

「いや、でも、そんなこと」

「言つたらう。苦しめと。これは事実だ。現に、君は始祖の隸長を従える彼女を見ただ

らう。彼女自身を、消すために」

それだけのことで。

声を荒げた。

星喰みは世界を食らう破滅そのもの。仲間たちは知恵を絞り、全力を賭して破滅を食い止めようとしている。古代ゲライオス文明ですら退けることしか出来なかつたそれ

を「消滅」させることで。

天才魔導師はそのための方法を少しずつ確立し仲間たちは全力でアシストしている。
星喰みを「消滅」させるために。

「イチトシは、人だ」

かろうじて絞り出した言葉は首を振って否定される。

「違う」

「じゃあオレたちは！」

「そう。目指すところは同じ。彼女を殺すために行動している」

「そんなの。だってあの人は」

「……私たちにとっても、あの子はただの娘だ。だけど、その娘からそう言われた」

「何か手が」

「あつたらお前のような半端者に話すわけがないだろう！　なぜもつと早く全て認めて
あの子の傍に居ない！　あの子はずっと」

落ちて着いてください、と妻に言われルディアースは片手で顔を覆った。

「あの子はもう、君の存在を認めない」

「なんで」

「分からないか？　君の存在を認めれば彼女はこの世界で生きていたくなる。だが、彼

女が残ることはこの世界の終わりを意味する」

少しだけ、レイヴンの心に驚きとは違う感情が顔を出した。怒り。何故だろうか。いつそ冷静に考え彼は答えに行き当たると。

オレより世界を選んだ。

彼女の手を取る覚悟をした。その覚悟は今の話を聞いても変わらない。あの頃のように笑い合えるなら、そうとも思う。けれど彼女は違う。

世界のために。そう言つて違う男の手を取つたんだ。

「何故人の姿をして生きているのかは興味もないが」

目の前で聞いた事実を話すこの人たちの手も、取つた。

「これが事実だ」

「ルディアース様は、納得したのですか？」

「いいや。だがあの子の近くが一番状況が分かる。今君がここにいるように協力者も居るのでな。ああ、あの子を殺すことに協力していると思つたかな？ そんなわけ無いだろう。あの子が死ぬことに協力するなら君に声はかけない」

「オレに、どうしろと」

「ははっ、言つたじゃないか。知つて苦しめと。これはオレたちから君への八つ当たりであり復讐だ」

オレたちから最愛の物を奪いながらも守り続けられなかった君への。
きつと最後の贈り物だ。

「どうしろというつもりはない。ただ、もしもそちらでオレたちの希望を叶えられる何かを見付けたなら、今日のようにこの場所を通じて連絡を」

「止めるつもりですか、手段がなくても」

「子が親を選ばずとも、親は子を選ぶんだよ。行こう」

差し出した手を妻が掴むのを待ち、二人は立ち上がった。

その手を掴んで止めようとした。だが、止めてどうすると自分の中で何かと言った。
閉じた扉の音。

レイヴンは机に置かれたグラスを手にとった。結露した雫がレイヴンの手を伝い落ちる。

「おっさん独りに、どうしろっての」

アルコールを覚悟して飲み込んだそれはただの水だった。

イチトシはルディアースの別邸があつた場所に座っていた。貴族らしい格好をしていればこの貴族街、今は誰も気に留めない。

復興が進み始めただけの帝都は未だ場所によっては建物が崩壊している。ルディ

アースの別邸があったことを知らない貴族にとつてはただ家を失い茫然とする女性とだけ見えることだろう。

黒の手袋に隠し続ける手に触れた。

永く生きた。とても。

けれど今この時が、一番楽しかった。

自分のことを忘れ、ただ人として人を愛している。忘れていない。かの戦争に行く前に彼が真っ赤になりながら差し出した黒い箱。帰ってきたら。彼はそう言つて帰らなかった。

今なら呼べば帰ってくるだろうか。

「隣に座つても?」

「どうぞ、騎士団長閣下」

ちょうど座れる高さになつた瓦礫に座る彼は既に騎士服を脱ぎ、髪型も変えている。

魔導器が無くとも生きられるように出来ることをしよう。騎士は未だ過去の団長を崇拜する者が多く、世間は未だ全ての犯人を知らない。

アレクセイが言葉をかければ騎士はほぼ全員が動いた。

「酷いことをする者がいたのだな」

視線を上げたイチトシが見たのは半壊した貴族街。ふふ。思わず笑う。

「そうだね。でも、すごいんだよ。団長閣下が鍛えた騎士団はただの一人も死者を出さなかった」

助けられなくてもおかしくない下町の住人まで、皆が助かった。

「次代のあの者ならもつと上手くやるだろう」

若く、強く、正しい。何度も話した金髪の若き青年騎士。騎士団に秩序を求める姿はいつかの誰かと似ていて。イチトシにとつては酷く幼くも見えた。貴族の何たるかも知らず、苦勞を見る未来は容易く想像出来る。

「騎士団はそれぞれの街に行かせた。適当な理由を付けたが」

酷く不審な顔をされた。だが、命令どおりに騎士は動いた。元騎士団長の言葉に彼女は笑った。

「物資については夜駆け鼠たちに任せてる。最初数日程度は回るだろうね」

「魔導器を繋ぐ話だが、核となる術式を試す場が欲しい」

「……人気の無い場所か、無人島みたいなどころかな」

「もう落とされないだろうか」

「そう努めてください」

瓦礫の向こう側、背後から話しかけられアレクセイはビクリと肩を跳ねさせた。

二人の前で膝を折った燕尾服姿。ジイはアレクセイを一瞥すると小さく鼻を鳴らし

た。明らかに態度が違う。イチトシはこれを「対等」だというのが絶対に違うとアレクセイは感じている。敵対ほどではないがただ嫌われている気しかしない。同じ目的が無ければ同じ道には足を踏み出しもしないだろう。

「無人島に覚えはある？」

「……」より遠く南西に。強い魔物が多く人の寄り付かない島がごさいます」

じゃあそこに行こうか。

立ち上がり、先に歩き始めた背中を二人で眺めた。

「南西の島、か？」

「アスタルが居らず魔物の統制が取れていないのです。精々喰い殺されぬようお気を付けてくださいね。『ティノイア』様」

否、これは完全に敵対である。

過去の自分を諫めることが出来るならどんな強引な手をとつても諫めてやりたい。たとえその手を切り落としても。

第39話

『——イチトシ様、右前方を見られますか』

ヒピオニア大陸を目指している最中、急に加速したジイが声を上げると、右前方を見やると雲で見づらい中、人とも鳥とも違う大きな姿が見えた。鯨のようにも見えるそれは優雅に空を泳ぎ、イチトシと同じ方向を目指す。

魔物か、と声を固くしたアレクセイを始祖の隸長は声を出して笑った。

『ははは、魔物と私たちの区別もつかないのですね。光栄の極みですよ』
「……彼らの移動手段だね」

何もそこまで笑わなくてもいいだろう。声を低くしたアレクセイを笑い続ける始祖の隸長はイチトシの声に前へ向き直る。

『向かう場所は同じようです。無人島ではなさそうですね……。いかがいたしましたしよ
う』

「声をかけられるかい？ 魔物に困っているなら共闘しよう」

『知れますが、構いませんか』

誰に。アレクセイは口を閉じた。

彼ら、とイチトシは言った。今彼女たちが気にする一行は一つだけ。

「構わない」

イチトシの返事を聞き、白と蒼の始祖の隸長は竜のような首を空へ向け、啼いた。

低くよく通るその声はパウルに届き、パウルの運ぶ彼らにも間違ひなく届いた。これ以上のトラブルは困るって、と声の方向を見た一人の男。雲に隠れた先には何かが飛んでいるような影が見えるだけ。

パウルが答えるように低い声を上げ、その声は男の隣に立つ青髪に言葉となり繋がる。彼女だけが持つその力を知っている仲間たちはなにか言っているのか、と、彼女を見た。

「古い始祖の隸長が協力してくれるそうよ」

レイヴンは声の聞こえた方向を凝視する。未だ雲の向こう。見えない姿。

「……ね、ジュデイスちゃん。伝えられたのって、それだけ？」

レイヴンの問いにジュデイスは言葉を続ける。

「いいえ。これは私には意味が分からないのだけれど『どちらを取るか、決めたか』と」

「なるほど……」

最低だな。誰にも聞こえないよう舌打ちを漏らした。左前方から同じ方向を目指し、近付いてくる白と蒼の姿。大きな二枚の翼をばさりと打ち、小さな二枚の翼で風を切る。綺麗、と少女たちはその姿を見た。

その背にある二つの姿は、仲間たちには見えていない。

「バウルでこれ以上近付くのは危険ね。近くに降ろすわ」

あつちはあのまま行くようね。バウルを追い越しヒピオニア大陸へと降りていく始祖の隸長。

今、自分たちが運ぶのが『星喰み』を倒す道具の試作品だと知ったら彼女は、どう思うだろうか。それでいいと、言いそうだ。

アスタルという始祖の隸長の居なくなつた土地では多くの魔物が荒れ狂い数少ない人間へと群がっていた。

「アレクセイ、身体は平気？」

「無論だ。次期騎士団長殿を助けに行こうか」

「他に人も居そうなんだよね。ジイ、頼める？」

『私が魔物と間違えられないことを祈りましょう』

「やるなら私がやってやろう」

『剣術ですら勝てた試しもないのによく回る口ですな』

人と竜で睨み合うのも一瞬。振り返った竜の尾は男を直撃する。直前で剣を抜いて構えた彼はわずかに飛ばされるのみでその一撃を耐えきった。

何でこんな仲が良くなっているんだ。

魔物を一撃で斬り伏せ、叩き伏せる彼らは互いに命じられた場所へ駆けた。

ジイならば心配は要らない。イチトシは腰に挿した橙の二刀を引き抜きアレクセイの後を追った。

乱戦、言うにふさわしい舞台。

乾いた大地に吹き上がる砂嵐。人の怒声に魔物の叫び声。似ている。

「ぼーっとすんなよおっさん！ あの真ん中行くんだからな！」

強く叩かれ見えた方向に揺れる長い髪。

何度か頭を振って『弓』を構える。魔物たちの集まる中心で天才魔導師リタの作った装置を起動させる。テストもしてない装置をぶっつけ本番で使う。魔物を掃討する。

射った魔物の先、揺れた灰色の髪。

「イチトシさん！」

誰よりも早く声を上げた青年に、彼女は振り返る。

「アンタ何してんだ！　しかもそっち」

「アレクセイのことは見逃して欲しいな。ユーリくんはどこ行くの！」

目の前の魔物を斬り伏せながらなんて器用な。彼女の背後に襲い掛かろうと両腕を振り上げた熊のような魔物はアレクセイが斬り伏せる。背中を気にしていないのか。

「この中心、一緒にどうだ？」

ちよつと何言ってるの。

仲間から声をかけられユーリが視線を向けたのは、レイヴンだった。

「……。道を作る手伝いはしよう！　アレクセイ、あつちと交代、ジイを連れてきて」

「簡単に言ってくれる！」

ザウデ不落宮の上でも見せた剣で魔物を一刀の下、斬り伏せた彼は魔物を討滅する始祖の隸長へ向かって走りイチトシはユーリの元へ駆けた。

「つとに神出鬼没だな、アンタ」

「無人島でのんびり暮らすために来たんだけどね」

はっ、よく言う。笑ったユーリの背後で飛び上がった狼の魔物が大きな前脚に潰され消える。

『どちらへ』

「最も魔物の集まる場所に行くそうさ。道を作れるかい？」

『アスタル程疾くは駆けられませんが、ちょうどいいでしょう。討ち漏らしたらお願いします』

「ユーリくんがね」

オレかよ。

からりと笑い合つて、それを合図に地面を蹴つた。お前たちはここを守れ。ユーリの言葉に従えず、レイヴンもまた駆け出した。

ジイがほとんどを打ち倒し道を作るが、討ち漏らしたら何匹かは横から襲いかかってくる。左右からの攻撃にも怯まず、女性と青年はただ前に進む。後ろなど、振り返りもしない。

『この辺りでしようか。いったい何をするおつもりで?』

「なーに、秘密兵器つてな!!」

ユーリは小さな魔核で作られた何かを地面に突き刺す。それは彼らの持ち込んだ対星喰み用秘密兵器の試作。

精霊の力を模し星喰みを打ち倒す。

彼らが思い至るのは、同時だった。

「イチトシ!!」

銀色が空を飛び、紫の羽織は駆けた。

た。
秘密兵器と呼ばれた小さな魔導器が光を放つと同時に、イチトシの視界は暗くなっ

第40話

光が収まった。

周りの魔物は影も残さず消えた。

空を飛んだ銀色の刃はイチトシの近くで力を失ったように落ち、紫の羽織はイチトシを囲み、白と蒼もまたその上から彼らを囲った。

「ありがとうレイヴン。……でも不思議だね。何故私を庇ったんだい？ 他の人は無事だとわかっていたよね？」

思わず腕の中に収めてしまった暖かき。冷たい言葉に返す言葉もない。

「……ジイ？」

不意に彼女が名前を呼んだのは彼らを囲む始祖の隸長。

『御一方、御覚悟を』

何の話。

問いかけに答えはなく、その大きな体躯は崩れるように二人の傍に倒れた。

背中から翼にかけて大きな裂傷。

誰が。イチトシはレイヴンを退けて立ち上がる。土煙で視界が悪い。ユーリは未だ土煙の中心。ジイを襲うには遠い。何より理由がない。

覚悟を。

ジイはイチトシもレイヴンも戦える者だと分かっている。その上で覚悟を促した。一対一ではこちらに分がない。それだけ強い何か。

「ああ、マズいな。ユーリくんたちと一緒に狙ったのか」

思い当たる人たちがいた。

「正解っ!!」

レイヴンの襟を掴んでジイに囲まれた外へと飛ぶ。二人のいた場所は真上から飛んできた誰かの振り下ろした剣で砂嵐となる、

「ルディアース、様……」

「ああ、君もそちら側を『選んだ』のか。惜しいな」

「何をするおつもりですか、父上」

「ふむ、世界を救う方法を見つけたという情報を得てな。では、その英雄たちの顔を拝もうかと思つたわけだ。まあ、土産にそれぞれ足の一本程度もらうつもりだがな！」

ジイの体を足蹴に飛んできたそれからイチトシを守るように前へ出ると途端、空にあつた敵の身体は地面に落ちた。地に足をつけると同時に回転し、硬い革靴のかかどが

横腹に入れられてレイヴンの身体は跳んだ。

「何も魔術は相手に使うためだけの物じゃない。覚えておけ」

「その子に入れ知恵したのも」

「そう、オレたちだ」

手の届く範囲で笑い合う二人。その手に武器が無ければ仲の良い親子と見えるだろう。

先に剣を振ったのはイチトシだった。

短刀を振り上げ狙ったのはルディアースの『首』。一歩、足を退けるだけで急所を狙った一撃を避けルディアースもまた剣を振り上げた。人の身体を中心に狙った一撃に、容赦は見えない。

「あははは、仮にも父と呼ぶなら首を狙うなよ」

砂を巻き上げ後ろに飛んだイチトシ。

その左目の下にわずかに赤い線が作られた。

「お互い様でしょう。世界を救ってくれる彼らを傷つけるなんて」

「違うなあイチトシ。オレたちにとってこの世界の英雄は仇にしかならないんだよ」

それが、親だ。

子を殺すなら、と、ルディアースは言っている。だが、イチトシにとって殺されるつ

もりはない。

「私は父上と母上、そして『あの子』にはこの世界で幸せに過ごして欲しいのです」

「その父と母は、娘が居ない世界にいる意味がない。この世界すらどうでも良いんだ」

「どうか理解して欲しい」

レイヴンはただ二人を見ていた。

これはただのわがままのぶつかり合いだ。どちらも我を通すためだけに。

銀色がレイヴンを横切り、イチトシに並んだ。

「オレの前に立つなら覚悟しろよ、アレクセイ・デイノイア」

剣を構え、イチトシの前に立つのは前騎士団長。

「覚悟ならとうに。貴方たちが全て知りながら彼女の傍に居る時から」

「いいね、そのくらいでなきや」

そのくらいで。あんなければいけないかった。

「レイヴン」

声をかけられて手元の弓を強く握った。オレも力に。

彼女は目を細めて笑い首を振る。アレクセイが必死にルディアースへ喰らい付いているのが彼女の肩越しに見える景色。

「君たちは怪我なく、星喰みを打ち倒しに行くんだ」

彼女が差し出した両手は強くレイヴンを拒絶する。

「さっきの魔導器、恐ろしいくらいに良い出来だ。ーージイ!!」

ぺたり。地面に腰を落とした瞬間レイヴンとユーリを白い影が囲む。空に啼いた始祖の隸長ごと、結界に守られ閉じ込められたレイヴンは手を伸ばした。いつも、大事な時にはこうだ。歪んだ景色の向こう側で彼女は背中を向ける。

いつも、自分より幸せであつてほしい、一秒でも長く生きてほしい人は前に立つ。勝手に護ろうとする。護りたいのは自分なのに。

「おい、爺さん。コレ解けよ」

『何故でしょう。言葉のニュアンスが違う気がいたします』

「なんだ、じじいのが良いのか?」

からりと笑った青年は剣を片手に結界を閉じた始祖の隸長を見上げていた。

「おっさんもいつまでそうしてんだよ。手、伸ばしたってイチトシさんはもう来ねえよ」
青年の告げる事実と奥歯を噛みしめ。

「奪いに行かなきゃな」

目指すべき指針に目を見開いた。

『本当に残念なこと、今の私ではこの結界を維持できる時間は短いのです』

片方の翼は垂れ、背中から片足にまで及ぶ裂傷。刀や剣ではおよそ付けられないほど

深く広い傷。背中への傷は恐らく身体内部まで達している。

『貴方の意思を、レイヴン様』

蒼の瞳はレイヴンを真っ直ぐに捉える。

「……おっさんには分かんないわ。青年たちのやることは応援しなくちゃいけない。けど。オレにとってイチトシは」

「ごちゃごちゃ考えるなよ、おっさん」

ばしりと青年に強く背中を叩かれる。痛む背中をさすり見上げた青年は楽しげに笑っていた。ああいつだったか、花見をしていた時か、その時の彼女の顔に似ている。

「聞かれてんのはおっさんの意思だろ」

正論や理屈なんて要らない。

「オレは……」

結界の向こう側で彼女と共に戦っているのは自分ではない。自分を弾いたのは、彼女。

「オレはイチトシをもうこれ以上誰にもやりたくない。ただオレの横で、笑っててほしいんだ！」

始祖の隸長は眩しいものを見るように目を細め、前を見た。

アレクセイとイチトシを相手にしながらも引かないルディアース。实力だけを見れ

ばレイヴンたちが混ざったところでただの足手まとい。

『あの方は根っからのルディアースに在らず。私を攻撃した者へ。それだけが光明です』

「他に居んだな？ おっさん」

「……、ジイを攻撃した時の音にあたりつけて射るわ。青年、だいぶ危険だけど」

「任せろ。突っ走るのは得意だからな。っと、おっさんこれ、要るだろ」

ユーリが差し出した刀を掴み、レイヴンはそれを腰に挿した。

「そうね、ありがと」

久しい重み。あれからろくに鍛錬もしていないが、不思議と今なら、あの男に牙を立てられる。そんな気がした。

『機会は一度。外せばあなた方は本当に足を失うと思ってください』

「いいね、そっちの方が真剣になれる」

『どうか。振り返らず』

どういう意味。問う暇すらなく。片翼を地面に垂らしたまま始祖の隸長は前脚で強く地面を叩いた。

『私は貴女の元に在り、幸せでした』

始祖の隸長の全力の咆哮を浴び、ルディアースの視線が一瞬だけ二人から逸れる。迷いなく足を踏み出したアレクセイ。

その肩には振り下ろされた剣が食い込む。

「いくら何でも浅はかだろ」

「そうですか、ね?」

食い込んだ剣を持つ手を捉え、アレクセイは名を叫んだ。

「レイヴン!!」

ジイの放った砂煙から駆ける姿。一本の剣の光にルディアースは腰元の短剣を抜いた。殺す気の無い刀ならいなせる。いなせば次の手に移れる。

ルディアースの想像通り、レイヴンに彼を殺す気は無かった。

構えられた短剣を『ただ全力で』叩き落としたレイヴンが笑う。

「だってそれはオレの仕事じゃないからね」

「がっ。と鈍い音がして一本の紅がルディアースの右肩と胸の間に刺さる。

「ごめん。母上が居るのは分かった。母上に攻撃させれば父上には隙ができる」と

「な、あ、イチトシ?」

剣の弾かれた左手で、自分を刺した灰色の頭に手を置いて。

ルディアースは優しく笑った。

「……、……」

小さなその声はレイヴンやアレクセイには届かず、イチトシは剣から手を離して足を引いた。

倒れるルディアースをレイヴンが受け止める。死んでは居ない。

ルディアースに回復の魔術をかけようとした時、背後で大きな何かが倒れる音。地面に倒れた白と蒼の始祖の隸長。ジイ。声をかける間もなくその姿は光に包まれ、大きな唯一つの結晶を残した。

「……、君まで置いていく」

ぼつり。つぶやいたイチトシの赤い頬へ、誰かが華奢な片手を伸ばした。

第41話

「母上」

「貴方の選んだ道を嘆くのはなりません。その手で打倒した者に失礼です」

柔らかな光がイチトシの頬を覆い、赤い色は止まる。

「ユウリくんは」

「未来の英雄は少しばかり力が足りませんね」

閉じた鉄扇で口元を隠したルディアースの妻は視線を背後へと流した。倒れた男の更に向こう側に、倒れる黒髪の青年慌ててレイヴンが駆け寄ると青年は動かず、ただ気を失っていた。

「ルディアースの当主が妻を心配してやられてはなりませんよ？」

「しゃがみこみ、ぺしり、眠る自分の夫の頭を叩いた女性はただ笑った。

「母上は……、戦いませんか」

「ええ。ルディアースの当主はもう、私ではありません。当主が負けたのであれば納得はしなくても貴女に従います」

夫へ回復の魔術をかける女性、自分へ回復の魔術をかけるアレクセイ。誰かがイチトシの名前を呼んだ。

ゆつくりと視線を向けた先でレイヴンが片手で手招きをしている。蒼く透き通った結晶と共に立つ彼もまた、笑顔だった。

近くへ寄ればその結晶が彼と、永く寄り添った者と同じ雰囲気であることがわかる。聖核。エアルを取り込んだ始祖の隸長の遺した命と魂の結晶。始祖の隸長の命が失われた証。

「知ってるかもしれないけど、おっさんたちは最近始祖の隸長に会って……聖核から精霊って存在に生まれ変わってもらったの。エアルよりも生命力に近い、なんて言ったかな。マナっていうそんな力を使って」

「……ベリウス、ウンディーネのような？」

「そうそう。もちろん、聞けるときは始祖の隸長の意味を聞いてからね。でも、ジイからは聞けなかった。だからイチトシちゃん、教えて」

どうしたい？

ジイはイチトシにとって間違いない寄り添う者だった。永く永く、敵ではなく、完全な味方でもなく必ず共にあった。その存在に疑問を感じ、遠ざけたコゴール砂漠の奥地でようやくその存在がいかに身近であったかを思い知った。

触れた先はただ石のように冷たい。

話したい。何より、彼にもこの世界で生きていてほしい。自分が居なくなり使命に縛られることのない世界を。

「頼めるかい」

宙に浮くその結晶を軽くレイヴンに押し出すと彼は柔らかくそれを受け取った。

「多分、近くに休憩できる場所を作ってるはずだから。そこで待つててくれる？」

「うん」

「気のない返事ね。大将、逃さないでよ」

肩を押さえながらイチトシの隣に並んだアレクセイは声をかけられて困ったように眉を寄せた。

「それを私に頼むか……。逃れられぬのは私だよ」

ルディアースに深く抉られた肩を押さえたとアレクセイと共にジイだった結晶を見送る。

「肩は」

「しばらくは使い物にならなそうだ」

「あの人相手にそれだけで済んで良かった。レイヴンさんの名前を呼んだのは」

「居ると思ったからだ。『彼』ならば。どの名を呼ぶかは迷ったが」

「……」

「最期ならば」

「駄目だ。生きたく、なる」

その言葉を言う時点でもう思っているのだろう。それも、自分で解った上で。

星喰みだという彼女は確かに永く時を過ごしていたのかも知れない。だが、アレクセイの知る彼女、イチトシはどれだけ知識を有していても、どれだけ人並み外れた強さを有していても。

ルディアースの家に生まれた一人のヒト。

デュークのような存在とも違う、ただのヒト。

「そうか……」

ただ、そのヒトを手元に呼べず。今の状況を招いたアレクセイは視線を逸らした。

「君が居てくれてよかった、アレクセイ」

戻した視線の中で彼女はアレクセイを見上げた。

「今でなければ……、私はわがままに世界を崩壊させた」

アレクセイもあの子も。

「大事な物があつて、守る知識を持っててくれて、今で本当に良かった」

本当に守りたい物は何一つ守れなかったというのに。

アレクセイは自分以上に強い思いを抱えているであろう男が走り去っていった方を見た。

「アレクセイ、君は気になるものがあるんじゃないかな？ つなぎくらいにはきつとされるよ」

歩いてくる青年ユーリが片手に持つのは多くの魔物を消滅させ、効力を無くした小さな魔導器。ジイですら知らない力、アレクセイの剣ですら術式の解体が叶わなかった力、それは強くなれば確実に世界の脅威を消し去ることが出来る。だが、まだ足りない。ユーリの持つ魔導器は二度と動かない。それが筐体を要因とするのか、造りが要因なのか。回路や仕組みを考えるのが苦手なユーリとイチトシには分からない。

「頼めるのか？」

「私が保証しよう。それに、今彼は肩をやられている。知識以外に秀でることはないよ」
「イチトシ、それは言いすぎだと思うのだが」

「じゃあ良いか。これ、頼めるか。多分うちの魔導師さんも気にすると思うけどまあ、自業自得と思つてやられてくれ」

納得もしないで欲しい。

軽く投げてよこされた魔導器を落とさないよう慌てて受け取り、アレクセイは即座に分析用の陣を展開する。ぶつぶつと、内部の術式について独り言を言っているようだが

イチトシとユーリにはやはり理解できない。

「お願いね。終わるまでは、せめて協力させてあげて」

「ああ。全部終わったら色々教えてもらおうからな」

もちろんだよ。

笑って答えた言葉だけが、アレクセイの耳に強く残った。

第42話

夜半。宿となる建物の屋根に座り、イチトシは残った空に瞬く星を見ていた。今も昔も綺麗な空だ。隣に並んだ人影に声をかけずにいるといつかそうされたように紫の羽織が肩にかけられる。暖かなその端を掴むと、寒いんだから羽織ってなさい、と半ば怒られてしまう。

寒くはないんだけど。

文句を言うも隣に座ったレイヴンは、はいはい、とまともに取り合わない。

「あの、ね。ジイの聖核、精霊になった、ん、だと思うけど。なつた瞬間居なくなつたつて」

「うん、分かるよ。彼はイタズラが好きなんだ」

『言い方が気に食わないですが、まあ否定しないでおきましょうか』

背後から聞こえた声にレイヴンが振り返ると『見知った姿』のジイが悪戯に笑い二人を見下ろしていた。

「気分はどう」

「良いですよ。扱いに慣れるまでは難しいですが、この世界に近くなった気は確かに致しますね」

「始祖の隸長ではないけど、世界を見守る存在ではあるんだろうね」

「そうですね。ですが今はまだ『寄り添う者』です。必要であれば名をお呼びください。では」

軽く一礼を残してジイは夜空に溶けるように姿を消した。

うわあ自由。あまり言うともた出てくるよ。

小さく笑い合い、夜空を見上げた。夜空半分、後は星喰みに覆い尽くされた空。空を見ると嫌でも思い出す。

レイヴンは何も言えず、何も言わず、ただ空の中心に座るような姿の星喰みを見上げていた。今、この場所で仲間たちはあの星喰みを消す最終調整をしている。仲間と話し、決意を固め。魔導器の無いこの街の手伝いをする事で未来に思いを馳せ。見知った元騎士団長は気性の激しい天才魔導師と論議しながら魔導器を作っている。その過程で元騎士団長は何年もかけて造ったという剣を奪われていたが、論議をしている間はどこか楽しそうに見えた。

ルディアースの二人は異常なほど静かだった。大怪我をしてはいたが既に意識は戻っている。様子を見に行ったが、レイヴンは一度視線を向けられるだけで何の言葉を

かけても何も言われず、何の反応もされなかった。

おっさんはルディアースに無視されてるのよ。そういうと彼女は彼らのいる建物に目をやった。

「ルディアースは、元々母が当主だった」

「そう、みたいね」

ジイの言葉とあの場の話でわかった。きつとあの人は後からルディアースの家に嫁いだ。武芸に秀でたあの家に。

「きつと母が相手だったら私たちは勝てなかった。父を表に戦ったのは……あの人達なりの譲歩なのだと思う」

「青年を転がしてるのは、少し笑ったわ」

ふふ。虚を突かれて反応できなかったのだろう。力の足りない英雄と笑った母は強い。知る限り誰よりも。

イチトシもレイヴンと同じように空に鎮座する破滅を見た。

「魔導器がない未来は、大変だよ」

「うん、そうかもしれない」

「そんな中、魔導器が使える君はもつと大変だ」

「ああ、そっか。そうね」

「ジイはきつと嫌々ながらも手を貸してくれる。頼ると良い。彼の考え方は人に近い」
「……そうするわ」

誰かの居ない未来の話。

「いや。いいのか。あんなに頼れる仲間が居るんだ」

仲間が居ても。

「心臓魔導器はまだ、アレクセイの方が詳しいかな。嫌だろうけど彼は一生をかけて償うだろうから何かあれば力になる」

「ねえ」

どれだけ頼れる人が居ても。

「イチトシちゃん」

唯一人居ない。

「……」

「なあに、レイヴン」

「イチトシちゃんの……、探してる人。伝言くらい、預かるうか」

イチトシは目を閉じた。

探してる人。

「まだ生きているなら私の言葉で縛りたくない」

「一言くらい、無いの?」

左手を強く握る。一言だけ。

「たすけて」

「え?」

小さな小さなその言葉を聞き取ることができなかつたレイヴンは聞き返した。

「ありがとう、と言ったんだよ。充分幸せをもらったからね。明日も早いだろうか? レイヴンも寝なさい」

絶対に違う言葉を言った。

けれど彼女は羽織りをありがとう、と彼を追い返す。もう、きつとどんな言葉をかけても返ってくるのは取り繕ったような言葉。

しかたなく羽織りを片手に屋根を降りて自分が休むように宛てられた部屋の扉を開けた。

「臆病者」

直後贈られた言葉に武器に手が伸びる。部屋の中にいるのが燕尾服だと気付くと安心し、そして贈られた言葉を反復して目を逸らした。

「オレにどうしろって言うの」

ベッドに勢いよく座り込むと正面に回った燕尾服は片手を腰に当てた。

「別に、どうも致しませんよ。あの頃の無邪気さを思い出しているだけです」

「ジイは遠慮ないのね」

「……変えようと思えば変えられたものすら変えずにただお互いに『待ち』つづける姿は見ていて腹が立つほどです」

奪いに行かなきゃ。そう言った青年の方がまだかっこいい。

「そういえば、さっきのイチトシちゃんの声。ジイには届いてたの？」

「ありがとうじゃないでしょ？」

ジイのわざとらしいため息。

「イチトシ様は弱い。貴方がもし最期を看られるならば、イチトシ様はきつと同じ言葉を言います」

「おっさんは強いと思ってるけどねえ」

「貴方に何も打ち明けられず共にいてほしいとすら言えないの？ 人の強さ弱さは分かりませんね。……その時が来たら力を貸しましょう。それまでどうか、呼び出さないでくださいませ」

透けるように消えていったジイを見送り一人の部屋。座ったまま後ろに倒れ片手を

目の上に置いた。

屋根の上に彼女を見つけた時、背中が小さく見えた。膝を抱えるように座っていた彼女は自分を守っているようにも怯えているようにも見えた。

不思議と暖かく感じたんだ。手を握られ、抱きしめられ。

そうしてやることすらできない。

爪が食い込み血が滲む程に強く握りしめた。

それをしたところで。

自分は彼女を『殺す』選択をしたんだ。

「説教は嫌」

未だ屋根に座り続けるイチトシは音もなく背後に現れた燕尾服に振り返らず言い放った。

「まだ何も言っていないませんが」

「どうせレイヴンにも説教したんでしょ」

「ああ、そうでした。ではひとつだけ。敬称、忘れておりますよ」

レイヴン、さん、でしよう？

ぱふり。イチトシは抱えた膝の中に顔を埋めた。

「説教より酷いね」

「悪戯が好きなもので」

「……本当に酷い。明日、何があっても君は彼らについてね。アレクセイは連れて行けないから」

「はい。最期のお話をしに参りました。イチトシ様、私は——最初こそ寄り添う者など辞めたかったです。今は貴女の元に在れて幸せです」

想定しない言葉に振り向くと既に燕尾服は見当たらず、星の瞬く空が広がっていた。言い逃げなんてらしくない。軽口にも返ってくる言葉はない。

「先を、見たくなるじゃないか」

魔導器の無い世界、始祖の隸長ではなく精霊という存在が増える世界。エアルではなくマナという力が主流になる世界。

破滅なく進んでいく世界。

きつと鮮やかで暖かい。

「……明日より未来。あの子には幸せが数多く訪れますように」

イチトシは生まれて初めて両手を合わせ、空に願った。

第43話

二人を見ていたレイヴンの仲間たちは総じてあれで良いのかとユーリに尋ねていた。隣に在り、距離もほど近いのに何も話さず、ただ遠ざかる景色と近づく古代遺物に目を向けていた。

尋ねられたところで今の二人は然程知らないユーリには何も答えることができず、気になるなら聞いてこいと返す他ない。

オルニオンを出るときに一悶着あったールディアースという貴族がボロボロの身体で戦えないはずの前騎士団長と死闘を繰り広げていた。キッとどちらも死なないだろうと、彼女は目を向けず連れて行って欲しいとユーリたちへ頼み込んだ。

空へ昇ったバウルの元で、彼女たちはずっとああして二人で景色を眺めている。そしてその風景をカロールたちもまた、見ていた。

「すごい見られてる」

甲板から外に身体を向けたイチトシは背後に突き刺さる視線に気付いていた。

「そりやおっさんを火除けにするからでしょ。なによ、少年少女と話すのは苦手って」

「何かあるのか分からないのに体力使えないよ」

「じゃあおっさんがその分話しちやおうかな」

「いいよ。レイヴンなら。」

振り返り甲板のヘリに肘をついた彼女は覗き見ていた少年少女に一度目を向けると、レイヴンを視界に収めて笑う。

「ルディアースって貴族が倒れたとき、何て言ってたの？」

彼女が剣を刺した後、ルディアースが彼女に手を置き言った言葉。聞くべきではなかったならごめんね、と謝りながらの問いにイチトシは少しだけ目を伏せた。

『「じゃあ、またな』と。言われたよ」

「そう」

「じゃあ早いとこ星喰みぶつ倒して戻らないとね。なんて。レイヴンはちやらけた言葉を噛み砕いた。

「大将はこの後どうすんのかね」

「本人は投獄希望だったよ。それでも足りないとは言っていたけど」

「そっか」

「今はもう立証出来ない罪も多いから、何処かの貴族が無理言って拾い上げそうだけだね」

目に見える光景ね。

皆身の振り方を考えている。自分は、考えていないわけではない。イチトシの隣に手をつき空を見上げる。ギルドと騎士団はもう手を取らなければいけない。どちらも知る自分ならばきつと、何かの力にはなれる。

どちらでもあつた、自分ならば。

「古代都市タルカロンか……。初めて見る」

近付きつつある都市の影。

「見たこと、無いんだ」

「ふふ。そりゃあ、だつて、タルカロンが出来たのは私の少し前だもの。私が居た頃にはそれどころじゃないでしょ」

「?。どーゆうこと?。アレは」

「ああごめん。アレは対始祖の隸長の大型兵器だよ。アレが出来た後に、星喰みは肥大化したんだ。だからあまり詳しくはない」

ああそういえば調べごとをしていて魔導師ちゃんがそんなことを言っていたような、言っていないかつたような。

「そういえば、知ってるか分からないけど人魔戦争の時にね、持ち帰られた知識があるんだ。タルカロンのことも少しだけ書かれてる」

ぞくりとした。レイヴンは真つ直ぐに伸びそうな背筋を押さえて、へえ、と何事もな
く返した。

「アレクセイはあの知識があればこの世界を救えると信じていた。……実際、そうなの
かもしれない」

「でも大將が作ったのはヘラクレスで、起動したのはザウデでしょ」

「この時代には実現しない事として、精霊のような存在について書かれていたんだ。そ
れに、アレクセイの知識はあの本に寄る。もし昨日の最終調整でアレクセイの知識が役
に立ったなら……あの本はなくてはならなかった」

「……。そう、それは……ありがたいわ」

かつての上司を憎むような口調で話してもイチトシは顔色を一切変えず、すべて話し
終えてからなんでありがたいの、と首を傾げた。

知っていても知らなくても。

レイヴンがレイヴンでないときに頼まれ持ち帰った知識。災厄を呼び出す元となっ
た知識。罰されるべきは上司ではなく、という思いがあった。あの知識で世界が救われ
る。もし本当にそんなことになれば。自分もいくらか救われるのだろう。

「見えてきたね。マナ、だっけ。荒れてるようだけど大丈夫かな。大丈夫にしてくれる
かな？」

『人使いが荒い。ああ、精霊使いでしょうか』

「精霊になって口数が増えた従者使いでしょ。ほら、バウルはまだ子供、守ってあげな
きや」

子供をだしに使って。事実だから、ほら。

誰もいない虚空に話しかけていたかと思えばバウルが白く半透明な壁に包まれる。

「レイヴン」

振り返ると同時に青く光る何かがレイヴンの中に取り込まれる。それは胸の位置に
吸い込まれて消える。

「大丈夫、魔核を使っけていてもそれは使わない」

「……今、何したの？」

「しばらくエアルやマナの嵐に晒されても大丈夫なように。アレクセイに力を借りて私
が作った術式だよ。不安だったら魔導師ちゃんに見てもらって」

実験したし大丈夫なはずだけど。

実験なんて誰に。世界に未だ二つしかない魔導器。誰と考える必要もない。彼らも、
イチトシの下に在るのか。わざとらしい言動。鋭く細めた瞳。知略でユニオンの首領
を追いやった男。

「実験台じゃなくて良かったわ」

「そうだね。今から十日も眠っててもらっては困るからね」

冗談、でしょ？

問いかけたレイヴン。イチトシは綺麗に、笑って返した。

古代都市についた衝撃が船を揺らすすが、彼はひとり、それ以上の衝撃に調子の良い心臓魔導器を服の上から押さえた。

第44話

周りごと全てを焼き尽くそうとする業炎を止めたのは、それまで一切手を出さなかったウンディーネだった。片手を向けるだけで作られた水の壁に業炎は阻まれ、揺れる景色の向こう側で大きすぎる影が闇雲に暴れ回っていた。

紅く。翼を持った獅子のようなそれは見るからにただの魔物ではなく。だが、理性は感じられないほどに暴れている。

グノーシスの時と同じか。ユーリたちの言葉にイチトシはようやく状況を理解した。

「アレクセイが奪った分、エアルの調整をしていたのか」

その姿を見たことは無かったが、それをしたのが誰か。分かる。

「そしてデュークも倒そうとしてるの？」

水の壁が無くなった向こう側で翼を広げ、真紅の目を向けた彼は吠えた。

「カレン」

言葉を利くことすら出来ず、こちらの言葉も届かない。

「ユーリくん、この子は私のギルド員なんだ。……ここは私に任せてどうか先に」

「ほー。ユニオンのギルドってんならもう一人要るだろ」

強く背を押された紫の羽織がイチトシの前でべしやりと倒れる。

「じゃ、イチトシさん、おっさん。ここは任せるな」

倒れたまま見上げた景色。困ったように笑う彼女が差し出した小さな手を取った。

「一人でどうにかするつもりだったのに」

「そりゃ無理ね。なんだかんだ青年たちは優しいし」

「レイヴンもでしよう？」

さあ立って。攻撃が来るよ。

強く引つ張られ、一歩足を踏み出す。獅子の吐いた業炎がレイヴンの羽織の裾を少しだけ焼いたが、互いに気にせず笑った。

最後だから。最期だから。

「ああレイヴン、加減はせず。彼はもう、始祖の隸長では在れない」

「うん。今までの鬱憤もついでに晴らしちゃおうかしらね」

「はは、それは良いかもね」

ギルドに居る時は随分と嫌われていたから。

空に向けて打ち上げた矢は墜ちて獅子の翼を抉り、地面を駆けた先に待っているのは

灰色の剣。

ざり、と引つかかる感覚にイチトシは両手の剣を離して距離を取った。力を込められた体に食い込み止まった剣は抜けない。

まいったな。

おっさんが前に立とうか。レイヴンが一步、前に踏み出すと獅子は鼻にシワを寄せて唸った。

『せかいなんて、どうでもいい』

聞こえた声に、二人は顔を歪めた。それはかつての紅の青年と同じ声。

『ただあのひとに、しあわせを、あげたいんだ』

ぐるる。唸り声に重なった言葉。

「……………過ぎた願いだ」

ずる。何かを引きずる音が聞こえた。

そしてレイヴンは思わず足を引く。イチトシの足下から這い上がるように半透明の何かが現れる。それはかつてフェローの作り出した幻影や、ノードポリカに現れた星喰みの眷属のような。

「レイヴン。この力でとどめを刺してしまうと彼は星喰みに取り込まれて、戻れない。私が抑えている間に……………お願いできないかな」

足下はすつぽりと半透明の闇に覆われ、どこか淀みを増したような灰色の髪を靡かせ

て。

「おっさんもそんな体力ないから」

「大丈夫。私がこれを出来るのも一度きり」

『しあわせ、を』

聞こえた声を振り切るように足を踏み出したのはイチトシ。大きく近寄ってくるイチトシを踏み潰そうと差し出した前脚は空を切り、残った闇が前足を絡め取り床へと縫い付ける。

じゆう。肉の焼けるような音がしてレイヴンは思わず鼻を押さえた。あれはきつと、酷い毒。

手の中のトリガーを引いた。

剣へと姿を変えた武器を手に、レイヴンも遅れて床を蹴る。

空へ逃げれば翼の付け根を取られ落ち、無事な前脚ですら半透明の闇に囚われる。カレンはわずかに残る意識で自分を捕らえる灰色の『人』を見た。

視界の端を駆ける紫が目に入り、身体の奥から熱が溢れる。

獅子の口元にチラつく炎を見てまずい、と思うが一直線に駆ける勢いを殺しきれない。

溢れた業炎に焼かれても良いかもしれない。わずかにそんなことを考えた彼の耳を鋭い声が貫いた。

「止めろ!!」

珍しい彼女の命令口調。飛んだ声に炎は消え、自分の手は深く獅子の胸元に沈んだ。ぼたぼたと獅子の口から落ちる液体を浴び、レイヴンは顔を上げた。真紅は真っ直ぐに自分だけを見下ろしている。

『裏切り者』

ただ一つ聞こえた言葉に。

レイヴンは足を引いた。

第45話

レイヴンが引いた先で獅子は倒れる。

「大丈夫だった？」

止まってくれて良かった。そう言つて微笑む彼女の目の前で獅子は光に包まれ、小さな結晶となった。聖核。カレンの始祖の隸長の証。

もうしばらくしたら精霊になってくれるんだろう。他の子と一緒に。

もうしばらくしたら。イチトシが見上げた方向を、レイヴンも隣に立って見上げた。二人が立っている場所よりもどこよりも星喰みに近い場所。待っているだけでも時間は過ぎる。待っていればそのときは来る。

何か、話さなければ。

何気なく見下ろした先でぱたり。水が落ちた。

何も考えず顔を隠すように小さな姿を抱きしめた。なんで。二人の声が重なる。

「ああもう、なんで」

鬱陶しい、と言わんばかりにレイヴンの腕の中でイチトシは目をこする。

「ごめん、ごめんね……!」

「誰も悪くないよ、レイヴン。ごめんね、最期に往生際が悪いね」

「ごめんね。オレは、君より世界を選んだんだ。ごめん——イチトシ」

わずかに震える小さな体をより強く抱きしめる。

「……ねえ、君が帰ってくるって言うから」

知った名の呼び方に。紫色を強く握りしめた。

「ごめん、帰れなかった」

レイヴンの視界の端で何かが光り、空に伸びる。決してその景色を見せないように小さな背を抱きしめる。

これが、最期、にしたくない。

心に決めた意思がぐしやりと音を立てるように握り潰される。これが最期なんて。

「ああもう、いやだな」

ねえ。腕の中、イチトシは掠れたような声で彼に話す。

「ダミュロン。ねえダミュロン」

「なあに。ちゃんと聞いている」

おどけたように。いつか。彼女の家でそうしていたように穏やかに。

空に伸びる光は強く鋭く。星喰みを目指し、一度弾かれる。ああ、どうかそのまま。

懐かしい呼び名。この時間、この場所にずっと。いつかのように。
「助けて」

ただの一言がレイヴンを貫いた。

「っ。イチトシ」

「たすけて、消えたくない、君と居たい」

弾かれた光はより強く、羽のような『刃』になつて。

「大丈夫。大丈夫よ、オレがずっと一緒にいるから」

ようやく会えたイチトシを強く抱く。

光の刃は勢いを付けるように一度星喰みから離れる。

「ずっといつしよ？　ほんとに？」

「ほんとほんと。オレ、ひどい嘘ついたけど、すぐに帰れなかつたけど、」

一度空に静止した刃は勢いを持って振り下ろされる。

「今度は、ホントだから」

強く強く抱きしめた両腕はただ、レイヴン自身の体だけを抱いた。

——ありがとう

ああどうか。嘘つきと。

臆病者と、裏切り者と。

いっそ罵ってくれれば。

彼女の遺した全てを抱いた一人の男を空から散った光が打ち据えた。

世界を覆う闇は世界を包む光となり、弾けた。

このままここに居れば。崩壊していく古代都市の中。仲間たちを乗せた大きな姿が遠ざかる姿が見える。

ただひとつ。

燕尾服姿の影が泣きじゃくる男に手を伸ばした。

星喰みは消え、世界は精霊という名の光に満ちた瞬間だった。

第46話

「何で助けるの。あの人を助けなかったのに」

白と蒼の背中でレイヴンは彼女の全てを両手に抱いたまま自分を古代都市から救い上げた姿へ言葉を吐きつける。空を打ち、光の中を飛ぶ白と蒼の姿は大きな鯨の姿をした始祖の隸長とは違う方向に向かって飛び続ける。

『それは、世界を助けあの人を助けなかった自分への問でしょうか』

返ってきた言葉に自分が乗る白い羽毛を強く握った。

返す言葉がない。

そのとおりだ。

『まあ、でも私もですね。実感が無い。貴方を落としたい思いでいっぱいのはずなのに。飽きる程の時間をあの人と過ごしたのに。私は使命を言い訳にあの人を殺すことを良しとした』

なんていう臆病、なんていう裏切り。

世界を守る始祖の隸長、精霊なら正しいんじゃないの。レイヴンの言葉にジイもま

た、そのとおりだと頷いた。ばさり、空を打ち速度を上げたジイが向かう先の景色が開ける。

ヒピオニア大陸。魔導器に頼らない村オルニオン。今は幸福の市場のメンバーと何人かの住人、そして彼女が傍に置いた味方が何人か居る。

オルニオンの入り口付近に足を下ろしたジイはそのまま足を折り、その場に寝そべった。

彼らを迎えたのは、青錆の髪を携えたギルド海凶の爪首領イエガーだった。

「おかえりなさい」

『アレクセイ様とルディアース様は？』

「現在の状況になり、先程まで争っておりまして。どちらも生きて居られます、といったところですかね」

『死んでないだけ上々ですね。アレクセイ様を呼べますか』

お待ち下さい。

オルニオンに向かう姿は何度か争った姿と同じ、だがレイヴンにとつてはいつもと全く違う姿。あからさまな道化のような態度は全く無く、かといって無感情でもない。

普通の人の。一番しつくり来る言葉に、レイヴンは胸を押さえた。ちやり、と胸元で金属が擦れ音を立てる。こんな音ですら彼女に繋がる。もう居ないのに。

「大怪我してる人間を呼び出すか……？」

こつこつと、杖をついてオルニオンからジイの前に姿を現したアレクセイは普段と違う、布一枚のような軽装——病院服のようにも見える——でその左目は包帯に巻かれ、服からわずかに見える腕にすら包帯が巻かれている。

『ルディアース様とやりあって生きている程気概のある人間なら大丈夫です』

「お前たちの判断基準はぜひ変えて欲しいところだ。それで、私に何用だ」

『私の背にくつついている男の心臓魔導器を見てください。イチトシ様は貴女と術式を組み上げたとおっしゃっていましたが……私はそんな姿を見ていない』

「私にも覚えが無いな。レイヴン、こちらへ来られるか」

名前を呼ばれてようやくジイの背から地面を見下ろした。アレクセイが無事な右目で自分を見上げている。何の話？ 首を傾げると重なった二つのため息。良いから一度降りてこい。

厳しくも言い聞かせるような言葉にレイヴンは手に持ったものを落とさないよう気をつけながら地面へと降りた。ふわりと視界を掠める服の動き。手に持った布が風邪に揺れたただけだと、自分に言い聞かせ何の用かと話しかけた先でアレクセイは式を展開する。

自分に向けられたそれにもただ無感情に見ていた。

「……ふむ。誰にも手を出せないようにしているな。この言い方が正しいかは分からないが、普通の人と変わらない動きにしているように見える。所々見たことのない術式だ。時間をかければ見ることは出来るが全体にロックをかけられている。制御も変更も出来ないだろう」

『「明日より未来、あの子には幸せが数多く訪れますように」なるほど。それも含めての言葉ですか』

「なにそれ」

『昨夜、イチトシ様が空に願った言葉です。おめでとうございますレイヴン様。これで貴方は魔導器を使えるだけのただの人間です。アレクセイ様、後の面倒事はお任せします』

おい待て。アレクセイの言葉が言い終わるを待たず、ジイはいくつもの光となって消えた。

世界を満たした光。

魔導器がなくなり、不便になった世界。空を見上げれば綺麗な青空が目に見える。

「彼女の守った世界だ。……あまり言い方が正しくないな。彼女が居なくなることです。守られたらというべきか」

「あの人は、そんなつもりじゃなかった……」

「そう。おそらくな。レイヴン、ルディアース様が決して手放さなかつた書物を知っているか？」

ひらり。目の前で振られ、落とされた書物をレイヴンは反射的に手に持つてしまう。劣化により端々が朽ちた小汚い書物。表紙に書かれた文字に見覚え無く、読むことが出来ない。

顔を上げると古代文字だ、と嬉しそうに笑つた元上司が居た。今更こんなの読んだつて。

「表紙には『星喰み』と書いてある」

「ほしはみ」

「もう不要だとルディアース様は言つていた。だが今こそ、その解説が必要だろう」意味がわからない。首を傾げるとアレクセイはレイヴンの手元に収まつた本を指差し、笑う。

「死んだ者は戻らない。消えた者は、どうなのだろうか？」

人と違う存在なら。

濁つた翡翠に僅かに光が灯り、彼は古びたその本を強く抱き締めた。

ルディアース様に見付かる前に去れ。道に沿つていけば幸福の市場の船が停泊している。アレクセイの言葉に彼は小さく礼を返し、本を抱きしめ手元の服をまとめるとオ

ルニオンに背を向けて走り去った。

その姿が見えなくなるまで送ると、アレクセイの背後に人が並ぶ。

「残酷だなあ、アレクセイ」

アレクセイと同じような服を身につけ、だが杖はなくアレクセイより包帯に包まれた場所は少ない。

「……なんとでも」

「オレはルディアースの中では弱く、自分で言うのも何だが一番知恵者だ。古代文字の解読も時間をかければ出来る」

「弱いだけ撤回をお願いしたいところですが」

「あれはただの昔話。生態についてなんて、何も書かれていなかったらう」

星喰みと名を付けられながら、書かれているのはその始まりと人間に及ぼした影響ばかり。その生態については始祖の隸長の集まりであること、そして星喰みに意思があること。

大きくはそれだけ。

「……時間稼ぎです。彼女の望みを消すことも、再び彼を殺すことも、私には出来ませんから」

「それを時の流れに任せることが残酷だと言っているんだ」

「そうかも知れませんが、私には他に彼を生かす方法が分からない」
生き延びた時の中で、生きる希望が見付かることを祈るだけです。

「だから、言つたろう。残酷だと。まあ、いい。オレは傷を直したら全力で殺しに行こう」

「……。私はそろそろ帝都に向かいます。生きている間に牢を出ることがあればまた」
「ああ、そうだな。近いうちにな」

近いうちに？ アレクセイの疑問に、ルディアースは子供のように満面の笑みで答えた。またな。そしてゆるりと片手を振って無傷な頃と同じように歩いてオルニオンに戻っていく。しばらくは夜駆け鼠共々オルニオンを拠点にする。

医療用魔導器も無い今、ルディアースの傷がいえるのは先の話だろう。

それまでに彼がルディアースより強く、そして、生きる希望を見出すことを願おう。

明日から。

投獄されるにも帝都に行くのにも体力が要る。また。と言いながらもアレクセイもオルニオンに向かって歩いた。

第47話

星喰みから世界が救われて一年が経った。

レイヴンは青い空に向けて大きく両手を伸ばした。今日は久しぶりの丸一日の休み。魔導器が無くなり魔物への防備を失った人たちの生活もある程度安定し、騎士の中で魔導器を使える唯一と言っていいほどの存在である自分に魔物の討伐が任せられることも少なくなつた。ようやく出来始めた自由な時間。

空から下ろした左手が日光を反射する。薬指に嵌った銀のリングの片割れは今、彼の首から下がる。

何年かかっても返してやる。何年かかってもこれを読み切つて。

人が誰も来ない小高い丘の上。彼は今日も朽ちた本を開く。

——にやあ。

この場所に来るのは人ではない存在ばかり。『彼』もそんな存在ではない。

「久しぶり。お前がこれを読めたら少しは早く会えたのにね」

小さな頭を撫でようと伸ばした右手は爪を出したままの猫パンチに遮られ、レイヴン

の手には赤い筋が刻まれた。

「お前と会うと生傷が増えるわね」

柔らかな光に照らされてすぐに傷は消え、刻まれた赤と同じ色を持つ小さな存在はひよいと胡座をかいたレイヴンの膝の上に乗ると本を強請るように片手を伸ばした。

「ちよつとは待ちなさいな。何もなしには読めないでしょ」

猫を落とさないよう気をつけて鞆の中をあさりいくつもの紙束と本を並べる。

「さてさて、今日は何頁進むかね。おかしな訳し方したら止めてちよーだいね、カレンにやん。」

猫は二本の尻尾を振って猫でも見える位置に立てられた本へ視線を向けた。

知識をつけた彼らが本を読み切るまで、あとひと月。

彼が再び赤の剣を手取るのは、ひと月後。

ひと月後、彼らは世界の〈敵〉となる。

?...end...?

以下、あとがき

閲覧をお気に入りにしほつても閲覧してください。本当にありがとうございます。ありがとうございました。貴方様のおかげで……形はともかくとして終わりを迎えることが出来ました。

ありがとうございます。

さて、伏線を回収もできておらず多数の疑問とモヤッと感を残したかも知れませんが物語の起源と、その後についてお話させていただきます。

〈起源〉

星喰みは始祖の隸長がエアルを取り込みすぎた成れの果て。物語上そう銘打たれておりますが、始祖の隸長は意思持つものであり世界の解放後それは形を変えて精霊となりました。

それだけの力を持った存在の集まりに意思は無いのだろうか？そう思ったのが始ま

りでした。星喰みの本体っぽいところは人みたいですし。

そしてあとは好きなキャラつめつめの救済盛り盛りの物語。

ただし、星喰みは世界の「崩壊」そのもの。生かすなら世界を捨てることになる。というのが最後のお話。

もともと、その形のまま救うことは出来ないと思っていました。

〈これから〉

当時のメモには続きがありました。小説としては書けないのでこちらにて発散致します。

レイヴンは後に本を読み切ります。もちろんイチトシちゃんを呼び戻す方法なんてありません。イチトシちゃんは穢れた始祖の隸長の集まりであり、それは既に飛散しているのです。

でも、読み切るまでの時間で考えます。世界にはまだ始祖の隸長が居るな、と。意思を持って精霊化しなかった始祖の隸長。そして新たに生まれるという始祖の隸長。呼び戻せないなら、もう一度生まれさせればいい。

ただそれに邪魔になるのが「正義」なだけと。

続きはありません。

ただし、この物語は私が大好きなのでこつそり書き直すかも知れません。今度はもつとシンプルに、もつと深く。

気力が戻ったらX2のような血塗れエンドの道も書いてみたいとは思っています。

感想の文字数には制限を設けておりますので、もし。もしも書き直した先を知りたい方や血塗れエンドを知りたい方はメールで言ってもらえた方が、反応できます。何より嬉しいです。

ぜひ。お気軽に。

あらたな始まり

「元居た場所に捨ててきなさい」

玄関で仁王立ち、更には腕まで組んだ執事に彼女は腕の中の小さな毛玉を少し強めに抱いた。それは散歩にと出かけた帝都の外で見つけた小さな命。

街道から少し外れた場所で雨に濡れながら彼女に駆け寄り、身体を震わせながらも決して離れなかった。怒られることが分かっているながら連れ帰ったがこんなに怒られるのか。

面倒は見れる。そう言うのと面倒を見るのは誰だと思ってるのか、と返ってくる。雨の中捨てたら可哀想だ、死んでしまうかもしれない。そう言えばそれが自然な姿だ、と返される。

それは確かにそうだけど。

なんとか言い負かそうと目の前で必死に言い訳を考える主人。執事は改めてその姿を見た。雨の中、小さな命を拾ってからは傘もささずに帰ってきたのだろう。灰色の髪からは雨粒が垂れ、外用の服も水を吸って色を変えている。

「その扱いはともかく、お風呂に入って着替えてください。お身体が冷えます」
「勝手に捨てない？」

互いに何歳だと思っているのか。ため息が先行する。

「捨てません。その……猫らしいのもお湯で洗って乾かしておきますから。寄越してください」

主人の手から取り上げた紅く小さな姿。首根っこを掴めば体は力なく垂れ下がり二本の尻尾から滴が落ちる。

じゃあ、捨てないでね。

何処までも子供のような言葉を吐いて主人は風呂に向かい、残された執事は猫を洗面台に連れて行く。

お湯をゆつくりとかけても猫はただ静かに座り、執事を見上げる。

「言葉は通じていますか？」

体に付いた泥を洗い流しながら猫へと声をかける。にやあ。と鳴いた猫は瞬きを返す。

「一体何者ですか、貴方は。私たちとも違う。もちろんただの猫でも無い。魔術は」

ぽつ、と前触れなく猫の目の前に小さな炎が現れ消える。蠟燭ほどの大きさの炎だが、蠟燭はもちろん火をつけることが出来る道具は洗面台にない。

体に付いた泡を最後に流して、執事は小さな猫の顔をそつと撫でる。

「あの方に付き従い、護つてくれると言うならこの場所に置いてもいい。そうでないなら今すぐ去りなさい」

赤の猫は身体を拭かれながらジイへ強い視線を向けた。きつと立ち去らないのだろう。あの主人は妙な物ばかり集める。これも、自身を守る盾としてではなくただ拾っただけなのだろう。

行き倒れを平気で拾い上げる当代ルデイアースに、似なくて良いところばかり似てしまう。もつとも武芸以外で当代を見習つて欲しいところなど無いが。何故ああも良く無いことが似てしまうのか。

口に出していた愚痴は赤の猫がその肩に飛び乗りようやく鎮まる。可愛いという感情を抱くことはもはや無いが、せめて便利であれば良い。

あ、良いなあ。

主人には貴族である以上に女性であるという自覚も必要だ。バスローブ一枚で髪も乾かしきらず上がってきた彼女の姿に一人と一匹は揃つたため息をついた。